

1330  
4

聖公會  
神學叢書  
第六卷

THE DOCTRINE OF  
THE TRINITY

新編

三位一體之教義

330-7

THE CHURCH THEOLOGICAL LIBRARY VOL. VI.

THE  
**DOCTRINE OF THE TRINITY.**

— BY THE —  
**Rev. J. R. ILLINGWORTH, M.A., D.D.**

TRANSLATED BY THE  
**Rev. YOICHIRO INAGAKI,**

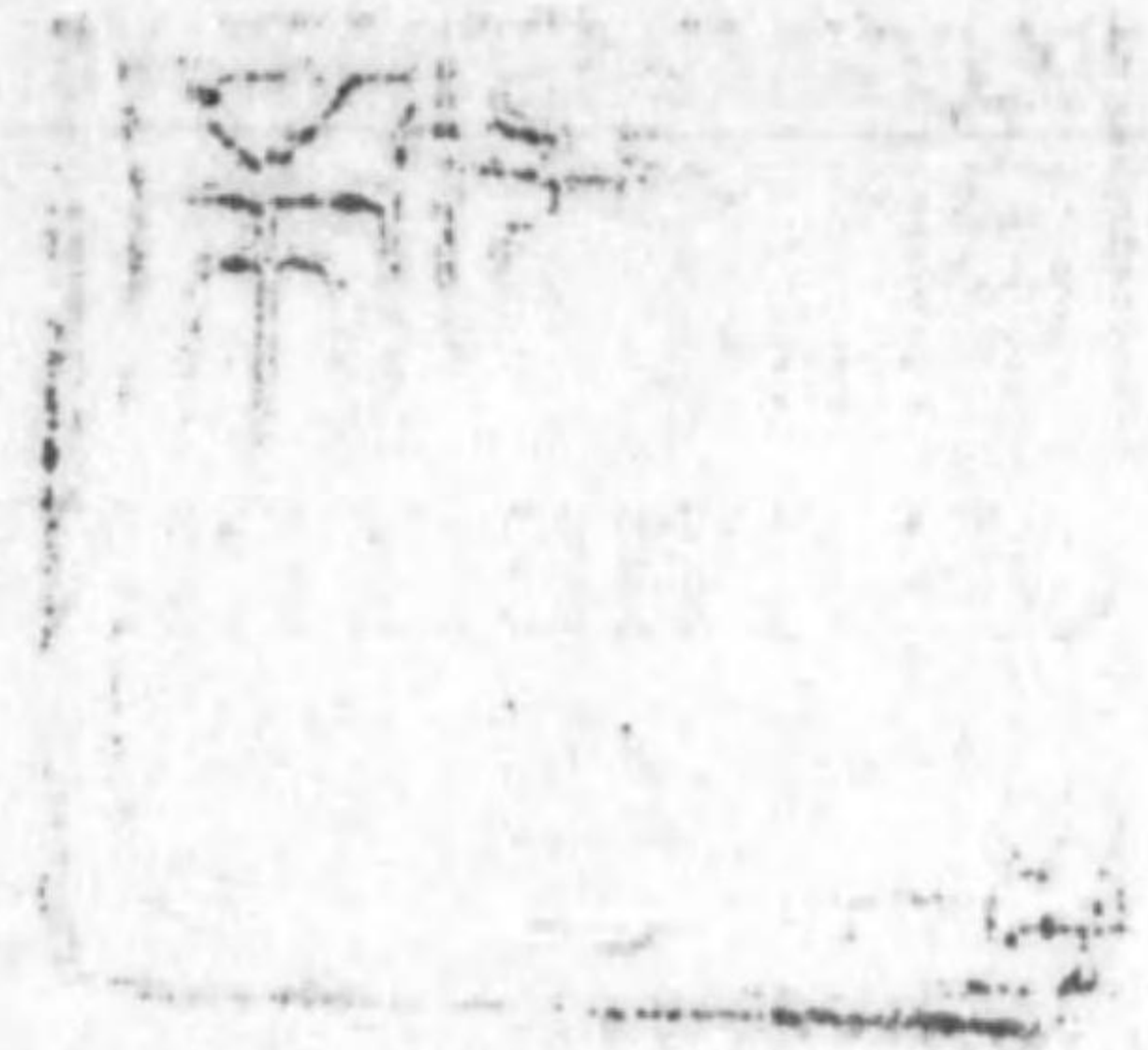
**Priest in Charge of Christ Church, Sendai.  
Instructor in Church Training School for Mission Women, Sendai, Japan.**

Published under the direction of the Committee of  
The Japan Church Literature Fund.



**SOCIETY FOR PROMOTING  
CHRISTIAN KNOWLEDGE  
LONDON.**

**THE FUKOSHA,  
1, Ogawamachi Kanda,  
TOKYO.**



*Published with the kind permission of the Author  
and the English publishers,  
Messrs. Macmillan & Co.*

英國神學博士ゼ、アール、イリングウオース著

仙臺聖公會主任長老  
傳道女學館教授 稻垣陽一郎 譯



# 三位一體之教義

聖公會 第六卷  
神學叢書

普  
光  
社

明治  
44. 1. 7  
内交

## 譯者序

- 一 曩に聖公會神學叢書第二卷發行の際、言及する所ありしイリングウオース博士の新著は、即ち此に譯出せる所のものなり。
- 二 初めライアソン長老は譯者に忠告して曰く、此書極めて難解の書なるが故に、忠實に翻譯せんよりも、寧ろ其大意を酌みて、日本文に書き直すに如かずと。されど文學書ならば兎も角、神學書に於ては、殊に此種の如き深奥の教義に關するものにありては、之を翻譯する以上は能ふ限り適確の反譯を必要とすれば、譯者は不文を顧みず、原文を其まゝ忠實に邦文に移さんとつとめたり。忠實に譯せん

せば、字句難澁に陥るの恐あり。流暢の行文を強て求めん  
ごせば、原文に不忠實なるの慊あり。行文流暢にして、  
而かも原文に忠實なるは翻譯の上々なるもの、特に難解の  
神學書に於て然りごす。此譯書果して如何ほご迄、此理想  
を達せしやは、讀者の批正を待つ。

三 譯者は妄に本書に冠するに『新篇』の二字を以せり。之  
れ譯者の知れる限に於て、三位一体の教義に關する最近の  
書たるご共に、イリングウオース博士の最近の著なればな  
り。加之原序にあるが如く、三位一体の教義は將來の神學  
論の一戰場たらんごするを豫想して、此書は新に辨證學の  
方面より論議せるものなればなり。

四 原著者の學歷等に關して、此に改めて言ふの要なかる

べし。本叢書既刊五卷中其三卷は博士の著なり。殘餘の名  
著は尖倉文學士の譯筆によりて紹介せらるごこのご故、  
讀者は博士の神學書全部の譯書を手にせらるごも遠きにあ  
らざるべし。

五 欄外に掲げし摘要は譯者が特に讀者の便利の爲め試み  
しものなり。

千九百十年昇天日

仙臺聖公會にて

譯者 識

## 原序

三位一体の教義は、基督教會史上、曾て屢論争の戰場たりしが如く、また然らんとするの兆候あり。信仰上の論争は今後暫く此に行はれんとす。余は他の問題に關して論ぜる中に、此教義に論及せしことあるも、今此に再び此題目をとりて、今日人心に存する難點を論辨せんことを欲す。余が既に他にて論述せる點は、之に對する批評に應答するの要あるものを除きては、此に繰返すことを避くべし。されど論旨中幾度にも切言するの要ある點は、再述するも却て益する所あるべし。

目次

第一章 進化は神を前定す

「進化」なる語は宗教上に用ひられて、屢默示の必要にも勝れるが如くにせら

一頁

るれど進化とは單に一個の方式に過ぎず

五頁

從て認識若くは存在に關する根本問題に緊切なる影響を及ぼすものにあらず

六頁

進化は「新陳代謝の變化に超然として不動なる一の基本實在」<sup>グラウンドリアチ</sup>を前定す

八頁

或者は更に進んで曰く「現象界には何等眞實に進化なるもの存せず、唯一個の觀念が、種々の現象によりて連續的に表現せらるるなり。而して是等の現象に連續あり意義あるは畢竟之を生せしむる力の存するに因る」と

一〇頁

故に『進化』は『黙示』よりも勝れるものにあらず

一四頁

されど一定の黙示が、如何なる意味に於てにもせよ、其内容に爾後の進化と發達ありしとせば

一五頁

之れ歴史的批評にも劣らず心靈的經驗と相關聯せる問題にして古人も尙今人を扶け得る點なり

一七頁

### 第二章 批評に於ける主觀的分子

インカーネーションは、三位一體の教義の理解せらるべき唯一の手段なり

一九頁

われらがインカーネーションを信するは、之れ主として人間の性質と要求に應ずるに因る。されど其證據を批評するとも之が妨とならず

二一頁

かゝる批評は種々の臆説を含むとするも、あまりに主觀的なるべからず

二二頁

かゝる誤謬の例證

(1) ホルツマン

二四頁

(2) ロイシ

二五頁

かゝる批評は新約書を其史的根據たる基督教會より分離する能はざらしむ

二九頁

蓋は新約書は此點に於て、他書と同一視する能はざればなり

三〇頁

故に批評家は基督教的假定を有するや否やによりて、其結論に相違を生ずべし

三三頁

そは基督教的批評はインカーネーションを以て歴史上の一事實とし、信仰によりて歴史を註解して立論するも、非基督教的批評家は之を否定すればなり

三五頁

破壊に巧妙なることは、必ずしも批評の當否を量る所以にあらず

三八頁

### 第三章 新約に於ける三位一體



パウロの書簡は基督教々義に關する最古の證憑なり

四〇頁

此證憑は父と子と聖靈の神性の區別は基督教歴史の最初の十年間に教へられしものなるを示す

四二頁

ヨハネが第四福音書の記者たることは現今英國の多數の批評家に承認せらる

四四頁

聖ヨハネは此教義を以てキリスト自から教へ給ひしものとなす

四八頁

加之、聖馬太傳には授洗式語あり

四八頁

故に三位一體の存在は、キリスト自からによりて教示せられしとする充分の論

五〇頁

據あり

復活の弟子に及ばせる影響は甚だ大にして前に諒解し能はざりし此教説を或方

五二頁

法によりて理解するに至らしめしやもしらす

反對論は新約に對して最も曖昧なる處置を爲す

五五頁

其不都合はパーレーによりて益強められたり

五五頁

概括

五七頁

### 第四章 教會師父の間に於ける三位一體

師父の傳説は使徒の見證を傳送せるものなりと主張せり。

五九頁

たとへばアイレニアス

六〇頁

アレキサンドリヤのクレメント

六一頁

オリゲン

六二頁

アタナシアス

六二頁

此傳説は、異分子の侵入により原始基督教に急激の變化の生ずるを防止せり

六三頁

各種の宗教に於ける類似を之と同様に論ずるはあまりに輕卒なり

六四頁

かくて基督教の三位一體は其よりも古き出所より借り來れるものなりとせらる

六七頁

されど新約の批評研究によりて其著作時日は古きものなりと再確定せられし結

果、此種の説を入るゝの餘地なきに至れり

六八頁

加之師父の傳説は此教義をキリスト自身より出でしとす。たとへば

ロマのクレメント

七一頁

イグネシアス

七二頁

オリゲン

七三頁

之は一大協同團體の傳説なり

此傳説は明白に且つ權威を帯びたるものにして、此教義の要體はキリスト自身

によりて教へられしものなりとの新約書の明確の證據をたしかむるものなり

七四頁

### 第五章 新約に於ける教義的發達

聖靈によりて指導せらるゝとの念は初代教會の主要の特徴なり

七六頁

されど此指導はよわき人間を器として行はれしものなり

七七頁

三位一體の教義はキリスト自身によりて教へられしと信するの理由は既に説きたり

七八頁

聖パウロ及聖ヨハネは之に新しき字句を衣せ、其範圍内に於て之を發達せしめたり

七九頁

此文句は既に廢れたる思想法式を含むものとして屢排斥せられ従て今日之を維持する能はざらしめらる

七九頁

されど此文句は其古き文意をそのまゝ把り來りて之に新なる基督教的意義を與へしものなり

八〇頁

かくて教會は之を以て聖靈の指導に依れるものなりと信せり今尙しか信す

八三頁

然るに此發達を以て誤謬なりとするものは其必然の結果として右の見解を排す

八八頁

基督教會の斷ずる所によれば此指導の結果は單に注解に止り新奇の説を作り出せるにあらずとす

八九頁

ニケヤ會議に於けるアタナシアスの用語と比較して之は相續財產監理の如きものにして新説を出せしあらざるを知れ 九〇頁

### 第六章 教會師父の間に於ける教義の發達

基督教師父は、われらが神の存在に關して知る所を肯定すされど神の性質に關しては何ら知る所なしとす 九五頁

アレキサンドリヤのクレメント 九五頁

オリゲン 九六頁

アタナシアス 九七頁

バシルと兩グレゴリー 九八頁

ヒラリーとアウガスチン 九八頁

ダマスコのジョン 一〇〇頁

之れ畢竟宗教的敬畏の念より出でたるものにして智的不知論に因るにあらず 一〇一頁

さればかれらは神の性質を彼是と思索するを避けて唯使徒的傳説に訴ふ 一〇二頁

第一に子なる神に關する教義に關しては

オリゲン 一〇二頁

アタナシアス 一〇六頁

第二に聖靈に關する教義に關しては

グレゴリー、ナジアンゼン 一〇九頁

ヒラリー 一〇九頁

ニセタス 一一一頁

以上の引照は師父全體の態度を示すものなり 一一一頁

是等は注釋の發達を示すも信仰の新箇條にあらず 一一一頁

新用語はわれらをして思想の舊形式に陥らしめんとするにあらず 一一二頁

師父等は基督教を希臘哲學より出でしとせずしてユダヤ教より出でたりとす

かつ基督教會は其初期に於て其特徴は強固にして決して當時の周圍の非基督教  
的勢力の影響を蒙るが如きものなかりき  
一一四頁

### 第七章 萬事は奥義に終る

ドクマ的定義は傳承にして説明にあらず  
故に其性質消極的にして奥義の説明を拒絶せり  
一一八頁

之れ今日にても其有効なる所以なり

基督教々義は從來唱へられしが如き外來の出所より借り來れるものにあらず  
一二〇頁

其奥義にも何等の差支なし

そは自然神學にも多くの奥義あればなり

物質科學に於けるも亦然り

三位一體教義は實際にわれらの思想を助導す

即ち神を形而上學的に絶對的存在者とする點に於て

又道德的に神を絶對に聖なるものとする點に於て

之れなくしては人間道德の好當の基礎は求むべからず

略言せば此教義は神の人格の意義を更に闡明するものなり

### 第八章 此教義の實功力

三位一體の教義は其功果に於ては著く實際的なり

之れ系統的には在來の神に關するユダヤの最高の觀念を繼承せるものなり

其内に神の聖と人間の義務を包含せり

此教義は教會總會の抽象的言明によるにあらず、キリストの具體的表明に基け

り

其人々に與へし所は

(1) 神の父なることに關する一層充分なる觀念

(2) 神との交通の念

(A) インカーネーションによりて

一四三頁

(C) 贖罪によりて。之は父と子との愛より出でしもの

一四六頁

(B) 世界に多大の力たる聖奠によりて

一四八頁

(3) 個人、聖書及教會に於ける更に高尚なるインスピレーション

一五一頁

故に此教義は歴史的に其最も實際的なるを證す

一五四頁

### 第九章 其價值は其眞理を假定す

此教義の實際的功力は其眞理の假定を作るものなりと既に述べたり之れ果して  
正當なる乎

一五七頁

價值の斷定と眞理の斷定との區別はカントよりロツチエを経てリツチユルに到  
れり

一五七頁

されど之れ誇張すべきにあらず

一五八頁

そはすべての斷定は畢竟人格的なり即ちわれらの全人格より出づるものなれば  
なり

一五九頁

殊に宗教的斷定に於て然りとす

一六〇頁

されど身位Positionとは一個の合理的の世界に於ける一個の合理的の住者たると共に

一六三頁

又一個の心靈界に於ける一個の心靈的住者なり

一六四頁

而して人の理性は此兩者の合一を要望し心靈的價值を有するものは又合理的に  
眞理なるべしと要求す

一六四頁

たとへば若し此世界は合理的に秩序整然たるものなりとせばわれらの心靈的生  
命に對する神の價值は神の存在を假定し得べし

一六五頁

故にわれらの道德的及心靈的渴仰を合理的に満足せしむる唯一の宗教の下に横  
はる教義は眞理なりとの假定は成立すべし

一六七頁

他の宗教たとへば佛教及回々教も其歸依者を等しく満足せしむるにあらずやと  
の反對説

一六九頁

されど佛教の據りて立つ所は世界は非合理的なりとの信仰なり

一七一頁

回々教は人間の人格の権利を否定す

一七三頁

されば兩者とも理性の要求を満足せしむる能はず故に是等は相對的宗教なれども、基督教は之に反して絕對的宗教として存在す

一七六頁

### 第十章 此教義の智識的關係

三位一體の教義は元來實際的のものなれど又思辨的の價值を有す

一七七頁

蓋絕對的人格に關するわれらの觀念を補助すればあり

一七八頁

此絕對的人格が被造物によりての制限は之れ唯任意的の自己制限也

一七九頁

われらは神は其創造に超越すと考ふ

一八三頁

同時に亦其創造に内住すと爲す

一八四頁

前者を孤立せしむるときは宇宙神教及び不可知論に到らしめ

一八五頁

後者を孤立せしむるときは汎神論に陥らしむ

一八六頁

されど三位一體の教義は此兩者を調和せしめ

一九一頁

インカーネーションを見るに神の内住の絶極となさしむ

一九三頁

インカーネーションの見解を以て人間の罪に超然たるものありとす

一九三頁

論じて此に至るときはアレキサンドリヤ及スコタス派の見解に想到せしむ

一九三頁

かくの如くインカーネーションを見るときは之れ單に人間進化の一段階にあらずして之れ神が人間創造完成となすを得べし

一九六頁

之れわれらの智力を開發するものなり蓋之れ單にわれら自身の思辨的演繹の結果に非ずして全く一個の新題目ダイキムをわれらの思想に供すれば也

一九七頁

### 第十一章 創造行の繼續としての默示

歴史的事件によりて興へられし黙示は近時屢心靈的なること少しとせられ従て單に人の心に興へられし黙示に比して信するに足らずとせらる

一九九頁

されど之れ果して眞實なりや將哲學的なりや

二〇一頁

蓋心靈的生命はすべて物質の手段によりて仲介せらるればなり

二〇一頁

故に黙示は恐らく此兩者を包含し一個の歴史的人物より伸延し得べし

二〇三頁

されど歴史に於ける神の干涉は、われらの經驗に反するものとして嫌忌せらる

二〇四頁

而も創造に於ける各程次は過去の經驗より新生面を開きしものなり

二〇五頁

インカーネーションはかくて一個の新物を紹介する創造に於ける一程次なり

二〇六頁

「何故に人は生存する乎」の目的論より來る疑問は放棄すべからず而て此事はイ

ンカーネーションの如き一個の黙示の可能なるに想到せしむ 二〇九頁

われらは常に過去によりて現在を判斷する能はず 二一三頁

過去の黙示は必ず過去の考察法によりて解せざるべからず。たとへば

メシヤ侍望の如き 二一五頁

奇跡 二一六頁

ロゴスの觀念の如し 二二〇頁

今尙世界に生ける教會を通じて現在のわれらに訴ふ 二二二頁

## 第十二章 總括と結論

目的論よりする世界觀は物質的見解の爲に時には勢力を失ひしことなしとせざるも其無上の興味は決して亡するものにあらず 二二四頁

基督教黙示の證據論は此目的論的假定より近かざるべからず 二二七頁

加之基督教信經は初より教義としてわれらに來らず一個の社會として來り、其

の社會の生活は之が説明なり 二三三頁

而て其社會の會員の品性によりてわれらに推薦せらる 二三三頁

されば之れ人間の人格を最高の度に實現せしむべき也 二三四頁

之を實現するに當りて其端緒を開くものは人にあらずして神なり 二三六頁

基督教默示の特殊の證據は更に又人生の目的は如何との目的論的問題に對して此實現が與ふる解答によりて確實にせらる 二三九頁

以上

新編 三位一體之教義 聖公會 神學叢書 第六卷

第一章 進化は神を前定す

進化なる語は宗教上に用ひられて、屢默示の必要にも勝れるが如くにせらる。されど進化とは之れ一個の方程に過ぎず。從て認識若くは存在に關する根本問題に緊切なる影響を及すものにあらず。進化は「新陳代謝の變化に超然として不動なる一の基本的實在」を前定す。或者は更に進んで曰く「現象界には何等眞實に進化なるもの存せず、唯一個の觀念が種々の現象によりて、連續的に表現せらるゝなり、而て是等の現象に連續あり、意義あるは、畢竟之を生ぜしむるの力の存するに因る」と。故に「進化」は默示よりも勝れるものにあらず。されど一定の默示に如何なる意味に於てにもせよ、爾後の進化と發達ありしとせば、之れ歴史的批評にも劣らず心靈的經驗と相關せる問題にして、古人も尙今人を扶け得る點なり。

ニューマンが基督教々義の發達に關する有名なる説教によりて、牛津大學を震駭せしめてより、既に六十年餘を経たり。彼は當時ドグマは管に『努力と躊躇と中止と障害の間に左往右動しながら』『進化せり』と告げしのみならず、其經過は



ニューマンの進化説

われらの今日推論的なりとするものなるを指摘して『一個の命題は必ず他の命題を呼び起し、更に第二第三に及ぶ、かくて或制限を要するに至れば、以上の相反するもの、互に相連結して、此に原來の概念より或鮮新の進化を現出するなり』と曰へり。彼は其哲學的達見を以て當時既に發生の徴あり、後には其時代の全思想を激變せしめんとせる此概<sup>ゼテラルプリンシプル</sup>則の作用を自家専門の研究に於て洞察したり。此原則をして一般の公有物たらしめしは、科學者及び科學の哲學的説明者なりしとするも、之を初めて唱導せしは、實に此一個の神學者なりし也。されば進化説は、決して他方面より新に神學史界に輸入せられしものにあらず、獨立に神學史より暗示せられしものにして、六十年前には、あやしげなる新説として、却て多くの人々に危ぶまれしも、六十年後の今日に至りては、何人も首肯する常説となり終れり。進化論は今日流行の絶體命題にして、有機體、制度、習慣、藝術、科學、社會等、皆其發達の徑路をたづねて、史的に研究せられつゝあり。かくて同一の原則は自然に宗教上の行事及信仰に適用せらるゝに至れる結果、宗教全般の進化、及び其各項目、即ち拜式、祈禱、聖奠、神の觀念等の

進化原則の應用

進化に關する論議の多く行はるゝを見るに至れり。

故にわれらは、宗教史にも發達あり進歩あるを認むるの必要を唱導するの要はあらざれども、之に反して唯恐るゝ所は、却て之を過重せんとすることなり。それは基督教々義は或種の發展を爲せるものなりとの事によりて、屢三位一體及インカーネーションの教義を説き去らんとするに利用せらるれば也。此説によれば、キリストは單に他に比なき宗教的達觀を有せし一個の善人に過ぎずして、初め弟子及び其後繼者らによりて尊崇せられしが、偉人を神化するに容易なりし當時に、朦ろげに神と崇められしが、遂に希臘哲學の感化の下に基督教信經の中心に眞の神よりの眞の神とせらるゝに至れるなりとす。固より此説には何らの奇なし。之れ古のユニタリアンの立場に過ぎざればなり。唯斬新なる點は進化の過程<sup>プロセス</sup>に關する近世智識より其論據を抽出せりと云ふ點にあり。かくて基督教々義全部は進化せるものなりとせらる。されど何より進化せる乎。

此假説によれば、其始源には次期の發達の萌芽<sup>ゼヤム</sup>を含有しあらず。故に此場合には、思想の進化なるものはあり能はざるなり。何となれば、進化の初期に於て、

真理の轉倒即ち事實を偽り示して、單に人なりしものを神とするに至りたればなり。而て發達せしは此虚偽にして、其背後に存する事實を偽るを以て發達の自然の方程なりとなす能はざるなり。凡そ眞正の進化とは、其始源の漸次の展開と不斷の連續を意味すること、恰も樅實が樅となるのみにして蝶とならず鳥とならざるが如し。眞理は正當の結果に發達し、矛盾に終らず。故に基督教々義の進化を云ふとき、若し進化の起源がキリストの生涯にありとせば、(常に然りとするが如く)われらは此に進化なる語の其科學的の意味に於て用ひられずして、單に思想の混雜を示すに過ぎずと主張せざるべからず。之に反して若し進化なる語を起源の展開として、嚴密の意味に於て用ふるときは、其起源はキリストの生涯にあらずして、後につくられたる虚偽なるべし。誤謬は既に成されたり。而も其誤謬が發達する間には進化作用なるものあり能はざるなり。蓋は近時の哲學諸家の謂ふ所の進化とは、單に一個の方式メソッドに過ぎずして、何物を創造せず又創造する能はずとのことを特殊の場合に適用して確説するに過ぎざればなり。かくて進化の程次の終に於て、發見する所のものは、其の始に於て既

に萌芽として存せしものならざるべからず。進化なる語は手品師のハンカチーフの如く其裏にて或品を全く種類の異なるものと代るが如くに用ふる能はざるなり。

之れ畢竟するに進化説は其普く人口に膾炙するに及びて極めて漠然たるものとなり、従て實際の範圍を脱するに至れるによる。故に此説を基督教々義に適用するとの可否を論ずるに先ち、此に普通進化論に關する二三の注意を與ふるは無用の事にあらざるべし。之が爲に引照を爲して、われらの所論の全く根據なきにあらざるを示さん。

近代の一哲學は認識論に關して、左の如く云へり。曰く

先づ心的發育説は、自我論に關して一層好適の説明を與ふるとするも、認識する主格と認識せらるべき物格との間に存する根本的關係に何らの影響を與へざる也。

更に發育説は、空間、時間若しくは原因の如き公準が生長する意識の中に發生する經過を尋ねしむるを得るとするも、以上の想念の最終物に何らの影響

を與へず。又其認識作用との間に存する關係にも何らの變化を及ぼさざるなり。

進化の基  
本的實在

進化説は  
認識論に  
影響を與  
へず

略言せば、進化説によりて物質的に影響をうくるが如き智識の根本條件若くは關係は存せず。却て是等の條件及關係は、發育が成就せらるゝ變化の間にも比較的に不動也。更に一層幽玄なる形而上學の立場よりするときは、進化の觀念其ものも智識によりて斷定せらるべきものにして、相對的方法を絶對的の經驗の上に立てざるべからざること認識論上必要なときは、其と同時に世界の進化的形狀を一定不動の基本的實在物、即ち變化の上に超然とし、又之を包容するものと相聯關せしむるの必要を生ずればなり。故に進化説は、近代の科學的觀念をつくるに與りて力ありとは云へ、實は認識論に關する根本問題に著く影響を與へしと云ふ能はざる也。智識の條件及び智識と經驗との關係は、古の希臘時代より、其實質に於ては少も變化せることあらず、又今後とても智力活動に影響を與ふる激烈の變化を生ずるまでは然るべし。而かもかゝる變化は生ずべくもあらず、况んや、進化説を能ふ

限り如何に擴大したりとてさる事はあり得べからざる也（オルモンド「フハン智識の基礎」九頁）。

此に注意すべき二點あり。第一は「心的發育論は認識主格と其客觀的内容の間に存する根本的關係に何らの影響をも與へざる」との事是也。假令ば大人は子供よりも多く世界に關する智識を有す。されど、世界は大人及小供に對して認識せらる對象として存するに於ては何らの相違なし。而て世界が彼等に對してかくの如き關係に於て既に存在せしにあらずば、彼等の智的發育は不可能の事に屬す。或は科學者は自家専門に於ては常人よりも多く知る所ありとするも、畢竟之れ研究せば、知ることを得べき宇宙の一部として、其専門に屬するものが既に存せるに因る。更に他の例を以てせば、望遠鏡の改良と天文研究法の進歩は近時非常に星學に關する智識を増進せり、されど之れも畢竟するに星宿が存在し、天體の秩序整然たり、從て學者をして、觀察するに至適のものを供ふるが故なり。かくの如く以上種々の場合に於ては、皆等しく此「客觀的内容」に對する根本的關係は、主格若くは機具をして發達するを得せしむるものなり。

即ち智識はわれらに解せらるべき宇宙を離れて發達する能はず、又遠望鏡も星宿を離れて改良せられ得ず。換言せば智識の進化は、進化の經過に超然として、無關係なる一物體との關係を預定するものなり。別言せば、之れわれらの全體の範圍内に於ける一種の智的作用にして、之を可能ならしむるは知らるべき全體が預め存在するに據れり。

第二はあらゆる變化に超然とし、又變化を包含する一定不動の基本的實在の必要也。之れ明にプラトール及びアリストールの認めかつ言明せし所にして、爾後凡そ哲學と稱するに足るほどのものにより曾て否認せられしことなき所のものなり。アリストール曰ふ『實在は潜在の前に來らざるべからず』と。其意は恐らく字義通りの宇宙の進化なるものは、われらの思ひ及ぶ能はざる所なりと云ふにあり。希臘人の言へるが如く、われらは存在するものと、存在せざるものとの間に架橋すると能はず、又此に言ふ作用の始まる前、而てかくの如き作用が必然生すべき一切の結果を生ずるに適せる或精力の作用なくしては潜在より實在に架橋すること能はざるなり。われらは實在物が偶然に或物を生せしむる事

二、基本的實在の必要

アリストールの説

下等形態の進化と基本的實在

は假令其事件發生の經過を詳に尋ね得ずとするも解し得べし。されど之に反して右の順序を轉倒し、實在物總體は皆漸次に進化せるなりと云ふは全く無意義なり。さればもし存在物の總計を稱するに、宇宙なる語を用ふるとせば、發達は宇宙間に生せりとするも解するに難からず。されど宇宙は發達せるものなりとは決して解すべからざるなり。之れかゝる事件はわれらの想像以外なるも、或は生ずるやも知らずと云ふにあらざして、若し人間思想の法則が正確なりとせば、かくの如きことは恐らく生じ得ざるべしと云ふにあり。加之かくの如く全體に關して眞實なることは、其部分に關しても亦眞實なるべし。詳言せば、理想的にも又實際的にもすべて全體たる基本實在中に既に存在せざる部分的の進化とはあり得べからざるなり。如何なる下等形態にても、基本的實在の能力によるにあらざれば、高等形態に進化する能はざるなり。一個の木若くは花たり得べき種は、其存在の當初よりしてしか成り得べき力を含有せり。而て其力なる微分子は「製造せられたる物」なり。假令時として進化の期間に於て、動物の本能が遂に盲目的に人間の理性に發達せり即ち無分別が意

識せる目的に發達せるが如くに謂ふもの偶なきにあらざれども、盲目的若くは無意識の目的なるものはあり得べからざるなり。蜘蛛が巢を作り、蜂が其巢を構ふるが如き、本能的の舉作、或は目的を有する舉作、即ち其目的に就ては當事者は之を意識せざるも、其の直接當事者の背後に存する基本的實在が、目的を有するを示すものならざるべからず。かくて若し萬一本能が理性に變ずることありとするも、畢竟之れ本能そのものは理性の産物に外ならざるに因らざるべからず。世に進化法と稱するものに於けるも、亦た之れに同じ。十八世紀の宇宙神教論者は、世界を觀じて、之れ一個の器械が一度運轉し初めてのちは、自動しつゝあるものごしたり。是と同一の條理は屢進化論者の間にも繰返さる。如何なる第二次原因の行動も、必ず常に第一原因に關聯せしめず考へ得べからざるが故に、進化法に於ける各時期は皆等しく其基本實在と相關聯せしめざるを得ざるなり。

進化の各  
程次と基  
本實在と  
の關係

進化の徑  
路に於け  
る種の類  
似の性質

此事實を認むる結果、多くの獨立思想家のうちには、進化徑路に於て、或一の種スベシスが他の種より物質的に抽出せられたることを全然否定し、かつ兩種間に見る類似

は、之れ物質的にあらずして、理想的若くは合理的關係を示すものなりとせん  
とす。之れは人工に於て屢々見る所なり。博物館に入りて、器具や細工物の年代  
的に配列せられあるを見るべき、大變化は、常に徐々の變化若くは改良により  
て成れるものなるを知るを得べし。即ち何物にても其發達の徑路の始と終の間  
には、前の状態よりは稍進歩せる多數の中間連鎖ありて、存するを知るなり。  
之は軍器、樂器、工業器械若くは交通機關、航海器、又は計時機等に於て容易  
に其例を見るを得べし。されど是等各個の間に何等物質的の關係あるなし。琴  
はビヤノに變ずることなく、火繩銃は後裝銃に轉することなし。兩者の關係は  
唯人の心中に生せる理想にあり。而て後者が前者の幼稚なるものより進化せり  
とせば、そは徹頭徹尾、全く理性によりて行はれたるものたるべし。かくの如  
く種と種との間に物質的の關係よりして、一は他より出で來れりと論せらるゝ類  
推も、其實は基本的實在の理想的結果を示すものたるに過ぎずとするは、少な  
くとも諒解し得べきことなり。されど此特殊の進化説を採用すると否とに關せ  
ず、進化の過程に於ける各期間と各状態は、皆等しく其基本實在と相關聯せるも

のなるを記憶するは必要なり。  
以上の説を説明する爲に、更に他の有神論に關する哲學者の言ふ所を左に引用せん。

『假令ばシムフォーニーの如き音樂上の作曲を見よ、其後半は前半部によりて成されず。却て前半後半とも音樂上の觀念と法則の下に従ふべきものにして、其原因となるものは他にありて存す。若し其曲中特殊の一節をとりて之は特殊の創作なりやと問はば、答は問ふ者の立場次第にて然とも又否とも與へらるべし。各節とも皆曲全體の主旨に合するやう配整せられしものにして互に無關係にあらず又不規則にもあらずる點よりせば、之を以て特殊の創作なりと云ふを得ず。されど各節とも、其特殊の目的なくば曲中に在り得ざる點よりせば、之れ特殊の創作なりと云ふを得べし。かくの如き作曲にありては、進化なるものはあり得べからず、唯音樂上の構想を連續的に味ひ得べきのみ。前曲は後曲によりて活氣を與へられんとは期せず、前曲後曲共に作曲家、若くは演奏者によりて一個の觀念の下に奏せらるべし。即ち演奏のつゞけらるゝは演奏者の目的意志

及觀念によるのみ。

之と同一の結論は宇宙を現象として解するに用ひられ得べし。此の場合には、進化とは、其過程以外に存する原因の連續せる表現に過ぎず。進化の諸形狀中には何ら活力上の關係を有せざることは連續せる音樂の譜節に於けると同じ。されど此點よりせば、此各過程は特殊の創造にあらざるなり。全體が司配せらるる法則に従ふものとしては特殊のものに非ず。されど一個特殊の具體的事實としては特殊のものなり。現象界にありては、何物も實際進化せず、唯一個の觀念は現象の相次で生ずる間に示さる。即ち其現象の相連續するも又其意義を有するに至るも畢竟するに是等の現象を生せしむる能力の存するが故なり。上述の如き次第にて如何に進化なる語の曖昧なるかを知るべし。宇宙の原因は宇宙の現象の中にあるが故に、一時的の所因は力學的に一時的の結果を決定し又生出するは無論の事として認めらるゝも、かゝる見解は形而上學者の斷然排斥する所なり。各現象の原因は現象にあり。各現象の關係は力學的にあらずして論理的にかつ意匠論的なり』(ボウエン「有神論」百七頁)

進化の基本的實在は神の名に別

扱哲學者が、すべての進化の條件として必要なりとする此基本的實在なるものは、勿論之れ有神論者が神とするものを抽象的に名づけしものに過ぎざるなり。以上の引用を爲せるも、畢竟するに哲學上よりするときは、進化は神に論及せざるを得ざるの事實を確めんが爲に外ならざりき。進化は何物をも創造せず、又何物をも發明せず、又何物の原因ともなることなし。これ單に神の目的が生存界に漸次に示啓せられ、又智識界にありては、人々に漸次に理會せらるゝに至れる方法に與へし一個の名稱に過ぎざるなり。

進化の定義

進化に訴へん過誤

今此に再び宗教及神學の方面に復へりて論せん。神に關するわれらの觀念と神の存在を信するにより生ずる種々の制度及習慣從て宗教を形成するに至るもの、價値を以て、是等は皆幼稚粗野なる起源より進化せるものにして、其起源以上に上る能はずとの論據より論じ去らんとするは、今日常に見る所なり。されどかく進化に訴ふることの過誤は既に上述の理由によりて明なり。プラト一時代に物質論者ありし以來、今日に至るも、尙其跡を絶たず。されど近代の物質論者は進化論を利用したりとて、其前行者に勝る武器を得ざるなり。そは

前述の如く進化論は何らの起原をも説明する能はされば彼等にとりても何等のたすけともなる能はざるべければなり。一瞬間に生じ能はざるものは、極めて長日月の間に生じ得んかと思ふは頗る皮想の説なり。然るに形而上學にてすべての進化は必ず基本的實在を前定することあるは、之れ時間に超然たるものなり。換言せば、進化徑路の長は其徑路に必至なる最初の條件に影響を及すことなし。されど進化は宗教と神學に關する物件を論じ去るを容易ならしむるものなりとの幼稚なる謬見を打破するには是以上論するの要なからん。

進化と天啓

されど、尙此に進化に關する近時の研究より生せる宗教上必要なる一問題あり。基督信者として、われらは天啓レベレイションを信す。即ち真理の或物は天啓によりて與へられ、之によらでは、他に之を知るの方法なきを信す。唯問題は天啓真理は爾後の發達を許すや否やにあり。たとへば三位一體の教義の如きは、其用語としてサブスタンス、パーソン、イターナルゼチレション、サーカムインセンション、ダブルプロポジション、生、二重出生等の如き専門語を採用せる結果、著く發達を遂げたり。以上の如き新語は常に幾分か新思想を示す。加之其語も其思想も元來希臘的にして、此の教義を當時の哲學思潮に投合せんとて出で來

りしものなり。されど此發達に於ける萌芽は何物なりし乎。而て若し其發達にして合理的にして又避くべからずかつ必要なりしとせば、其結果尙之を天啓真理と稱し得べき乎。或は之れ單に人間の考案に出でしものにして、今は下火となりしが一時は勢力ありし思想にして、若し本來の天啓の種元にして再び見出さるゝときは、むしろ放棄せらるべきものなりや。是等は今日まで既に論争せられ來りし問題なれば、今此に三位一體の教義に關聯して併せ論せんとするに當り、インカーチーションの教義も之と關聯し來るは勿論の事たるべし。

されど論點を進むる前、一事の注意を要するものあり。即ち近世の知識は、一般に前代よりも多大なり、從て諸問題に關するわれらの知識は、古人よりも遙に勝れりとする世間通有の臆説之れなり。物理学、考古學、又は批評的學力の部門に於ては、此事全く眞實なり、されど此にわれらにとりて最も肝要なりとする一部門にありては此の事然らず、宗教の部門、即ち靈魂の望と恐、其の試と誘、其苦悶と歡喜、其信仰の高さと愛の深さ等の心靈的歴史に於ては然らず。今日のわれらも、是等の事に關しては多少知る所あり。されどわれらは古の人

宗教經驗  
に於て今  
人古人に  
及ばず

古人は心  
靈的専門  
家

々の知らざりし多くの興味の爲に亂されて、彼等の如く内部生命の爲に全力を集注する能はざるなり。われらは科學者たり得べし、されど彼等は心靈上に關しては専門家なりき。われら心靈上の欠點を感ずるとき、約百記、詩篇、アウガستن懺悔錄、或は聖ベルナード聖フランシス、聖カザリン聖テレサ、或は神ゼテ曲ウパルン、コンデー、天路歷程ゼゼルグリス、フログレス、キリストの摸範等の古人の古書に往くは、其何よりの證なり。

扱此人間の心靈的經驗は、之に伴ふ一切の思想と共に、畢竟するに經驗の總計中の最も肝要なる部分にして、科學的知識は僅か其一部分に過ぎざるなり。而てわれらの世界觀、われらの竟極哲學は之れ此經驗の全總計の上に築かるゝものにして、其一部の上に建てらるべきものにあらざるなり。宗教上の問題に關してはわれらが最後の控訴を爲す所は生理學者や、心理學者が言ふ所にあらずして、此竟極哲學即ち人生を全體としてみしわれらの人生觀にあり。

わが實力よりも、われらは尙多く知るが如く思ふは人の常なり。從て宗教は人間の創作なりとして説明し、若くはキリストの生涯は單に人間的なりと證せん



とするは、之れ奥義ミステリを一切掃ひ去りて、人をして容易く諒解せしめ得べき言語に移す所以なりと人は早合點す。されど實際人生は、其の不可知の起源と不可知の運命、崇高なる能力と其の慘憺たる失敗、其際限なき向上心に比べて之を實現するの極微なる、其崇嚴と卑劣、其聖成と罪等の不思議なる按配を以てして、われらの知れる範圍に於て最も大なる奥義ミステリなり。「最大問題は人なり」グラント、プロフンダ、エスト、ホモ。凡て何事にても人事に關することは皆奥義的なり。加之此奥義の中心は、驚くべき進歩を爲せる何等の科學の領分内に横はらずして、却て宗教と竟極哲學の領分中に在り。假令ば基督教の歴史的研究及其古文書の批評等も、終に一種の天啓又は一種のインカーネーションの偶生は有り得べきことなりとのわれらの見解に到達せしめんとするなり。是等の諸問題は外界に關する智識の増進によりて影響をうけざるも、人類の内部的の經驗によりて、大に影響をうくるものなり。故に是等の問題に關しては心靈的生活に於ける古代の先輩よりわれらは尙多く學ぶべき所あるを念頭に止めざるべからず。

## 第二章 批評に於ける主觀的分子

インカーネーションは三位一体の教義の理解せらるべき唯一の手段なり。われらがインカーネーションを信するは、之は主として人間の性質と要求に應ずるに因る、されど其證據を批評するも之が妨さならず。かゝる批評は種々の臆説を含むとするもあまりに主觀的なるべからず。かゝる誤謬の例證

- (1) ホフマン
- (2) ロイシ

かゝる批評は新約書を其史的根據たる基督教會より分離する能はざらしむ。蓋は新約書は此點に於て他書と同一視する能はざればなり。故に批評家は基督教的假定を有するや否やによりて其結論に相違を生ずべし。そは基督教的批評はインカーネーションを以て歴史上の一事實とし、信仰によりて歴史を注解して立論するも、非基督教的批評家は之を否定すればなり。破壊に巧妙なることは必ずしも批評の當否を量る所以にあらず。

有神論者は皆歴史と宗教思想の進化と稱するもの、背後には、神のみわざ即ち天啓の分子あるを認むるは常なり。之れ進化法は皆基本實在と相關せりとの前論と其主旨を同ふするものなり。されど人心の作用は誤謬なきを保せず。時としては智的に、時としては道徳的に、又た時としては感情的に種々の偏見謬説

に陥ることあり。されば此進化に關しても、之を以て單に神の默示が、人心に反映せるものなりとして論ずる能はず。そは其反映たるや、屢支離滅裂にして、默示が罪ふかき人格を通じてあらはされんと苦心する結果、牽強附會人を過らすものあればなり。之れ進化の全過程は、單に人的進化の過程なりと主張する説が、人心に投せしむる所以にして、人的分子は此に神的分子よりも遙に明かに見ゆ。されど一旦インカーネーションに來るとき、之を基督信者の立場よりするときは、全く之と異にして、ブラウニングの歌へるが如く

「真理」にて在ます彼は

また「道」にています

こととなり。神は此に罪を知らざる一個の人間の人格によりて自から語りたまふ。従て人間の欠點より來る一切の牽強附會をみす。其結果として默示は此に從來のものど比ぶるときは、單に其度に於て異なるのみならず、其性質に於ても異なり。而てかゝる默示によりてのみ、初めて三位一體の教義に含まるゝ如き神の性質に關する智識は得らるべきなり。

默示と三位  
一体の  
教義

「神昔は多くの區別をなし、多くの方を以て預言者により列祖に告げたまひしが、この末の日には其子に託りて我儕に告げたまへり、神は彼を立て、萬物の嗣とし、且つかれを以て諸の世界を造りたり。彼は神の榮の光輝その質の眞像にて、己が權能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨を爲して、上天に在す威光の右に坐しぬ」(希一〇一—四)。

げにかくの如きは、之れ洪大なる信仰たるに相違なしとするも、同時に之れ人間の原來の創造に關する洪大なる奧義に光明を投ずるものなるをわれらは知る。そは若し人生は單に此世に限らるゝものどせば、其小き運命を果す爲に過分の賜は賦與せられありと感ずるも、インカーネーションの光明に照らしてみるときは、人間の原來の創造は又其故なきにあらざるを直ちに知るを得ればなり。かくて此インカーネーションを受認すると否とは、之れ主として人間の心靈的性質と其欲求の分析に基く竟極哲學の如何によるは、既に述べたるが如し。而て此心靈的性質と欲求に關しては、單にアタナシアスやアウガスチンのみにても、彼れ等は近代の批評家と比肩して決して譲るとなき有力なる審判者なり。され

基督信者  
ミインカ  
ヨネーシ

どかくの如き哲學的先入觀念の存するあればとて、インカーネーションの事實が依りて立つ歴史的證據を精査するの必要なしと云ふ能はず。况んや今日の如く其證據全體が批評の銳鋒を受けつゝある時に於てをや。かゝる時に當りて基督信者は世の何人よりも勝りて、おのが信仰の立場を精査せんとするなるべし。そは此信仰は、彼にとりては、他の何人にとりてよりも尊くして、之れ其希望、其生命其全てにして、若し問ふものあらば「其信仰の理由を告げざるを」得ざればなり。されど批評とは必ずしも單に一方にのみ偏するものなりと思ふべからず。其竟極の結果は、或は建設的にかつ積極的ともなるべく、又破壊的にかつ消極的ともなるべし。而て建設せんとするには、其否定する所を批評せざるべからざるが故に、かつ否定は今日の如く甚きは未だ曾て見ざる所なるが故に、此點に於て多少論ずるの必要あるを見るなり。

之に先ち記憶せざるべからざる一事は、凡て過去の歴史を現在の實事として描き出さんとするには、幾何かの假定に依らざるべからざることなり。新約書の場合に於ては殊に然りとす。即ち欠陥せる所は補充せざるべからず、對立せる

批評の竟  
極の結果

意見は調和せざるべからず、證據は輕重相量らざるべからず。典據は鑑定せざるべからず。之が爲には屢々一種の假定を用ふるを要す。されば基督教辯證家が、反對批評の假定に答ふるに當り、其場合に必要なる他の假定を以てすることありとも之を非難すべからざるなり。然るに此假定なるものは、之を用ふる人々の心的特質より生ずる主觀的分子によりて着色せらるゝとあるは屢なり。而も史的批評の目的は實際生ぜし事件を再現せんとするにあれば、此主觀的分子は能ふ限り少なからしむるを務め、已むを得ざる場合にても、其事件の真相を保存するやうつとめざるべからず。而かも以上兩面の義務は、今日相當に實行せられあらず。個人的私見は、科學的批評の名稱の下に到る所に横行し、又「事實」なりと彼らが引用するものに、如何ほごまで理論が混入せるかを悟らざるもの多きは、今日の批評に見る所なり。今一二の例をあげて之を示さん。

多くの批評家中、其代表的のものとして著名なる一批評家（オ、ホルツマン）の例をとれば。彼は山上垂訓と約翰傳に於ける論議中の一節とを相對照して「是等の二個の事が、同一の人物より出で來るとは心理上不可能の事に屬す」と云ふ。

批評と洞  
察力

之れ一見科學的なきこゆれども、此断定には、批評家たるものが、他の人の思考若くは言論にあるものと其然らざるものとを相當に判断するの技倆を含めり。されど若し批評せらるゝ人物が、プラトリーヤ、セキスピヤヤ、聖パウロの如き無上の大才を有する人の如き場合には、われらは批評家の最大なるものにも、かゝる人物を評する洞察力を有すと容易に許す能はざるなり。そはかくの如き人物は常人の期待を顧ず、又毀譽褒貶に超然たればなり。されば苟も精神に異狀を有せざる限り、人となりし神、若くは人となりし神なるやも知らざるものの場合には、之を批判するの明ありと敢て放言するものあるべきや。其然らざるは固より明なり。故にインカーネーションの問題の生ずるとき、其議論の確定せらるゝ前に却下せらるゝは常にして、かゝる事はあるべからずとし或はかゝる事は曾て生ぜし事なきは無論の事とせらる。されど注意すべきは此消極的断定の思切て主張せられあらずして、此問題に關する注意は、却て心理に關する科學の言ふ所の如く説明せられ、延てインカーネーションの證據の大なるものゝ一なる第四福音書の史的價値を信せざらんとするとなり。畢竟するに之れインカーネ

ーションなるものは、曾て出来せしことなしとの念が先入主となりしものゝ見解なり。略言せば、之れインカーネーションなるものは、曾て生ぜし事なしとする議論を以て、インカーネーションを排斥せんとするものにして、之れ論理學の所謂論點竊取の最も明白にしてかつ單純なる例なり。

更に他の一例として、其批評に於ては右同様主觀的趣味を帶ぶる基督教辯證家ロイシーを擧げん。

聖馬太傳及聖路加傳には、父と子の相互に能く相識ることに關する明文あり。聖馬太傳には此句は「凡べて勞れたる者と重荷を負へる者はわれに來れ、我なんちらを安息せん、……我軛を負ひて我に學へ」この句に伴へり。此句は其固有の價値を別とするも、基督教禮拜の中心におかれて、聖約翰傳に於ける教説と密接に平行し、延て之が爲に一層確實にせらるゝの故に、極めて緊要のものなるに今日にては、之を以て『シラクの子の書』の最終の章の一追想録に過ぎずとし。又或記者の如きは、此章の「大袈裟にして且手近き利用」に過ぎずとするものあり。此兩者の密接なる關係、殊に此句の前半に關しては二種の説あるべ

きも此には之を言はず、唯全節に關してロイシーが言ふ所をみるに左の如し。「キリストが弟子等に語られし所を文字通に精確なる言明を得んとするは困難なり。そはイエスは其不用意の間に爲せし祈や教に於て、殊更に「エクレジア スチカス」を眞似ねんとせしとは容易に思はれざればなり」此句は兩福音書に見ゆるに拘らず、少なくとも、今のまゝの字句にては、之れ基督教傳説の産物の一たるべし」と。扱て此事は容易に受取り難しとするも、キリストは其試誘に於ける第一の勝利の時より、十字架上の最後の語に至るまで、斷へず、舊約書の文句を利用せられ、舊約の空氣の中に住み、之を呼吸せられ。之を引用し、之より議論を立て、幾度となく之を適用せられたれば、此に主は『シラクの子の書』の語句を用ひたまひつゝありしとしても差支なし。されど之を爲すに當ては甚だ深く變化して用ひられし故、之を以て「眞似」せりとするは、此には全く不適當なり。シラクの子は智慧を得んとするに如何なる祈と勤勉を以てせしかを告げ、人々をして其恩澤に與からしめんとして曰ふ。

「汝ら無知なるものよ、われに近寄りて教訓の家に宿れ……………汝の頸をくひき

の下におき、汝の魂をして教をうけしめよ。魂は見出すは難し。汝の目をもてみよ。われ唯少く勞せるのみ、而てわれ自からに多くの安息を得たり」。此全體の語を馬太傳の文句に比較し、父は我に萬物を與へたまへり、父の外に子を識るものなく、また子および子の顯す所の者の外に之を識る者なし、凡て勞れたるものまた重を負へる者はわれに來れ我なんぢらを息ません……………そはわが軛は易くわが荷は輕ければなり」。若し此に用ひられし句は『シラクの子の書』より出でしものとせば、其適應は全く變化せられしと云ふべし。キリストは此に智慧に關する研究者として非ず、自から智慧の根源にして、かつ其智慧が與かる安息の根源として語らる。加之、舊き語に新き適用を與へしは、キリストが「學者の如くならず、權威をもてるものゝ如く教へ」たまへる事實を切言する最上の手段なり。而て此驚くべき變化すら、尙舊來の文句の眞似なりと呼ぶ。之れ全くイエスの與り知らざる所なり。かくて、かゝるとは恐らく非ざりしなるべしとの假説に基きて、神學上最も肝要なる此一句を正眞なりと信するをやめよと迫らる。われらは科學的批評を歓迎す。されど以上のもの

は之れ科學的批評にあらざるなり。そは科學研究に従事するものは、一個の假説を設くるとき、常に種々の事實を比較して、其假説をたしかめんとすればなり。かくて一旦確定せられし後にあらずば、其假説の上に更に他の説を築かんとはせざるなり。されど此にはかくの如き眞偽の判断は得らるべくもあらず、其論断は徹頭徹尾主觀なり。而かもかく主觀的なるに拘らず、之を基として、更に他の批評的結果を求めんとしつゝあるなり。

以上二個の例を引用せるは、之れ兩者とも以下論せんとする第四福音書に關すればなり。されど是等は單に多數中の標本たるのみならず、近世批評に用ひられ又公認せられある論法也。曾て卅年前にニューマン博士は、希臘羅馬の古代に關する諸大家の意見を對照して云へるとあり『何故に是等の諸家は證據若くは事實を鑑定するにかく迄に意見を異にするや。畢竟するに之れ其鑑定たるや唯自家の論断より來れるものなるが故なり。而て其論断たるや、自家の明瞭なる若くは不明瞭なる臆説より來れるものなり。而て又其臆説たるや、各自の思想の状態より自然に湧出せるものなり。かくの如く智的要具によりて指導せら

ニユー  
マンの  
説近世新約  
批評家の  
態度

れたる精細なる連續的の推論の過程は、科學的なるにはあまりに機微にしてかつ心靈的なればなり』(“Grammar of Assent”)。此言は移して近世の新約批評家に當つるを得べし。彼等の論法は科學的なるにはあまりに個人的にして、又あまりに偏僻なれば、其結果として議論百出するは怪むに足らず。たとへば一人の批評家は第四福音書の歴史は、其所載の論議よりも遙に眞を措くに足れりと云へば、他の者は其論議は其歴史よりも遙に眞を措くに足れりとするが如し。されどわれらはかゝる批評は科學の手前之は取るに足らずと云ふにあらず、科學の名義に於て然か云ふ所以なり。

加之、此種の批評を試むる其背後には一個の根本的臆説横はる。此臆説は代々基督教會が團體的の宣言を爲す場合には斷じて黙許せざりし所のものにして、今日にては多數の基督信者が排斥せんとする所のものなり。即ち新約書を善く解せんとするには、新約書以前の社會及新約書を創作せし社會より離れて、地下より發掘せる文學的斷片を考古學者が取扱ふが如くなすにありと云ふ説なり。されば事の眞相は果して如何。基督教會とはキリスト、イエスの身位に於て「人

批評の背  
後に存す  
る臆説

教會と其使命

聖書と教會

となりたまへる神」によりて建設せられたる進撃的傳道的の社會ソサエチにして、人間のあらゆる欠點あるにも拘らず、聖靈によりて導かれ守られつゝあるものにして、其使命たるや、既に過去十九世紀の間に爲し來れるが如く、其社會の中に人々を招き入れ、教會の信條の力によりて生き、其慰籍の中に此世を終らしめんとするものなり。之が爲に教職あり、聖奠あり、聖書あり、聖日あり。故に聖書とは嚴密に云へば此全組織體の一部分にして其根元部分オリジナルにあらざれども、此團體と密接に聯結せるものなり。そは其會員中の最も神イスマベリション 感を受けしものら

宗教改革と新約書

が、基督教會の用に供せんとして是等を記録し、同じ神感の下に、他の記録より特に是等を撰別し、其同じ聖靈の導によりて、世々の人々の魂の要求に應ずるやう特に力を與へられしものなりとは基督信者の信する所なり。歴史より云へば、以上の如きは、宗教改革時代まで、教會と新約書との間に存せる關係なりき。然るに宗教改革の時に及びて多くの變化は生ぜり。先づ第一に教會の一致破れて後、聖書註釋の一致も亡せたり。第二に新約書は在來教會の私有財産の觀ありしに、此度は世界の共同財産と變するに至れり。第三に

一種の説出で來りて、新約書は教會の上に建てられたりと云ふよりも、教會は新約書の上に建てられたりと云ひ、聖書は教會に仕ふるものなりと云ふよりも、教會は聖書を註釋する爲に存在すとするに至れり。今此に是等の變化によつて生せる善惡混交を判別するの要なれど、唯此に一言せんと欲するは、かれらはかくて聖書を研究するに當り其章句の前後の本來の關係の主要部分より離れて、單に別々に研究するに至らしめ、聖書の一なるは昔に易はらねど、歴史的前後の關係の一致は消え亡せし故、教會の立場に混亂を來らしめしことなり。其第一の結果は聖書に與ふるに法外の無謬説を以てするに至り、從來聖書と教會との協同の役務たりしものを、單に聖書にのみ歸するに至れり。かくて之が自然の反動として今日熾に行はるゝを見るが如き智的批評の點より聖書を以て普通文學書の如く爲すに至りぬ。勿論聖書が他の文學書と全然類似の點に於てかくするは、不都合なれども、實際の事實を精査するときは、聖書はかくの如きものにあらざれば、無條件にてかゝる結論に達する能はざるなり。そは聖書に見る所は如何。若しアウレリアスの「默想録」又はエビクタータスの「格

言」或は他の何等の書も、皆新約書の如く読んで益ありとせば、われらは是等の書に接せんが爲には、大圖書館の目録を涉獵せざるべからず。而かも恐らく是等を發見すること容易ならざるべし。

聖書の感  
化力

之に反して、新約書は到る處に之を見るを得べく、又見ざらんとするも得ざるなり。其歴史は十九世紀間の世界の全歴史と交織せられ、無數の殉教者は其權能を證し、其唇に書中の語を唱へつゝ死し、聖者は之が爲に禁欲の生涯を送り、學者は其文句の研究に精勵せり。智的大活動は之が注解の爲に生じ、世界の政策すら此書あるが爲に其影響をうけしこと一再ならず。就中地の眞の鹽たり、心靈的進歩の根源たるべき無數の人々にかくれたる刺激を與へしこと幾何なりや知るべからず。何處に往き、何を爲すとも、新約書はわれらの前にあらはれて來る。英國を旅するもの、若くはロンドン市を歩むものは、世界につよき印象を與へんとて聳え立つ莊大の聖堂に目を注かすしてはあり得ざるべし。商人が一通の書面をかくにも、詐僞師が一枚の銀行切手を贋造せんとするにも、福音物語に觸れずにはあり得ざる也。

換言せば新約書は生ける一大宗教の最も肝要なる部分を爲すものなれば、プラトの問答や、シエキスピヤの劇曲が今日尙生けりと云ふと全然異なる意味に於て、今尙ほ生けるなり。されば新約書は他の書物と同様に批評的に見るを得べしと云ふには、或誤謬なきを得ず。然か見るは正當なりや否やは問題にあらず。唯問題はかくの如く見るときは其の到達する所果して如何にあり。そは如何なる文學書にても之を批評せんとするには、われらは一般に公認せられし前提よりす。若し然かするにあらずば、一般に承認せらるべき結論に達し得ざるは勿論なり。されど新約書の批評家は尙其の批評を初めざるに當り、根本的に其の前提に於て區々に相分かる。之れ彼等はインカーネーションを以て實事とする基督教の信仰を有するや將然らざるやによりて異なるによる。或は右二者の外、第三の立場即ち公平に此の問題に關して論せんとするものもあり得べしと云ふものもあらん。されど之れ恐らくは第三の立場と云ふを得ざるべし。そはかゝる公平の見地をとらんとするものは、事實上不信者なるが故に、基督信者の意味に於て、インカーネーションを論する能はざればなり。かつ之れ彼にと



りてはさまでに肝要のことにあらず、其生涯は之によりて左右せられざるなり。此信、不信は新約書に關する最も緊要なる問題を論斷するに多大の影響を興ふるものなれば、基督信者及び不信者の批評家が同一の語句を用ふる場合に於ても、其實同一の論點に立ち居らざるなり。たとへば、兩者とも其論を初むるに當りて、先づ歴史に訴ふるは常なるも、其歴史は兩者にとりては全く二個の異なるものなり。基督教會は常にイエス、キリストの生涯と死と復活を等く歴史的事實と爲し來れり。之れ畢竟するに目撃者の證明より出で、世々相傳し來れるのみならず、同時代の文書に記載せられ、かつ切言せられし所にして、其文書とは目撃者若くは彼等と密接の關係ありしものらによりて書かれしものなり。而て是等の目撃者の證明は彼等の品性、行爲、其謹慎、其信するに至るに輕忽ならざりしこと、又た後には之が爲に甘んじて死せんとし、又其の死によりて彼等の確信の正眞なること、其の強烈なるを世に示せしことによりて一層信用を増さしめぬ。勿論近代の基督信者は、基督教が彼自身と他の人々に與へし感化如何によりて、今尙世界を動かしつゝある力を知り、其起原の超自然的なる

非基督  
教批評家  
の主張する  
所

を解するなるべし。されど之と同時に其起原は通常の意味に於ける歴史上の事實と解す。詳しく言へば之れ幾多の連続せる事件を之に關係せる當事者によりて記録せられしものにして、彼等の證明は種々の理由よりして特更に強固なるものとなすなり。

非基督教批評家は此證明を斥けんことを、其理由とする所は、證明としては薄弱なるの故に非ずして、證明せんとする事件は、今日我等の經驗する所と符合せざる故。若くは假りにさる事件起りしとするも、今日にては受入る能はずとするにあり。換言せば、批評の竟局標準を歴史的眞理の證據におかずして蓋然におかんとするなり。加之、われらの今日の經驗を以て、人間一切の經驗の標準となさんとす。之れ現在の光明を藉りて、過去を改造せんとする希望を多少害ふの臆説なり。

されど此に關する二個の甚だ異なる見解を見る。若し科學的なる文字を此兩者のいづれにか適用せんとするときは、主として演繹的なる或説によりて、其實を變更せんとする非基督教批評家よりも、むしろ之を基督信者の見解に適用

するの遙に正當なるを覺ふ。現今の多くの批評家のうちには、インカーネーションを以て現實なりと信するものあれど、歴史に關する此二個の見解を混同せるもの多し。彼等は復活を心靈的一事件と爲し、其超自然的なるの故を以て歴史に屬するよりも、むしろ信仰界に屬する一事件と爲す。之に反して、基督教の主張するところは、「道」肉體となるや、一自然物がわれらが自然法と稱するもの、中に入りて、これを超自然法とわれらが稱するものに引上げんとせるなりとす。復活は即ち此變化の第一例證にして、其體は人が之を認めかつ之と交るを得ると同時に、超自然的身位パーソナルに好當なる自由自在の機具となれるなり。其如何なる方式によりて此事成就せられしかはわれらの知る所にあらざるなり。われらの之を信する唯一の理由は、教會によりて傳承せられし記録に載せらるゝ如く、實際に此事生ぜりとするにあり。故にわれらは一方に於て之を信すると共に、他方に於て其事實の記載せらるゝ記録を信せざらんことす。是等の記録は此信仰に疑を挿まざるものゝ作意によるにあらざりて、却て疑を挿めるものゝ確信に基せり。復活せるキリストは先づ彼を信せしものにあらはれ、之によ

キリストの復活

キリスト復活後の出現

りて、彼等の信仰を堅固にせられしと云ふは眞なり。されどキリストは彼等の信念の助によりて現はれしにあらざりて、却て全く之に反して彼等の信仰の全く落ちし時、單におのれの意志と權能によりて現はれたり。自からおのれを示さるゝときまでは、何人も見しことなく、又見ることを得ざりしなり。かくの如きは此事件の平直なる言明なり。其記載せられたる出現の、心靈的なるは、幽靈的の意味に於てに非ず。又弟子の心と精神内にのみ包みかくされしと云ふ意味に於てにもあらざるなり。其出現は近世の語を籍りて言へば、徹頭徹尾客觀的なりき。されば單に歴史上新奇の事實なりとの故を以て、之を歴史的なりと稱する能はずとて否定する能はず。若し然か否定するとせば、之れ上述の如く、歴史を事實の上に基せしめずして、蓋然に基せしめんとするなり。即ち今より考へて或はかゝる事生せしやも知らずとするものにして、かゝる處置は又決して科學的なりと稱する能はざるなり。そは今日科學の進歩を見るに至りしは、畢意するに怪異の事を排斥せるによれるものにして、從て科學は常に是等の怪異の事に反對すればなり。

加之、インカーネーションの絶頂はキリストが死に勝てる點にあり。唯單にキリストの存在は繼續せられつゝありとの確信は、かゝる凱旋を奏する能はず。其證明は、キリスト甦りて、榮ある状態に入れる人性を客觀的に見証者に示されしにあり。されば此事が見証者にとりて、極めて重要なのみならず、聖パウロによりて更に切言せらるゝ所あるは。畢竟之れ實際に生せし一事件を見証せるが故なり。換言せば、此事件が歴史的なるが故なり。これ神が個人的に歴史に臨めること即ちインカーネーションの必至にして又離るべからざる結論也。基督教會は單にキリストの存在が、繼續すると信ずるのみならず、又此存在は其死より甦れるのち、神の聖前に見証者等によりて證明せられし事實なるを信するなり。

以上の例は現今新約批評に散見する主觀的先入觀念の影響する所如何を示すにあまりあり。

最も急進の批評家と稱せらるゝものは、此分子を最も多量に有するものなれば之に對するに當り充分の警戒を要す。然るに常人の間には極端の見解を有する

批評家を以て優勝なる批評家と察するの傾向あり。之れ畢竟するに、屢世に見る服裝より懷抱に至る迄、一種の奇矯を衒ふに過ぎずして其眞價如何に關せず、衆目を聳動せんとするものなり。之れ固より眞面目なる學者を誤らすことなきも、既にかゝるものゝ存在する以上は、之によりて常人を誤らすことなきを保せざるを想ふとき、多少われらは此點に留意するの要なしとせらるゝなり。

### 第三章 新約に於ける三位一體

パウロの書簡は基督教々義に關する最古の證憑なり。

此證憑は父と子と聖靈の神性と區別は基督教歴史の最初の十年間に教へられしものなるを示す。ヨハネが第四福音書の記者たる事は、現今英國の多數の批評家に承認せらる。

聖ヨハネは此教義を以て、キリスト自ら教へ給ひしものと爲す。

加之聖馬太傳には授洗式語あり。

故に三位一体の存在は、キリスト自らによりて教示せられしとす充分の論據あり。

復活の弟子に及せる影響は、甚だ大にして、前に諒解し能はざりし此教説を、或方法によりて理解するに至らしめしやもしらず。

反對論は新約に對して最も曖昧なる處置と爲す。

其不都合はパーラーによりて益々つよめられたり。

概括

基督教起原を研究するに當り、聖パウロより初むるは今日普通に爲す所なり。そは彼によりて、最古に遡るを得ればなり。又彼の書簡中、其正眞にして憑據するに足るものとして、苟も名ある批評家によりて承認せられし四通より始むることは近頃迄然りき。されど此より出立するは、之れ反對批評に對して、極端の讓歩を爲すものなるを忘るべからず。之れ畢竟するに共通の論點にて、反

聖パウロ  
の四書簡

對批評家と相面せんとする好意に出でしものにして、決して聖パウロの殘余の書簡或は其多數は、彼の作にあらずと認むるにあらず。是等は皆保守的批評家并に進歩派批評家の多くによりて、承認せられつゝあるものなり。

上記の四書簡即ちロマ書、前後哥林多書、及加拉太書は、概して云へば、紀元六十年以前に記るされしものにして、此に二事の極めて明白なるものあり。

一、聖パウロは、其説教を始めしとき以來、其福音に何ら根本的の變化あらざりし事。從て、紀元六十年に記されし所のものは、彼が紀元四十年、即ちキリストが十字架につきたまひてより後、十年間に教へし所と其實質に於て相同じきこと。二、而して此説教は、ヤコブ、ケバ、及ヨハネの教へし所のものと、

聖パウロ  
の所説

實質に於て相符合する事之れなり。此第二の點は、聖パウロ自ら加拉太書に於て、能ふ限り之を明言せるを見る。更に又哥林多人に贈れる書に於ても、『我も彼等も此の如く宣傳へ、爾等も亦かくの如く信せり』と云ひ。又彼が自ら建設せしにあらざる教會に、かき送れる語調に於ても、又使徒行傳に於ても、極めて強く之を主張する結果、かのチユービンゲン派の説、即ち使徒行傳は、後代

の作にして、ペテロ及パウロの教義の間にありと假想せられし差異を調和する爲に記されしものなりとせらるゝに至りしほどなり。されど使徒行傳の古くして、かつ史的なる事は、近世明に認められ、従つてわれらが論せんとする點の爲に提供する證明の價値を増せしこと尠しとせず。されば是等の書簡に見る所果して如何。

嘗にイエスキリストは「子とせらるゝ」と云ふ意味に對して、「其子」としての無比の意味に於て、主たり又神の子たりとして常に記されあるのみならず、是等の書簡に於て、聖パウロが、キリストに對する態度は、一個の人間たる師に於けるが如くにあらず。全く人間を超絶せる者にして、其者の前には人の一切のことは匿るることなく、又其審判の前に、万人皆立たざるべからざる者とせるを見る。かくて其全書簡の調は、『すべてのものに勝りて、神は彼を永へにめぐみ』と羅馬書に明言す所を豫期せしむ。

聖パウロの聖靈觀如何を判定するは、稍困難なり。そは彼は『神の靈』、『キリストの靈』、『聖靈』、『主たる靈』、『靈の主』と種々の名稱を用ひ。又一度は主は靈と

聖パウロのキリストに對する態度

聖パウロの聖靈觀

聖靈の單獨の官能

も云へば也。されど彼は單獨の活動をも靈に歸せり。『靈は萬事を辨へ』、『聖靈自らわれらの靈と偕に證をなしてわれらの神の子たることを示す』、彼は『われらの衷にすみ』、『われらのよわきをたすけ』、『言ひ難きなげきを以て、われらの爲にこりなしを爲す』。われらは、『神の靈によつて導かる』。われらの體は、聖靈の殿にして、『イエスを死より甦せしものは、汝らのうちにある彼の靈によりて、われらの朽つべき體をも生かすべし』。最後に以上の如く靈に附與せる官能の差別は、哥林多後書卷尾に最も明白に示さる曰く『願くは、主イエスキリストの恩と、神の愛と、聖靈の交際なんぢら衆と偕にあらんことを』。

されば、父と子と聖靈の區別は、十字架刑後十年、若くば十二年を出でずして、かく聖パウロによつて教へられ。他の使徒も、恐らく之に異議なかりしなるべし。以上二個の假定は、臆測に過ぎたるものにあらず、又あまりに主觀的のものにあらずして、批評的研究の結果に出でし道德的確説なるは注意すべきなり。加之、此數年間は、多くの使徒は尙皆生存して、其見聞せる所を證せるを思ひ、従つて此使徒的傳説の重を爲すものあるを思ふときは、基督教々義の重大なる

變化が、其最も熱心なる初期の宣傳時代に生せしと考ふる能はざるなり。かくて、われらは此衆人の通有せし教義は、キリスト自らによりて教示せられしものなりと結論するも恠むに足らざるなり。

何人も異論なしとする點より出論せんが爲に、聖パウロの書簡の最小部分にのみ訴へんとするは、能ふべからざるにはあらず。されどもし基督教辯證家が寛大ならんと欲して、第四福音書を論外におかんとするときは、之以上の譲歩を爲すなり。そは之れ如何にとなれば、一派のものが承認せざる一個の批評的論斷を豫期するものなればなり。第四福音書問題は今は皆人の熟知する所にして、之に關する諸論は、繰り返すにもうきほどとなれり。異論の生ずるは、主として宗教的哲學的の假定の相違による。其一例は既に前に述べしが如く、此福音書の眞物なるを拒む一種の議論の前提はインカーネーションを否定せるによるは明にして、其議論を通じて然り。インカーネーションを信せざるものは、第四福音を一種中立的のもとなさざるを得ざるに至る、而て然りとするに於て眞面目なるやもしらず。されど多數の基督教思想家、即ちインカーネーション

第四福音書問題に  
インカーネーションを  
否定せる  
の關係

保守的批評の勢力

を信するものは、證據を精査せざる爲ならで、却て精査の結果、必要なる外部的證據は充分強固になるに加へて又あふる、ばかり内部的證據もありて、第四福音書の正確にして、眞作なることを確信するに至れり。勿論此の中には公然其意見を發表せずとも、其説教若くは講義に於て、第四福音書の正眞なるを當然となすものを含む。是等の人々は、非批評的に見ゆれば、實はかゝる態度は、批評の結果にして、彼等は『基督教思想家の多分』なりと云ふは穩當ならんも、英國にありては、『大多數』なりと云ふて差支なかるべし。

かく云ふは、勿論典據に訴へて、批評問題に對し僻見を抱かんとするにあらず、人々の熟知せる論法を一々擧ぐる代に唯簡略に保守的見解の有する勢力の一般を示さんとするに過ぎず。されど近來單に思想の混雜よりして、多數の人々を迷はしめし一議論は稍注意すべきものあり。

希伯來人及び他の東方記者の正經と風習は、われらと頗る趣を異にするは今皆人のよく知る所にして。又種々の模似書に於ても後代の作が、それよりも古き作若くはそれよりも大なる作より出でしか、又は共同の作なりとするも、其

企圖に於ても、其結果に於ても何ら不正直あらざとせらるゝとも、皆人の知る所なり。かくて第四福音書を見るにも此見地よりせんとする一種曖昧なる念が人々の心に生ずるに至れり。されども全然不可能なるは明也。第四福音書の運命は其記者如何に懸かれり。此書は、目にてみ、手にてさわりし目撃者によりて書かれしものなりと主張す。そは彼は目に視、手にてさわりし目撃者なればなり。之れ使徒教説の要粹にして、ブラウニングの句を藉りて云へば『若し何人も「われ視し」と云ふより以上謂はざるときは、如何あるべき』との念を抱て發言せられしものなり。

ルナンは其『基督傳』の第十三版に於て、此事を力強く言明せり。此に彼の言を引照するは、此の點に於て、如何に二者擇一を要するを示すに足ればなり。曰く『此らの二者の一は眞實なるべし。第四福音書の記者は、イエスの弟子の一人、即ち當初よりの近親の弟子なる乎。若くは、此記者は其重味を示す爲に、此書の始より終りに至るまで、自ら所載事項の目撃者たりと思はしむるやう巧に其技倆を運用せしものなり……故にわれらは此二者の一を撰ばざるべから

ルナンの言

す。セベダイの子ヨハネを第四福音書の記者と認むる乎、若くは或者が巧にセベタイの子ヨハネの作と思はしむるやうにせしアポクリファアルライチング一緯書として、此福音書を見ざるべからず。之に關しては、何人が作り出せしか知らざる多くの口碑の存するは、疑ひも無く事實也。其記する所に關し世人の信用を得んが爲に、其名のみならず其證憑に關しても公衆を欺くものは、之れ口碑商人にならずして、詐偽師なり。彼は尙語を次ぎて曰ふ『されど之れ今われらが論じつゝある記者が行ひし唯一の詐偽にあらざるべし』とて、彼は聖約翰第一書の記者は、此福音書の記者と殆んど全く同一にして、此に『福音史の一個の目撃者として、かつ教會に於て重きを致せる知名のものとして自らを標榜すればなり』とせり。此進退兩難の點は眞に重大なるものなり。かくの如き極端なる偽作が成功せんとは批評上よりするも到底有り得ざる事なるは言ふを俟たざれど。第四福音書がかくの如き偽作なりとは、道德的にも心靈的にも一層不可能なるとは、其心靈的福音と世界宗教史に於ける絶對的中心書物にして、基督教會の大なる文學的聖奠、即ちインカーネーションの人間の言語に於ける正眞の表現なるを思へば

第四福音の正眞

極めて明白にしてかくの如き書中には、不眞實の最微の微候も發見すべからざる也。此に此點を少く解説せしは此事屢今日の思潮に看過せらるゝが故なれど、勿論之れすべての議論中の最大なるもの、即ち此福音書は、聖ヨハネによつて記されしものなりとの基督教會傳承の傳説を確むるものゝ一なり。

若し然りせば先に聖パウロより推論せしこと、即ち父と、子と、聖靈の區別は、キリストによりて教へられしとすることは、一個の確定事項となるべし。そは直截にして活躍する繪畫的の辭句を以て現はされたる此説は、此事の正に然りしを示し、かつ之は後世聖ヨハネが默想の結果若くは聖パウロの書簡の感化をうけしとするものより容易に區別するを得べく、加ふるに、父と子に關する聖ヨハネの語は、人の熟知する上述の聖馬太及聖路加の句と一致し、又相待ち相待たれあるを見ればなり。されば眞面目に論ずるときは、極度の反對論は此二個の福音書の證明を拒斥するには其論據あまりに薄弱なるは自明の事なり。更に聖馬太傳には簡明なる洗禮式語あり。近時此式語は、キリスト自身の語を寫せるものにあらずとの説を爲すものあり。其理由とするところは、此語は、

聖馬太傳  
に於ける  
洗禮式語

キリストの平常の用語よりは、遂に専門的にして、キリスト自から教へし教理よりは、一層發達せる教義を示すものにして、最古の記録に徴するも、原始に於ける洗禮式語は、キリストの命令によれりとする三位一体の名よりも、むしろキリストの名によりて行はれたりとするにあり。

されど此説を辯駁するには、此語は聖ヨハネによりて幾度となく明白にキリストに歸せらるゝ所のものよりも、更に勝りて専門的にもあらず又發達せしものにもあらずと云へば足れり。キリストの名に、洗禮を受くることは、キリスト信者の團體に洗禮を受け、もしくは一個の基督信者としての洗禮なりと曲解するの要なく、又しか證明する能はざるなり。もし使徒相傳として重せらるゝ原初の式語が、『キリストの名』に於てなりしとせば、何故に又如何にして、かくまで普く變更せられたるやを想像するは難きことなり。されど假令此の種の機微の變更ありしやもしらすとするも、之を公平に判斷するときは、多くの寫本の典據も之を支ふるあれば、此句を妄に排棄する能はざるなり。加之、此語は、キリスト復活後の事なり。此點に於て、再び詳論するところあるべし。

三位一体  
の授洗語  
排斥難

此式語は  
キリスト  
復活後也



以上は全新約書を通じて、最も顯著なる例證にして、各書とも、キリストの無比の尊嚴、父との親密の關係を記し、又其多くは更に進んで、屢聖靈に關しても言ふ所あり。

反對說批評

されば、基督教信者は、其自家の立場よりして、三位一體の存在に關しては、キリスト自らに依りて教へられしと信するの充分確なる理由を有す。勿論之はイエスキリストは唯漸次にメシヤとして自ら任ずるに至れりとし、而して之をすら公宣せしは、其生涯の晩年なりとし、又使徒行傳の初の諸章に記せる所によれば、初は唯メシヤとして説教せられしに過すして、夫以上は後世に發達せしものなりとするの近世說に反するものなり。

此説は既に批評によりて確定せられしと思ふ者あるも、尙多くの批評を入るべき餘地あり。

第一、何人にも苟もインカーネーションを信するものは、キリストの精神の内部歴史を作製せんと夢想せしものあらんや。況んや、われらの有する断片的の記録に依りて然かせんとするに於てをや。

キリストの智慧増進其虚限の己自問題

キリストは智慧に於て増進せりと記され、又眞實に人生の經驗を嘗得るやう自らを制限して、己を虚くせりと信せしめらるゝとも、此制限の程度、若くは細自に至りては、われらもいつまでも知る能はざるなり。偶インカーネーションを信せざる批評家ありて、之を詳論せんとするものありとも、之は基督信者の頭腦には何らの價值も有せず。

メシヤとしての性格と父との關係ある人

第二、假令イエスは、自らメシヤとしての性格の下に自をあらはせしとするも、之はユダヤ人に對しては、父と無比の關係ある畏敬すべき永遠の人格と聯想せしめしは自然なり。最大の豫言者等すら皆おのれを僕に過ぎずとせしに、イエスは自から『子』なりと主張せり。其語るや、聖ヨハネの明に示すが如く、其觀福音記者によりて『學者の如くならず、權威を有てるもの、如く』なりし明白なり。此に權威とは、律法、安息日及び人間の運命に關せるものにして、若し神より出でしものにあらずとせば、解すべからざるものなれば、かゝる教説がキリストの地上生涯中、僅かに朦げに解せられしは勿論の事なり。之れ事の實相にして、其眞意義は、キリスト死より甦りてのち初めて明にせらるべか

りき。

キリストの復活が弟子の信に與へし影響

此點はわれらをして更に他の點即ち復活と復活せる主との交通が、弟子らに與へし影響に論及せしむ。復活までは、弟子らはイエス、キリストは、神が肉體となりしものなるを理會せず、又理解する能はざりし也。されど復活後に於て、事全く一變せり。使徒が其説教に於て、多大の重を復活におきしも、彼等が蒙りし影響の反映せしに過ぎずして、之れ正に當然の事たるべし。復活とは破天荒の事なり。従て之を目撃せしとも破天荒の經驗にして、之が爲に使徒らの性格に驚くべき變化を來し。後更に聖靈によつて啓發せらるゝところありたり。故に復活を否定するものゝみならず、使徒の變化に對して、大なる驚駭を蔽ふものも、亦之れ基督教史の最も肝要なる要素を看過するものなり。此要素とは、前に失心せし使徒等に、勇敢なる熱心の俄然湧き出でしことなり。

弟子の急變

パーレーは當時基督教を説くものゝ會する試練を描きて『苦勞も危険も受苦も之が證を爲す爲には厭はざりき』と云へり。

使徒らをして、是等の困難と危険を恐るゝことなく大膽に面すに至らしめし變

聖靈の啓發

歴史家と路加の聖

化は、初代基督教會に於ける最も大なるの道德的奇跡なり。此變化たるや、主として復活がかれらの主に關する觀念を易ふるに至らしめしに因る。ペテロが前には忠告を與へて憚らざりしものは、今は『わが主よわが神よ』となれり。此態度の變化は、復活後の出現に關する記事中に、明に認め得るところにして、其記事の正眞なるを證する機微を指示するものゝ一也。かくの如く新にして恐るべきキリストの神々しき人格を理解せしむるに至りしは、約束の如く聖靈來りて、彼等の心を啓發せしに因る。『彼わが榮を顯はさん、蓋わがものをうけて、爾曹に示せばなり』。凡て父の有ちたまふものは、わが屬なり。是故に、彼わが屬をうけて、爾曹に示すと云へり。之のみならず、使徒行傳に記す所によれば『其選びたる使徒等に、聖靈に託て命せしもの、擧げられし時に迄至れり』。又『彼は四十日の間かれらに見え、神の國の事に就て語たり』とあり。路加傳にも『聖書を悟らせんとて、其聰を啓き』とあり。此には、聖路加が、其福音の簡結なる最後の章を草せるとき、使徒行傳に記せる以上、其後のことを知らざりしか、又は或者の云ふが如く、四十と云へる數に有する一種の神秘的の暗示

を知れりや否を問ふの要なし。そは彼は精確なる歴史家にして、又見證者なりと證明せられればなり。

復活せる  
主との交  
通

聖約翰傳に於ける記事も亦之と同じ。故にわれらは使徒等の傳説は、之れ彼等が復活せる主と、少なくとも幾度又幾日にも互りて交通せるを立證するものなるを疑ふ能はず。又此傳説は、見證者の口より出しもの故、之に不正確なるとあらんとは信する能はざる也。要は此交通の題目たる『神の國の事に就て』とは、何故なりやにあり。若し上述の如く、聖約翰に記されし教説が、朦げながらも、弟子等の心にすでに存せしとせば、キリスト、其身に榮光と權威を帯びて、『聖書を悟らせんとて、其聰を啓き』たまひしとき、彼等は其意義を更に充分會得するに至りしならんと察するは無理ならず。若し然りとせば、聖パウロによりて早くより教へられし三位一體及インカーネーションの教義は、此時使徒らの心に明瞭に理解せられしなるべし。かつ此時代の終に記されしとする聖馬太の語は、キリスト自身によりて語られし教説を概括して、最も適當に、且つ自然に其章を結びしものを謂ふべきなり。

「神の國  
の事」と  
は

使徒行傳  
に於ける  
三位一体  
の教義

此見解に反對する批評家は、使徒行傳に記されたる初期の教説には、インカーネーションに關する明晰の教義を欠くと爲す。されど之れ單に使徒らは自らイエスをメツシヤ、即ちキリストと認むるやう導かれしと同様に、ユダヤ人を導かんとつとめて其事業を始めしを示すに過ぎずして、其以上要求すべからざるなり。加之、聖路加は、既に其福音書に記せる歴史の續として、之を記すに於て何らの不都合を見ざりしなり。

キリスト  
を人間視  
するの途  
唯一の途  
を成立する

さればキリストを單に人として見、後に神とせられしものなりとするの説の成立しめんとするには、章句全體の意をくむときは以上の説をためしむべきも、實際の句に於ては全く反對の傾を示す各句を、頗る曖昧なる方法によりて撰取するによるの外なし。されど、奇跡を不可能とせざるものにとりては、福音物語の單純にして、自然なるは信を措くに足り、決してかくの如く各句を支離滅裂ならしむるを許さざるものあるなり。

此點に於て、パーレーの曾て言ひし所は、尙今日引用するに足れり。『基督の教會の最初の説教者等によりて語られたる本來の物語が、當時の記録や文書の殘

れるものあるにも拘はらず、全く傳説にも備忘録にも其跡を止めざるに至れりとし、又他の物語が之に代りて挿入せられて遂に教會の信者の堅き信仰となるに至れりとするは、口碑の轉化にも曾て其例をみざる所なり。况んや、記録せられし歴史に於てをや。かゝることは到底有り得べからざるとは、基督紀元の後代に於て、かくの如く一物語が消滅して他の物語が之に代れるが如きこと決してなかりしを思ふときは、一層明白となるべし。基督教は種々の暗黒なる争亂の時代を経來れど、其實質に於ては、其當初入込みし風雲の間を切り抜け來れり。多くの教理上の誤謬は、公式の信經に流入せしこと屢之なきにあらねど、本來の物語は尙依然として存せり。』

彼は進んで肝要なる附言を爲して曰ふ  
『われらの現今有する物語は、實質に於て、基督信者が當時に有せしものと同一なり。換言せば、福音書中の物語は少なくとも其主要部分は使徒及び最初の教師が説教せしものなりとの證據の中には、此物語は其の福音書にあらはるゝ所よりすれば、當時既に公に知られ、基督教會は其の要領と主要部分を

所有せし證據も其一に數ふべし。福音書は基督教史を信するの基因を作るものにあらずして、却て此信仰の産物たるなり。』  
かくて彼は、聖路加の言ふ所の『われらの中に、篤く信せられることを、始より親く視て、道に役へたる者の我儕に傳へし』ものと『爾が教へられし所』の諸ての事に論及せり。

此に切言する所と、使徒時代及又其に次げる時代の、使徒の傳説に關する見證に就て、新約書中の他所に、切言する所と比較するときは、此兩期間に、或實質的の變化が、侵入する間隙ありしと観察する能はざる也。

故に略言せば、基督教會は、イエスキリストの時より存在して、一個の福音を宣へ傳へたり。時の經るに従ひて、其幾分は書簡もしくは備忘録の形に於て、記録にのせたり。最初の教師の特に主張する所は、其の説くところのものが、自ら見證せるものなりとする點にあり。又其次期のもの、特に主張する所は、彼等は此見證を正確に保存せりと云ふにあり。之れ皆默示によれるものにして、自ら求めて然るにあらず。又其想像力以外の事なりしも、一旦默示せらるゝや、

彼等は之が爲に死を甘せんごせり。此教説中には、一種の三位一體説と、一種のインカーネーションをも含有して、遠く聖パウロが其書簡を書きし頃より、即ち基督教起原後三十年以内に既に存せし記録にのこれる證據あり。かつ此の兩教義は聖約翰によりて共に之れキリスト、イエスより出で來れりごせらるゝも、彼自身の言ふ所より推論するときは、彼が教へし同一の教義は、彼よりも約廿年以前に、既に他の使徒等によりて教へられありしは必定なり。以上は此問題の實相なり。勿論之を確定する他の證左、即ち共觀福音書にみゆるキリストの品性と教訓の全體、及び黙示録及他諸書簡よりする議論もあるべけれど、今直に之に説き及すの要をみず。かくて各方面よりの證左は、此二教義は、キリストの福音の固有要素にして、キリストによりて、其弟子らが是等を解するに足るやう示啓せられ。後に追想の題目となり、やがて其熟想の必然の結果として、かゝる發達を見るに至りしものなり。

#### 第四章 教會師父の間に於ける三位一體

師父の傳説は使徒の見證を傳ふるものなりご主張せり。たごへば。

アイレニアス

アレキサンドリヤのクレメント

オリゲン

アマナシアス

此傳説は異分子の侵入により原始基督教に、急激の變化の生ずるを防止せり。各種の宗教に於ける類似を、之と同様に論ずるは、あまりに輕率なり。かくて基督教の三位一体は、其よりも古き出所より借り來れるなりごせらる。されど新約の批評研究によりて、其著作時日は、古きものなりご再確定せられし結果、此種の説を入るの餘地なきに至れり。

加之師父の傳説は、此教義をキリスト自身より出でしごす。たごへば

ロマのクレメント

イグネシアス

オリゲン

之は一大協同團體の傳説なり。

此傳説は明白に且つ權威を帯びたるものにして、此教義の要體はキリスト自身によりて教へられしものなりごの新約書の明確の證據をたしかむるものなり。

前章に於て、使徒の見證が傳説によりて、後代に傳授せられしことを説けるが、

今日の批評家の多くは之を輕視するの傾きある故、尙一層つよく之に關して切言するの要あるを見る。先づ此傳説の起原に關聯せる事情を心に留めざるべからず。ユダヤ人は古より口授の教説によりて訓練せらるゝに慣れたれば、之が爲に記憶力は増進せしめられ、其教へらるゝ事件の仔細を精確に傳授するの能力と、其傳授の確實なるは頗る顯著なるものありき。かくて使徒も、おのづから當時の風俗に従ふて、自ら見聞せし所を教へしなり。やがて教會の發達するに至るや、此教説は傳道者によりて更に弘く傳へられ、其口授せるものはやがて記録体の福音書の準備を爲すに至れり。第二世紀以後は、此使徒傳説を、精確に傳授するに、能ふ限の力を用ひしことは以下の引照によりても明なり。アイレニアスは曰く。

『われらは、福音をわれらに傳へし者以外に、何人よりも救の道に關する智識を得しことあらず。此福音は初め彼らに依りて説かれ、後神の聖旨によつて記録せられ、來らんとする世の爲めに、われらの信仰の基礎と爲し、柱石とならしめんとせり。使徒らはわれらの主が死より復活りてのち、之れより來れる聖

靈の力を與へられて、萬事を辨ふるに至りたり……。かくて彼らは地の極まで各皆同一の福音をもたらし出で往けり。』使徒の傳説は全世界にひろがりぬ。誰にても眞理の源を探ぐり求むるものは、皆此傳説が、各教會に神聖に保存せられあるをみたり。われらは使徒等によりて此らの教會の監督に任命せられしもの、并に其繼續者を今日に至る迄の者をも數へ得べし。われらが教會に於て實際保存せらるゝ此傳説を受けしは、此の連綿たる繼承によれり。』更にアレキサンドリアのクレメントの記す所は以下の如し。

『わが備忘録は、寄る年波の爲に忘れがちになるを防がんが爲にして、之は幸にもわが身親く聽くことを得し眞に神のめぐみを受けたる驚くべき人々の力あり活氣みちたる談議の像にして、又其梗概なり。……』

『此らの備忘録は、聖なる使徒ペテロ、ヤコブ及びパウロより直接に承けし教義の傳説を保存するものにして、子が父より承くる如く、神の聖旨によりて、われらにも是等の祖先傳來の使徒的種子を蓄へしめんとてわれらに傳へられしものなり。是等の備忘録は、其曾て傳へられしと毫も違はず眞理を保存するこ

オリゲンの言ふ所

とは喜ぶべきとなり。そはかくの如きスケッチは尊き傳説を散逸せざらしめんが爲に、保存することを望むものにとりては、好ましきものなればなり。』

オリゲンの謂ふ所、又之に同じ。『キリストを信すと曰ふものは、常に些細の點のみならず、最も重大なる問題に於ても各自其見る所を異にすれば、……是等各項に關して、明なる制限と精確なる規準を立つる事は必要なり。……キリストは神の子なりと信するに至れるのちは、之を謬説なりと主張するものらの間に、眞理を探ぐるの要なし。此眞理は、キリスト自身より教へられざるべからざるもの也。加之われこそは、キリストの意見を保てりと自ら考ふるもの多くありて、其或者は前なるものと異なる所あり。されど使徒より系統連綿として繼承せる教會の教は、今日も尙依然として、教會は保存せられあるものにして是こそ教會并に使徒的傳説と寸毫違はざる眞理として受け入るべきものなれ。』

アタナシアスも又曰ふ。『聖徒の語と人間の想像より出でしものとの間に、何らの相關するものなし。そは聖徒は、眞理に仕へ、天國を説くものにして……彼等は皆諸の奧義に關する教義を確かめ、之を過なく傳ふる爲に承けたり、神

アタナシアスの言ふ所

信仰の公則若くは規準の骨子

傳説の性質

の道は、われらを彼等の弟子とせんことを望む。又われらも彼等を師とするは當然にして、彼等にこそ之れ「信すべく又納くべき眞の語なれ」。彼等の弟子たるは、之れ其傳へし所のものを他人より聞きしが故にあらずして、主自身よりきける見證者にして又道に仕ふる者として、彼等の傳ふる所は主より授けられしが故なり。』

此使徒的傳説の内容は、後に信仰の公則若くは規準と稱せらるもの、骨子にして、タトタリアンの所謂『福音の初より傳へられしものにして』、『全く同一不變不易』とする所のものなり。初代教會の、之に對する心的態度は、ピンセントの有名なる格言よく之を示せり曰く『之れ常に、いづくにても、萬人によりて、受認せられし所のもの』なり。

『傳説』なる語を、屢慣習に盲従するもの、如く解するものあり。されど此に謂ふ傳説は、盲従の正反對にして、若し言ひ得べくば、却て最も鋭敏に自覺的のものにして、自から其特色を知れるものなり。加之此傳説は、使徒の教へし所のものを反照す。彼らの教説の、保存せられたるは、かくの如くあらざるべ

からずと教へしが故なり。彼らは後代に變更せられ得べき説を傳達しつゝありしにはあらずして、自ら見證せし所の事實を傳へしなり。其傳説たるや、基督敎生命の眞髓たるべき事實、即ちイエスキリストの生と死と復活及其敎説に關するものにして、辯證家らが、基督敎の實際的大證據として、斷えず訴へし所、道徳的革命を可能ならしめしもの也。之れ即ちセネカが不成功なりしに拘らず、聖パウロの成効せし所以なり。傳説は只事實を事實として、保存するに止れり。傳説の見證者と相伴ふの自然なるとは、默示が見證者と相伴ふが如し。此の如き證據の簡單にして且明瞭なる傳説は、批評家の云ふ如き發達、即ち異分子が漸次に原始基督敎に侵入し來りて、遂に全く本來の傳説を認め能はざるに至れりとする説とは相兩立すべからず。當時の基督敎會は、此傳説と其根本主義を明に認め、且信徒各自の生涯をして、此主義に則らしめ、其結果に於て、之れ人間以上の力なるを證し、現生に於ては人を救ひに導き、臨終に於ては彼等を後援して、『基督信徒を獅子に投げ與よ』との天晴れ殉敎の死を遂げしめたり。宗敎史に於て、種の起原に關して、上述の如き構造若くは機能の類似は、如何

傳道の實  
功力

宗敎事項  
に於ける  
同出所  
との關係

ほど迄其出所に於ても、相關聯せるを證するものなりやとの同一の問題に接するとあり。されど有機界にありては如何様にありとも、宗敎史に於ては、同似は必しも兩者關係あるを證するものにあらず。従つて然か輕卒に斷定すべからざるなり。たとへば世界の三大宗敎の記録には、各其敎祖——ザラザストラ、佛陀、及びイエスキリストの試誘を記すが如し。前兩者の記事は類似と對照の點に於て直に後者の記事を聯想起せしむ。而かも後者を以て、前者と相關せるものとなすは、之れ批評の明なきを示すに過ぎず。キリストの試誘は、其人格の如く、無比にして、其以後の生涯事業の全體と直接の關係あり。一たび之を讀むものは、誰も其の實際に生せし事なるを疑ふ能はざるべし。されど、他の二者は如何。其事件は神話的の着色を剥ぎ落せる状態に於ては實際に生せしに相違なからん。そは人情は此の如くにして、かゝる事件は生せざるを得ざればなり。何人も畢生の事業に就かんとするに當りて、一種の試誘と戦はざるべからず。况んや一大宗敎の敎祖たらんとするもの、門出に於てをや。其試誘は従つて大なるは明なり。而して若し佛陀及びザラザストラは、史的人物なりとせ

キリスト  
の試誘と  
他の敎祖  
の試誘と



ば、兩人とも其の記録の示すが如き、或種の試誘に逢ひしは當然なり。かくて同様の事情は、其根原的に何等の關係なきに拘らず、同一の經驗を生せしめしなり。

以上は宗教比較研究が示す例證なり。唯學室にありて、研究に餘念なきものが、一旦かくの如き偶然の類似に會するとき、何らの證明もなきに、兩者の間に關係ありと誤て認むるに至るは有り勝の事なり。かくてわれらの聖餐式は、ミヌラ教より來りとせられ、安息日を日曜日<sup>日曜</sup>に代へしはバビロン一宗派の影響によれるなりとせられ。又いつにても類似の事件の發見せらるゝときは、之と同様の言をなすものあり。されどかく幾多の類似事件の發見せらるゝありとも、其原因に於て實際何等關係あるにあらずして、唯人情の共通よりして、同一の事情の下に行動するとき、同一の結果を生ずるを示すものなり。

時を経るに従ひ、基督教會は、古代の慣習、行事、<sup>シムボル</sup>標象、文句等を吸入せるは、勿論にして。恰も強き性格の人が、弱きものを自分の手下に使ふ如く、教會は此らを全く自家の用に供したるは眞なり。やがて是等は全く同化せられ、利用

基督教の  
同化と信  
仰の不變  
不易

せられて、以前に優れる高尚なる意義と目的に用ひらるゝに至れり。かくの如き枝葉の出來事はありとするも、教會の中心たり眞髓たる信仰は、他に比類なく積極的に、自覺的にして、從來繼承せる傳説に、寸毫も違ふなき證據に訴へつゝ常に不動不易なりき。

歴史上に  
あらはれ  
たる三位  
一体の諸  
種

些此に論及せしは、之と同様の比較研究法の誤用によりて、屢三位一體教義を論じ去らんとするものあるが故なり。歴史上よりせば、三位一體の論義は、屢世にみる所なり。例へば、三重群位の意味に於て、印度の神々のうちにも三位一體ありき。古のハビロニヤ及び埃及にも然りき。哲學的の三位一體は、プラトール既に之を見、殊に新プラトール派に於て著かりき。かくて基督教の三位一體は、是等在來のもの、孰れかより籍り來れるか、若くは是等の思想の侵入せる當時の思潮たる三一式の論法より籍り來れるならんと云ふものあるも、敢て怪しむに足らず。加之右の想像説を可能ならしむるものは、新約諸書の著作の時日を、著く後代のものとせんとすることなり。其結果として、基督教史の第一世紀の全期を通じて、之を一種の暗黒時代とし、如何なる外來分子にても、容

易に本來の信經に混入し得たらんとす。かくてパウロ及ヨハネの記録を以て、長期の智的發達を経しものとす、其間に三位一體の教義は、イエスキリストの初め傳へし宗教に次第に混入するに至れるを示すものとなすは容易のことなるべし。されど今日に於ては、苟も世に名ある多くの批評家は、聖パウロ及びヨハネの記録の時日に關して、右の如き極端なる説を棄てしは、何人もよく知る所なり。進歩派の批評家と稱せらるゝものゝ多くは、在來の批評家よりも、多く書簡を以てパウロの記述に係るものと認め。又第四福音著作の時日をも遙に古に歸せんとするに至れり。かくて其結果として、以上の諸書の内容を發達に歸せんとするの難きを覺ふるに至れり。

されど、尙之よりも肝要なるは、右に關する諸種の議論の結果、新約書に關して教會の傳承的見解を持つる廣義に於ける保守的の批評家の立場が、智的に著く強固にせられしとなり。之には二の理由あり。

第一は、最も極端なる消極的批評の非科學的なることは、其の説が主觀的にして、不確實に、かつ曖昧なること多きにもよりにて益明にせらるゝに至り、到底

批評の  
もたらす  
側面より  
の光明

聖パウロ  
の例

嚴密なる抗論に堪へず、從て基督教の立場を攻撃する功果に於ても信用を失ふに至れる事。第二は、批評とは必ずしも唯一方にのみ偏するものにあらざるを示せることなり。そは批評が枝葉に涉るの結果、側面より光明現はれ來りて、却て基督教の位置を堅固にする事屢あればなり。一例を挙げば、聖パウロは、歴史的にイエスキリストの人としての生涯の詳細を知らず、又た之れに重きを措かざりしとの臆説は、遂に聖パウロの諸書簡を一層綿密に調査するに至らしめし結果、彼が史的の細目に論及するを見、從つて彼は個人的に此らの事項を知れるは、道徳的に確實なると同時に、彼は其書の讀者らも、等しく是等の事項を知れるものと前定するの風あり。從つて之は本來の教説の一部を爲せるものなるを確むるに至れるが如し。今此に此點を詳論せんとするにあらず。唯批評的の攻撃は、却て攻撃せられし説を確定するに至れる一例を示めすに過ぎず。使徒行傳の歴史的正確に關しても亦同一の結果あり。尙他に引照せんとせば多くの例なしとせず。かくて新約書に關する傳說的の立場は、常に充分批評に堪へ得るのみならず、即ち之に相當する批評を以て之に應對し得るのみならず、

却つて批評によつて強固にせらるゝに至れり。詳言せば、攻撃に會して之に應答する毎に、更に強固となるに至れり。

かくて、聖パウロ及び聖ヨハネが、傳說的の位置に復歸せらるゝときは、異分子が混入せりとする暗黒時代たるものは消えうせ了る。従つて前章の主張、即ち三個特獨の神の身位は、是非とも何時か或る方法によりてキリスト自身によりて教へられしなるを暗示するのことは更に強固にせらるゝを見るなり。加之、此の結論は、新約の他の諸書によりて確定せらる。此の事はキリストが他の異なる根源より籍り來れるならんと人をして思はしむる如くに教へられあらずして、『學者の如くならざる』權威ある語調によりて教へられ、自からの身位を世に示し、又自ら人に忠節を要求する主張と共に説かれあり。聖パウロも亦之を同一の方法、即ち思辨的にあらず、インカーネーションを實際的又現實的の前定とし、神は先づインカーネーションを可能ならしめ、次で贖罪を遂げ、人の靈に其意義と功德を解せしむるに至れるなりと縷々述べたり。かくて教會に繼承せる歴代の師父によりて反覆せられし傳説とは、此教理はキリストより

此教義に  
關する教  
會の傳説

直接に使徒らによりて傳へられしものとするにあり。

以上は第一世紀の終らんとする頃、クレメントがコリント人により贈れる第一書全體にあらはるゝ所なり。曰く

『使徒等は、われらの主イエスキリストによりてわれらに説き教へ、イエスキリストは、神よりしてわれらに説き教へられぬ。そはかれらは、命令をうけ、かれらの主イエスキリストの復活を充分に確かしめ、神の道によつて確信を得、又聖靈にみたされてのち、初めて四方に出でて、神の國は近けりと説きしなり』。

クレメント  
の第一書  
の言ふ

又僅かに數年の後、イグネシアスは、マグネシヤ人に書き贈りて曰ひけるは。『されば、われらの主と、其使徒等の教理を學ぶべし。さすれば、身も心も、子と父と聖靈によりて安けかるべし。汝ら監督に服し、又互に服すること、イエスキリストが、肉體に於ては父に服したまへる如く、又使徒等がキリストと父と聖靈に服せるが如くすべし』。

又かれはエペソ人に告げて、

イグネシヤ  
のアシマ  
グチの  
人に贈れ  
る書

其エペソ  
人に贈れ  
る書

『彼らは「父」の殿の石にして、其の機械によりてあげらるゝが如く、キリストの十字架によつて高く擧げられ、繩を用ふる如く、聖靈を用ひて、建築用に供へられんとするもの也』。

以上の記者のいづれも、此の三位一體教義に關して、特に詳く教へ示すの風みえず。却て之を當然の事とし豫ねてより知れ渡れる事として、極めて自然に語り出されあるは、注目すべき事にして。是等の書簡の記されし年月の古きを念ふときは、其意味頗る深きを覺ゆ。われらは之によつて、使徒時代にまで遡らざるを得ざらしめらる。更に之を比較的明瞭に言明せられある一世紀後の記事に比ぶるとも、此の教義に關する教説の實質に於て同一なるは明なり。オリジンの記事は、最もよく之を證せり。そはオリゲンは、最も思辯的の記者にして、機會あれば其思辯を恣にすること、人のよく知る所なればなり。從て此教義に關して彼が傳説的の立場を堅く守るをみるときは、此立場をして益重きを爲さしむるものなり。オリゲン曰ふ

『聖なる使徒等が、キリストに關する信仰を説くとき、何人にも肝要なりと思

オリゲンの  
言ふ所

はるゝ特殊の點に於て、能ふ限り明白に説けるは、最も注意すべきなり。其特殊の諸點とは、第一、萬物を創造し、又按配せる一の神ある事なり……此神は、其豫言者等によりて、豫め告げたまひしが如く、イエス、キリストを遣はして、先づイスラヘルを招き、次に異邦人に及ばしめんとせり。……第二には、此世に來りしイエスキリストは、よろづの被造物よりも先きに、父より生れたるものにして、萬物創造に於ては、父の使ふ所となり、『萬物は彼によりて造られたるが』、遂に時の充つるに及びて、其榮光を棄て、人と爲り、自から神たれども、尙人の肉體をとりたまへり。人と爲られしと云へども、神たることは固の如くして、處女と聖靈によりて人の肉體をとりたまひし事。第三には聖なる使徒等は、聖靈を以て、榮譽と尊嚴に於ては父と子に相等しとせる事などなり。加之、かくまでに、細心注意して、誤謬遺漏なきをつとめし傳説は、唯數人の個人によりて繼承せられしにあらずして、基督信者全團によつて、傳へられしなるを忘るべからず。即ち、アイレニアスがポリカールに譲り傳へ、ポリカールはまた聖ヨハネに然かせりと云ふが如きにあらずして、此信條によりて立て

る一大團體の共有物にして、又此信條が結べる實なる聖なる生涯と、勇ましき死によつて、其讓與を固めかつ聖めし數千の唇によつて譲り傳へられしものならざるべからず。

傳承せし  
は個人に  
あらず  
會なる一  
大團體也

最後に謂はんとする所は、此傳説は、其内容の出所が、全く忘れられたる時代に起り、他の多くの繼承せる傳説と、何ら相共通なるものなしとするが如きものにあらずして、其出所に關しては、最も明白に主張する所あり。即ち實際に於ては、此傳説は新約書と相觸れ相共に證明して、三位一體に關する基督教々義には、何ら他の異分子の混入せしとあらざるべきを證す。そはわれらは、其本源に遡り得ればなり。かく云ふとも勿論此教義が言明せらるゝに至りしとする時以後に出で來し神學上の熟語に關して言ふにあらずして、其の眞髓即ち父と子と聖靈は互に相關しなからず、各個別々なる其存在と作用に關して云ふなり。

加之、此教義は、其單純なる點に於て、其藉り來れりとせらるゝ外來出所のいづれのものにも相似ることなきなり。東洋思潮と哲學分子の折衷の結果として

現はれたるノスチック學系なるものあるも、之ほど基督教々義と相反するものは他にあらず。兩者の相違は之れ御伽話と事實の相違の如し。

要するに、基督教眞理は、輕々しく之を投げ棄つるには、あまりに明確にして且權威的なり。此傳説は、新約書の明瞭なる證明を説明し、且つ確定して、三位一體の教義は、イエス、キリスト自身より一默示として與へられしものと爲す。其之を表彰する爲に、後世種々の言明の法をとるに至れる如きは、第一要件にあらざるなり。

## 第五章 新約書に於ける教義的發達

聖靈によつて指導せらるゝこの念は、初代教會の主要の特徴なり。

されど此指導はよわき人間を器として行はれしものなり。

三位一体の教義は、キリスト自身によりて教へられしと信するの理由は既に説きたり。

聖パウロ及聖ヨハネは、之に新しき字句を衣せて、其範圍内に於て之を發達せしめたり。

此文句は既に廢れたる思想法を含むものとして屢排斥せられ、從て今日之を維持する能はざるも  
のさせらる。

されど此文句は、其古き文意をそのまゝ把り來りて、之に新なる基督教的意義を與へしものなり。

かくて教會は之を以て聖靈の指導に依れるものなりと信ぜり。今尙しか信ず。

然るに此發達を以て誤謬なりとするものは、其必然の結果として右の見解を排す。

基督教會の斷する所によれば、此指導の結果は單に注解に止り新奇の説を作り出せるにあらずとす。

ニケヤ會議に於けるアマナシアスの用語と比較して、之は相續財産監理の如きものにして、新説を  
出せしにあらざるを知れ。

概括。

初代教會  
に於ける  
聖靈の指  
導の念

使徒行傳及傳道書簡に於ける教會の特徴は、聖靈の指導の念より最も著きものはなし。福音書の示す所によれば此指導は、キリスト自からによりて約束せられしものにして、其の特殊の目的は、主に關する意義を尙充分に會得せしめん

とするにありき。『わが名によりて、父の遣はんとする訓慰師、即ち聖靈は衆理すべのこを爾曹に教へ、またわが凡て爾曹に言ひしことは爾曹に憶起さしむべし』<sup>10</sup>訓慰師を父より遣らん、即ち父より出る眞の靈なり。其きたるとき、わが爲に證を爲すべし』<sup>11</sup>われ尙多く爾曹に語るべきことあれど、今汝ら曉ることを得ず、然れど、彼は、すなはち眞理の靈の來るとき、爾曹を導きて、凡ての眞理を知すべし。……彼わが榮を顯はさん、そはわが屬をうけて、爾曹に示せば也』

消極的批評家の稍甚きものは、是等の約束の正眞なるを否み、從て教會が此約束に應せんとするを一幻想に過ぎすとす。されど、此約束と其成就とを信する基督信者にとりては、後日發達せる教會の生命と教義の鍵を此に發見する也。

『此事は聖靈とわれらによしとみえたり』。されど此發達を正しく解せんとするには、此文句にあらはれたる二語、即ち無謬の靈たる聖靈と、誤謬に陥り易きよわき人間の器たる「われら」<sup>12</sup>とを記憶せざるべからず。教會の歴史は、此ら二個の勢力の結果に外ならず。即ち一は神威インスピレーションを與へて、啓發し指導するものにして。他は之と協力するも常に幾分か其避くべからざる制限に依りて、折角のイ

聖靈と人  
問

個人の信仰の歴史の歴史

ンスピレーションと指導の結果をも限らるゝに至るものなり。歴代の基督信者は、其傳記が示すが如く、又われらの經驗によりて知る如く、皆其生涯を支配する此二個の勢力あるを知れり。彼等は生命を與ふる靈あるを確に感せると共に、又己れの無知と不用意と、勇氣と信仰の欠乏と、罪に傾く遺傳性の爲に此靈の作用を妨ぐると多きをも感せり。されば教會の歴史とは、之に屬する個人の歴史を大きく書けるものなりと云ふを得べし。時には聖潔の生涯を送りし人々あり、又信仰あつかりし時代にあつては、人間の器の故に、靈の作用の妨げらるゝ事極めて少なかりしときもなきにあらねど、後に暗黒時代來りて、奸悪は教會の高坐に充ち、聖靈の光は殆ど消え亡せしが如くみえし時もなしとせす。されど、かゝるときにすら、聖靈はかくれたる人の生涯に、又は淋しき場所に在して、活力を與へ、復舊し、又復興する力を示せり。

三位一体の教義形成の經過

此に論せんとするは、此聖靈の指導に依れるものゝ一、即ち三位一体の教義形成の經過にあり。此教理の本體は、此事に關して唯獨り所要の權威を以て教へ得るキリスト自身より出しと信するの正當なることは、前に述べしが如し。即

三位一体の教義の出現の場所キリスト自身にあり

ち聖トマス、アタイナスの言ふ如く、『通常の理性によりて、神のうちなる數個の身位を知る事は難し。通常の理性によつては、神の本體の一なるを研め得べし。されど神の衷にある身位の區別に關しては知るべからざるなり』。彼に鋭鋒を向けしダマス、スコタスも、此點に於ては、彼と同説なるは注意すべきなり。されば、もし此教理にして、聖パウロ若くは、聖ヨハネより出でたりとせば、或は如何に神インスピレーション感を受けしとするも、唯通常の人より出でしものなれば。人間の思索若くは神秘的本能よりも勝りて、教會を動かす力とはあらざりしならん。然るに實際は全く之と異にして、之を以て神の點示に成れる一事實として、常に見來りしを知る。尤も聖パウロ及聖ヨハネは、之に衣するに新文字を以てし、當時の思潮に投合せしめしは明なり。かくて此兩人は此教義の發達の端緒を開き、後に教會の諸總會之を受けて、更に完成せしが、之によつて、此兩人は此教義が楯とする二大典イニツテ據となるに至れり。

此教義に於ける聖パウロ及聖ヨハネの位置

右の結果としてあらはれし、三位一体の教義の最後の定義は、爾後教會によりて權威をもてるものとして認めらるゝに至れり。然るに今日にては、屢説を爲

すものありて、此定義は、今日にては、何人も願ふものなき哲學語によりて發表せられれば、今日の基督信者としては、之を受くるを要せず。勿論教會の諸總會は、其不確實なる指導の下に行はれしものとすれば、此問題は論外の事となるべけれど。聖靈は前にも云るが如く、人を器として作用する故、其範圍も從て之が爲に幾分制限せらるゝことゝなるを免かれず。聖書に於けるも同様にして、其内に人的分子あれば、今日にては、句々字々、皆インスピレーション神感を受けしものとせざるに至れり、聖パウロ自からも、おのれの言へる所と、主の云ひたまへる所とを、明に區別する如く。總會の歴史を讀むとき、われらも同様の状態を見るは怪むに足らず。されば、此問題は固より其有する功力より打算して論せざるべからざるなり。

「ロゴス」  
其語の  
由來

今此に特殊の例として、聖ヨハネの用ひし「ロゴス」即ち「道」なる語に付て考ふれば。之れ新約書中最も新奇にして、又最も後代の思潮に多大の影響を與へしものなり。原來此語は人の皆知る如く、早くより希臘及び、ユダヤに用ひられしものにして、フィロ、及フィロが代表者たりし當時の一般の學者界に對

する爲に用ひられしものにして。一方に於て後代のユダヤ文學に著く發達せる「智慧」若しくは「主の道」を詩的に人格化せると同時に。他方に於て、ストイック派の云ふ所の遍在せる理性、及びアリストートル一派の「形體」及プラト一派の「觀念」に遡り。更にソクラテス以前の先哲等が、世界の合理的にして秩序整然たるを示す爲に用ひし種々の表エキスプレッション明に接觸せしむ。聖ヨハネは、此の語にユダヤ風の意味を附けしも、後には希臘風の方面著くあらはれ來れり。今日にては何人も智慧を人格化せんとするものなく、又プラトリーヤストイック流の觀念説を持つるもの誰もあらざるは勿論明なる事なり。されど之が爲にとて、此語は昔是等より籍り來れるものなるを否定することならず。實際を言へば、新信仰は是等舊來のものより新なるものを出し、其新なるものは、其後舊來の信仰に屬せず、新信仰に所屬するに至れるなり。

『メシヤ』の場合に於ける亦然り。イエス、キリストは、其本意に於て此語の眞なるを認めて之を採用し、ユダヤ人の抱ける著きメシヤ的待望に最後の保證を與へしと同時に。他方に於て、一般人民の心に存せる此待望の形を大に變じ

「メシヤ」  
の語



たまへり。かくて、ユダヤに先例なき「キリスト」來りて、説教し初めしときは、此語は全く新意義を有せる一個の新名稱と爲り終れり。初はユダヤの過去より出で來りしものが、其出で來る間に變形せられて。ユダヤ教は全く之れと異なる一個の新きものを産み出す準備に過ぎざりしを示せり。

「ロゴス」なる語に關して生せる経過も、右に類似せるものなり。之を採用して、當時希臘思潮が、世界を以て合理的にして、秩序あり、調和あるは、全く之れ神の觀念より出るなりとせる傾向に投合せしめ、同時に是等の觀念を主の智慧若くは道（ドクトリン）と云ふ如き人格的代理者とせんとせるユダヤ思想の傾向にも投せしめんとせる也。

かくて、是等二個の傾向は、各其方向を誤らずして、遂に其預想せざりし結論にまですゝみ。神の子のインカーネーションと云ふ世界の歴史に於ける一個の新事實に對する、一個の新名稱を其言語の中よりつくり出したり。かくて此語は、舊き聯想より抽き出されて、基督教の標象（シンボル）としてあらはるゝこととなり、もはや其以前有せし意味に於て解せられずして、今は其語の所屬する基督教的

三位一体の信條に信託する新約書の説明なり

舊語の新意

舊信仰を新語に移し植せり

意義に於て用ひらる。勿論若しインカーネーションを信せずとせば、全く別論となるべし。そは然る時は、此語は今は廢物となれる形而上學的思想を、原始的基督教に注入せるものとせられ、從て其の意味に於て全く廢物となればなり。されど之れに反して、インカーネーションを信するものにござりては、此の語は其の信仰に何ら附加する所なく、唯だ一個の説明を加へしに過ぎざるものとなる。されば此の語の使用は『ユダヤ及び希臘の哲學が共に求めつゝありしものにして、其一たび現はるゝや、以前の形を朽廢に歸せしめしと同時に、其固有の眞理の要素を、一層擴大せられたるおのれに吸収せり』と云ふに同じ。之れは恰も教會若しくは宮廷に於ける儀式に、古代衣冠の使用を保存するが如し。之或は今日の流行にはあざざるべし、されど其古代より繼承せる點こそ、今のもとの内部に於ては、同一なるを古きものによりて表示するものなればなり。

此例證はわれらが基督教々義の發達と稱するものを能く説明するものなり。即之れ信仰の新箇條を説き示さんとするものにあらずして、本來の信仰を新き時

三位一体の存するに過ぎざるなり。キリストは三位一體なるもの、存すること、おのれの此世に來りし意義に關しては、自ら教へたまへり。されば之を人智によりて解釋せんとするに於て、此原來の默示に何らの加ふる所なく、又加ふる能はざりしと共に、人が此教理を説明せんとするに當り、聖靈の指導ありて、本來の意義を尙充分人に悟らしめ、一種の新真理の如くならしめしを信ず。『彼爾曹を導きて凡ての眞理を知らしむべし。』

聖靈の指導に關する信仰

聖靈は人を器として用ふるに於ても、個人性を没却せず

靈の指導と云ふも、亦之れ一個の信仰にして、之を反對の批評家に強ふる能はざるは勿論なれども、われらは之を以て、本來合理的にしてかつ正當なる信仰とし、其指導に充分信頼するに足るものありとするものなり。更に注意すべきは、聖靈は人を器として用ふるるとき決して其個人性を没却せしめざる事なり。且福音書によりて、使徒中には、賢明の度に差異ありしをみれば、從つて其傳へし音の意義を充分に解せんとするに於ても、鋭鈍の差もありしならん。聖パウロすらテサロニケ書及ガラテヤ書をかけるときと、コロサイ書及エペソ書をかける間に、其神學思想に著しき進歩ありしを見る。聖ヨハネ

もわれらの信する所によれば、其「心靈的福音書」を書く迄には、極めて長き間の默想を経たるを見るなり。されば假に使徒中、其或者は此新信仰に關して知る所、他のものよりも劣れるものありとするも、其理由は之によりて説明するを得べし。されどかく云へばとて、之れ父と子と聖靈に關する默示は、キリストより來らずと云ふにはあらずして、唯單に或る人々は其含蓄せる意義を悟るに他の人々より稍遅くかつ鈍かりしと云ふに過ぎず。即ち近世の語を用ひて云へば、其制限は、主觀的にあらず。されば、若し聖靈の指導なるものが、眞實の事なりとせば、之が眞の解釋者たるべき者は、其本來の意義を最もよく知れるものにして、知る所最も少きものにあらざるなり。此點に於ては、聖パウロ及聖ヨハネを以て、基督教神學の二個の主なる創造者たりと云ふも過言にあらざるべし。勿論かく云ふども、之れ神學の發明者と云ふ意味に於てにあらずして、此神學に關して、最も神感を得たる最初の布衍者としてなり。

曾て使徒全體をみるに、彼らは原來の信仰を保存するに完全無欠なるも、之を流布するに於て、稍控へ目に過ぎ、從て之を晦澁ならしめたる傾向ありしことあり。されどかゝる説は、心理學上よりして、不可能なるのみならず、われらが知る所の事實と符合せず。基督教はユダヤ教の搖籃より離るゝ頃よりして、之を理解し之を布衍するに於て、進歩と發達はたしかにありしに相違なく、又しかあらざるべからざりしならん。かくて世界的に且普公的の宗教なりと主張しつつ、當時の宗教的智識及び社會的勢力と直接接觸るゝに至れるは明なり。そは此らの諸勢力に對して、基督教の態度を、明にするの必要ありしなるべく、之によりて當時の思想制度及慣習の或者を擇びて、之らをおのれと同化せしめ、聖別せしめ、同時に他のものを排棄したるべければなり。此時代思潮に投合せんとするに於て、教會は一に聖靈の指導に待つところあり、基督教の主要部分として此指導を信する事は、インカーネーションを信するに於けるが如くなりき。されば此點よりして、キリストは何ら此事に關して語るどころなかりしとして消極的の推論をなさんとする批評家に答ふるを得べし。是等の批評家はわ

教義の理  
祖述の  
發達の  
進歩

これらの有する斷片的の記録に徴して、キリストが曾つて言及せしことなく又特に切言せざりし諸問題は、全く之れキリストの知解以上によりしならんご想像し。從てキリストは其教説が後に廣大なる社會的若くは智的發達を成就すべきを預想せざりしとなす。

勿論、以上の如き見解は、キリストの人格と事業に關する人間説の一部に過ぎざるべし。されど教會の立場は、全く之に反して、キリストの事業も聖靈の事業も、宗教的生涯を繼續するに於て協同的なりとする也。キリスト此世に住み、教へ、死に、甦りて、世界に其事業を繼續せしむる爲に、人間の器を撰べるべき、確實なる約束を與へて、彼らは彼の靈によりて、其心啓發せらるべしとせり。やがて約束せられし靈は來り、教會經營上一主要素となるに至れるなり。

教會經營  
と聖靈

アタナシアス曰ふ『われらは靈を離れては、神より遠かれるものなれど、靈を受くることによりて、われらは神と結合せらる。されば、われらの父に結ばるゝは、われら自らによるにあらずして、われらの衷にあり、われらの衷に宿る靈によりてなり』と。而てかくの如きは、之れ各時代を通じて、基督教會の信

仰にてありしなり。

然るに近世の多くの批評家は、基督教史を書き改めんとするに當り、教會が繼承し來れる右の信仰を全く無視す。或は寧ろ教義の發達を以て教會の他方面の事項に於けるが如く、之れ原始福音を變更せるものにして不眞實の事なりとせんとす。かゝる見解は必ず常にインカーネーションを初に否定してのち、福音とはキリストの人格と世界の人々の信服を要求する其主張より成るにあらずして、單にキリストの倫理的教説によりて成れるものなりとす。かくて其教説中に明白に存せざるものは、皆外來の異分子の侵入によりて成されたる追加若くは不用意の附加にして、非詭辨的の福音の變更し、遂に一個の聖奠制度となり、又形而上學的の信經となるに至れるなりとす。

之は既に述たるが如く、聖靈の指導を信する信仰と兩立せず。又從來基督教史に關する基督信者の見解たりしもの又其常に然あらざるべからざるものにも反するもの也。此説は博學なる歴史家によりて提供せらるゝ時、屢歴史的事實に關する彼等の優秀なる智識にくらまされて、彼等は我等と歴史の見解を異にす

近世批評家の誤謬

教會史に於ける聖靈の作用無視

る根本事實を看過することあり。

彼らは基督教を以て連續せる外來諸勢力によりて變形せるものとするも、われらは之に反して、此諸勢力こそ、基督教の内的同化力によつて變形せるものなりとす。此事は今論究中の三位一體説の如き中心教理に於て然りとす。そは長き年月の間には、種々なる外來の習慣と意見が、基督信者の一般の行事と信仰に侵入し來り、種々の程度に於て、當局者より認可せらるゝ至りたるは疑ふべからざればなり。加之此らの侵入の正確の時日若くは起原を探ねんとするは、換言せば其如何なる點に於て、是等のものは有益なる適應より、遂に有害の誤化となりしやを知らんとするは頗る困難也。而かも右の如き場合に於て、人間の動機と、時としては無學若くは迷信的の動機より出でしこと明白なるものと、教會が故意に權威と自覺と祈を以て、其根本教義に關する會議に於て決定せしものとの畧區別するを得べし。然るにかく迄に甚しく異なるものあるに拘らず、共通の經過よりせば、兩者ともに世俗的起源より出でし觀念の同化ありとて、是等のものと妄に混同するは、之れ歴史を書くの批評眼を有せざるものなりと

教會の進歩と聖靈の指導

かくの如くにして、基督教會は、教理の進歩的形成は、聖靈の指導によれるを堅く信せしと共に、此經過は新説を作り出せるにあらずして、單に註解に止まれるものぞせり。即ち本來の教義を新思想に適應せしめ、新に出で來し批評家等に對して、其意義を詳説せしに過ずして、決して本來教義に何らの加ふる所なく、又信仰の新箇條を斷定せしにはあらざるなり。

最も著き此例證は、アタナシアスがニケヤ會議に提供せし説明に若くはなし。殊にアタナシアスも會議も、共に新用語を信經に導き入たるものなりと認めらるゝに於て然りとす。彼の言ふ所によれば、アリウス派の或者は、一會議を聞き、一個の信經に日附を附して發表せり。此事に關して彼は叫んで曰く「ウルサニアス、バレンス及ジャミニウスと其同僚等は、基督信者の間に未だ曾て起りしこと無く、未曾て聞しことあらざることを爲せり。彼等は恣に自ら好んで信する所のものを摘録し、執政官の序言と年月日を附して、彼らの信仰は古のものにあらずして、現に今のコンスタンチアスの世に出で來れるものなるを識者に

アタナシアスのニケヤ會議に關して云ふ所

新用語と新意義

知らしめんとせり』と。かくて彼は、之を時日を附せずして發表せしニケヤ會議の議定と對照して、先づ復活日の時日を一定する爲教會の規定をつくりて『之を善とせり』と云ひ、『されど信仰に關しては「之を善とせり」と書かずして、『公會はかく信ず』と書き、其信する所は、一個新奇のものにあらずして、使徒より傳承せるものたるを明にせり。かくて其書き記せる所は、彼らの發見せるものにあらずして、使徒等によつて教へられしと同一のものなりき』と云へり。アタナシアスの謂ふ所は、極めて明白にして、ニケヤ會議も亦遺紹を保護するに止り、其定義によりて、何らの新説をも紹介せんとせざりしを知る。勿論新用語には、新意義の伴ふは免がれずとするも、此意義なるものは、基督信者が既に信せし所のものを説明せんとするに過ぎざりしは、極めて明なり。三位一體の教義の形成に與かれるものゝ見る所も、全く以上の如きに相違なかるべし。

以上の所論を約言せば、教會が聖靈によつて指導せらるゝことを信する信仰は、インカーネーションに於ける信仰と兩々相對峙せり。されどわれらが或行爲を以

概括

て、聖靈の此指導の結果なりとするとの確信は、反對家の容れざる信仰の行爲なるも、其場合の特殊の事情に應じて種々あるべし。聖パウロ聖ヨハネの場合にありては、此指導の要素は、最高の程度に於て與へられしと云ふを得べく、同時に人的要素も亦其絶頂に達せりと云ふべし。之れわれらが彼らを以て、インカーネーションの意義に關して新光明を投じ、従つて偶然に三位一體の意義にも同様の結果を與ふるやう新語を撰擇採用するやう神の指導をうけしものなりと信する所以なり。勿論之を以て直に字句的靈感インスピレーション若くは書ライティング取と解するの要なし。使徒らは、皆靈感を受けし人々なりき。彼等は當時の思想に適合すべき最上の語を擇べり。しか爲すが爲に、是等の用語を其地方其當時の語より採用し、之を特殊の基督教的觀念に適用し、遂に之によりてあらはさるゝ真理と共に不易のものとなるに至れり。

かくて聖パウロ及聖ヨハネは基督教神學の主要なる開拓者となれり。彼らの後を追へる教會の師父も同一の靈の指導によりて、此使徒的方法を追へるものなるを自から信じ、此二人の使徒等が教へし所を更に詳に説明せんとするを唯一の目的とせり。されば聖パウロ及聖ヨハネの教説は、原來既に存せしものを、靈感をうけて説明せしも、キリスト自身の教説中に固より存せしものに、何ら新に附け加へし所なしとする意味に於て、基督教々義の發達を形成せしなり。

### 第六章 教會師父の間に於ける教義の發達

基督教師父は、われらが神の存在に關して知る所を肯定す。されど神の性質に關しては何ら知る所なしとす。

アレキサンドリヤのクレメント

オリゲン

アタナシウス

パシルと兩クレゴリー

ヒラリオンとアウガスチン

ダマスコのシモン

之れ畢竟、宗教的敬畏の念より出でたるものにして、智的の不知論に因るにあらず。されば、かれらは神の性質を彼是と思索するをさけて、唯聖書と使徒的傳説に訴ふ。

第一に子なる神に關する教義に於ては

オリゲン

アタナシウス

第二に聖靈に關する教義に於ては

クレゴリー、ナジアンゼン

ヒラリオン

ニセタス

以上の引照は、師父全体の態度を示すものなり。是等は注釋上の發達を示すも、信仰の新箇條にあらず。然も新用語は、われらをして思想の舊形式に

陥らしめんとするものにあらず。

師父らは基督教を希臘哲學より出でしとせしめて、ユダヤ教より出でたりとす。

かつ基督教會は、其初期に於て、其特徴は強固にして、決して當時周圍の非基督教的勢力の影響を蒙るが如きものなかりき。

前章に於て、三位一體に關する聖パウロ及聖ヨハチの用ひし語は、基督教會の不變用語の一部となるに至れるを示し。かつ之を用ふるは思想の舊形式を保持せんとするにあらずして、單に基督教信條を保持せんとするにあるを示せり。

今よりは、之と同一のことを其後繼者に關しても言ひ得るや否やを見んとするに當り、教會師父らは、神の存在に關する智識と、神の性質に關する智識を區別せることを、先づ心に止むるは必要なり。而て此點は一般に人に知られあらざるを以て、此に二三代表的の引照を爲すも、無益にあらざるべし。

アレキサンドリヤのクレメントは、プラトンの言をよしとし引用して曰く『宇宙の父にして、造主なるものを發見するは、難き事なり。幸に之を發見せることきにも、之を人々に傳ふるは不可能なり。そは他の事に關して謂ふ所のものは、

神の存在に關する智識と、神の性質に關する智識との區別

アレキサンドリヤのクレメントの言

此に用ひ得べからざればなり』。かくて自ら進んで曰く『何人も神を全く正しく示す能はず。そは其至大なるの故によりて「下全の者」<sup>デス・オール</sup>とせられ、又「宇宙の父」<sup>パターナル</sup>とせらるればなり。又如何なる部分も神の屬性なりとする能はず。そはかれは分離すべからずして、形も名も有せざればなり。若し命名せんとして、「獨一者」、「善者」、「心」、「絶對的存在者」、「父」、「神」、「創造主」、又「主」と唱ふるも尙其當を得たりと云ふを得ず。……されば、われらが知るべからざるものを知り得るは、唯彼より出る言によりてのみなり』。キリストに一体となれる場合に於てすら『神を知り得るは唯幾分のみにして、神は如何なるものなるかを知らず、唯神とは如何なるものにあらざるかを知るのみ』。オリゲンの言ふ所も亦かくの如し。『嚴密に云へば、神は解せらるべきものにあらず。又圖り得べきものにもあらず。……何とも名狀酌量すべからざるもの、卓絶せるもの故、人間の最も清淨にして聰明なるものにて、神の性質は解する能はざる也』。

又プラトニーより引用して、以上の句を詳解して曰く『われらにとりては、神を

オリゲンの言ふ所

アタナシウスの言ふ所

探ぬることは、神よりのたすけなくしては、到底明に知ること能はざる也。神は全力を盡くしてのち、神のたすけを要するものにして、神のよしとみたまふものに、其人及び神を知らんとて身體にやざる魂の力の堪へ得る限りに於て、おのれを知らしめたまふべし』。

以上の教會最初の二大哲學的神學者の言ふ所なり。アタナシアスは、一世紀の後、之を傳へて曰く『萬物の造主、萬物の主にして、われらの實質とわれらの發見以外にいます神は、其語によりて……人類を其形に像ざりてつくりたまひぬ』。

『神は其性質上、見るべからず、解すべからず、すべての造られしもの、上に超然たれば、……其自身の言によりて、宇宙に秩序をたて、人をして、其みわざによつてなりとも、彼を知らしめんとしたまひぬ』。

『神はおのれの「道」<sup>ドクトリン</sup>によつて、人類をつくりたまひしとき、人は到底其性質上の弱點よりして、其造主を知る能はず、神に關する何らの觀念をもつくる能はざるべきを見て、……おのれの像の幾分を與へ、……その像にかたざり、お



のれに似せてつくりたまひぬ。されば此像即ち神の「道」（ことば）をみて、「父」に關する觀念をつくるを得せしめたまへり』。神は如何なるものなるかを理解するは、不可能の事なれども。神は如何なるものにあらずとは云ひ得べし。』。

之に次ぐは、カバドキアの賢哲バシル及び兩グレゴリーなり。

バシル  
兩グレゴ  
リイの言  
ふ所

バシル曰ふ『われは神ありと知る。されど神の本質如何とは到底わが理解以上なり。……信仰によりては、神ありと知り得べし。されど神は如何なるものなるやを知り能はず。』。

ニサのグレゴリー曰ふ『世界の造主に關しては、われらはかれの存在するを知る。されど其本質如何に關しては知らずとするを否まず。』。

拉典師父  
も希臘師  
父と同調  
也

かくて希臘師父よりラチン師父に轉するとき、同一の語調の用ひられあるをみる。特にポイクチアのヒラリー及びアウガスチンに於て然りとす。此二人はともに三位一體に關して、特に論ずる所ありしものなり。

ヒラリー  
の言ふ所

ヒラリー曰く『神と地上のものとは、到底比ぶべきものにあらず。……されば比較は單に人に便するのみにして、神を寫し出す助となるものにあらず。そは

之によりて暗示を得るとも、全く説明を得るにはあらざればなり。……之と同じく、人の言語も、又人の性質よりする類推も、神の事に關しては、充分に洞察を與ふるものにあらず。此説明すべからざるものは、定義の下に制限し得べからざるなり。……神は一個の單純なる存在者なり、われらは敬虔によりて、彼を知り恭敬を以て告白すべきなり。神は禮拜すべきものにして、五官によりて、探索すべきものにあらず。そは條件的にして、薄弱なる性質のものは、到底無限にして、全能なるもの、性質を知り得べからざればなり。人間の言語によりて、神をよく寫し出すを得るなど、は、以ての外の僭越なることなり。思想は屢之を言語にあらはすには、あまりに深遠なるものあり、況んや神の性質は思想の範圍に超絶するに於てをや。』。

アウガス  
チンの言  
ふ所

アウガスチンに於ても、此種の思想常に散見す。かれも斷ず人間の言語の不足を訴ふ。其曰ふ所によれば、『神は言語に言ひ現はすべからざるものなりとさへも云ひ得ず、そは然か言ふことは既に或事を言ひあらはし居ればなり。然かも神は尙ほ適當に之れを言ひあらはすやうなきが故に、人間の聲を用ふるを許る

し、われらが言を以て神を讚美するをよろこびたまふ』又曰ふ『われらの神に關する思想は、われらの語よりも遙に眞實にして。神の存在は、われらの思想よりも遙に眞實なり』又曰ふ『われらは三個の身位パーソナルと云ふ。されどかく云ふて満足せるにはあらず、唯われらは何とか之を發表せざるべからざればなり』又曰ふ『神は本質エッセンスなりと云ふべき所に通常之れと同義のものなりとて實體サブスタンスなりと云は誤りなり。前者は後者よりは一層眞實にして恰當の語なり』以上の引照は、皆當時の第一流の思想家の言ふ所にして、第二流の人々の言を引照せんとせば限りなからん。されば最後に教會師父時代の末葉に於て教會の正統派信仰として保たれしもの、梗概を引照せんに、其言ふ所左の如し。『われら神の本實を知らず、又其如何なるものなるやを語る能はず……』されば、神に關しては何とも言ふ能力を有せざるなり。又神が示啓したまひし以上に、神に關して思を運らすことすら能はざるなり。神は存在するは明白なり。されど其本質は如何、其性質は如何は之れ到底解すべからず又知るべからざることなり』。

神に於ける信賴

宗教的畏敬の結果

新プラトニ派の感化にあらず

以上は其用語等よりして、一見今日の不知論者アノムチクの如き立場にあるが如くみゆれど、實際は然らず。そは師父らは、神の存在に關するあらゆる自然神學の論法を應用し、世界に現はれたる美、調和及び目的等よりして、神の性格に關して多少知る所あらんとつとめたり。アウガスチンは、特に實體論よりする議論を種々の方面より試みたり。加之、彼等は皆深刻なる宗教家たりしことを忘るべからず。彼等の宗教は、彼等の生命なりき。彼等は各神に信賴すとの確信と其交通とを自覺して生活せり。神は何とも名狀すべからずと云へる同じアウガスチンは『神よ、汝は汝の爲に、われらを造りたまひぬ。われらの魂は、汝によりて息ふまでは、平安を得ざるなり』と云へり。されば以上引照せる句は、智的不知論にあらずして、宗教的畏敬より來れるものなるを知るべし。此敬畏の念は、われらが神と相距ること遠きを覺ゆるによりて一層深くせられしものにあらずして、却て神がわれらに近くいますことを確信と經驗によりて知れるによりて生せるものなり。されば之れ寧ろ恭敬のあまりにかの後代のユダヤ教に見るが如く、神の名を妄に稱せざると同じきもの

にして、新プラトール派が、神の超越、即ち神が世より隔絶せるを説き過ぎたるより來れるものにあらざるなり。

師父のつ  
とめし點

かくの如き言語を常に用ひしものは、神の性質に關して、自家の思辨をめぐらすなどは、思ひもよらぬことなり。而てわれらの知る所、まことに之に外ならず。彼らが斷へずつとめし所は、使徒よりの傳説を保存せんとするにありて、其論據として斷へず訴ふる所は聖書なりき。然るに彼等が異端に對して攻撃せる主要の點は、其新奇なるにありき。アタナシアス曰く『われらの師父が傳へし所のものは之れ眞に教義なり。互に同一のことを告白し、互に異なることなく又師父等と異なることなきは、之れ眞に神學者たるの徴候なり』と

三位一体  
の教義形  
成に與り  
て有力な  
りし者

此には三位一體の教義を形成するに與りて力ありし一二の神學者の謂ふ所を引照せば足らん。此らの人々のうち、オリゲンとアタナシアスにも勝りて著名にしてかつ有力なるものはなし。前者は特に『子』の永しへにいます點に關し、後者は教會をして、遂に『共に一體なり』との語を採用せしむるに力を盡せり。オリゲン曰く『われらは常に神は其獨子の父にして、其獨子は眞に父より生れ

オリゲンの  
云ふ所

しものにして、子となりたれども、其始あらざるものなりと信じ來れり。ヨハネは其福音の始に於て、神を特に「道」として説明せんとして、「道」は神にして始より在りき』と云へり。されば、神の「道」若くは「神の智慧」に始原ありとするものは、生れしことなき「父」に對して、其常に神たりしこと、又「道」を生せしめし者なることを否定するの不敬に陥らざるやう戒しむべし』と。かくて更に此題目に付き、詳言して曰ふ『是等の説は聖書の權威によりて、確定せられあるを忘るべからず。使徒パウロ曰ふ「神の獨子は「見ざるを得ざる神の狀」にして、「萬の造れし物の先に生れし者なり」と。かつ希伯來人に書き送れるときにも、彼は「神の榮の輝、その質の眞像」なり。と云へり。

又曰く『萬の造れし物の先に生れし者』なる神の子か、人となりて此世に降りたまひしは近頃のことなりしとするも、之が爲に決して其存在は近頃に限らざる也。そは聖書は彼を以てすべての創造の工のうち最も古きものなりとし、「我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造」らんと記されあるにも知るべし。又セルサスの反對に答へて曰ふ『われらは決して「唯近頃現はれしものを」して

恰も從來存在せしことなきが如くに、度外に敬はんとするにあらず。そはわれらは「われは、アブラハムよりも先に在るものなり」と云へるを信すればなり。『われらすでに、神の子とは、誰なるかを知れり。かつ彼は神の榮の光輝にして、其質の眞像なるを知るなり。』

以上「子」の永遠に在すことに關して言ふ所は皆聖書に基けるを注意すべし。之れオリゲンの特風なり。

オリゲンの特風

又其第一原則に關する所論の終りに臨みて曰ふ『かくの如き要件に關して論ずるとき、單に人の感覺若くは理解力に頼りて決斷せんとするは不充分なるを免かれず……。されば以上の所説を確定せしめんが爲に、聖書の證明に待つことは必要なり。而も聖書の證明する所……。聖書其ものは、神的のもの、即ち神の靈によりて感動せられしものなるを示せり』。

されば彼は何よりも先づ聖書的にして、其全篇皆然るを見る。時としては其解釋あまりに神秘的に過ぐるが如く見ゆることあり。又單に引例位に止めおくべき諸賢哲の書より議論をも抽き過ぎるが如く見ゆることなきにあらねど、其重

要視せしは、主として聖パウロ及び聖ヨハネにあり。されど彼の著を讀むときは、其希臘學者なるに拘らず、ユダヤの傳説及基督教傳説の思潮より離れざることは、セルサスが、プラトリーの優勝なるを辨明せるに對し彼の答へし所によりて最もよく明にせられたり。彼は叫んで曰く

『プラトリーの「至善」に關する佳句を以て、われらの豫言者等が、祝福せられたる者の「光明」に關して宣言する所と對比して、其差異に注目せよ。而て此問題に關してプラトリーに見る所の眞理は、其讀者をして眞に神を禮拜せしむるに至らざるのみならず「至善」に關して大袈裟に哲學的に言ふ所ある彼自身すら然る能はざるに反して。聖書の單純なる語は、虚心平氣に之を讀むものをして如何に神の靈に満たされしむるかを知れ』と。

かくの如くにしてオリゲンは、其後輩——特にカバドキヤの三人の大學者及兩グレゴリーに深大の感化を有するに至り延て教會の一般神學に大なる感化を與へたり。

されど尙詳く彼に就て言ふ所あらんとする前、先づニケヤ會議に於て、かの有

名なる「一體」なる語の採用せられし際の指導者たり、後之が辯護の一文を草せるアタナシアスに關して云ふ所あるべし。われらは此にも亦上述の聖書的口調をみる。

『われら聖書によりて、神の子は父のまことの「道」にして、又「智慧」なりと知れり。そは使徒は「キリストは神の大能また神の智慧なり」と云へばなり。ヨハネは「道肉體となれり」と云ひてのち、直に「われら其の榮をみるにまことに神の生みたまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理にみたり」と云へり。さればもし彼等(アリウス派)にして、聖書を否認するときは、彼らは直に其名に背くものとなる。されど若しわれらと共に、聖書は神の靈感によりて來れるものなりと云ふに一致せば、何ぞ蔭言をやめ、堂々として然か公言せざる』と。

然るにアウリス黨は、會議は非聖書の言語を唱へたりと詰るや、アタナシアスは辯じて曰く「會議は、アリウス派の非宗教的文句を排棄し、之に代へて、「子」は「神より」の外何者よりも出でずとの從來認められ來りし聖書の語を用ひんと欲せしなり』と。されど、此言明が敵黨によりて誤解せられありしをみるや、彼曰ふ

ニケア會  
議のアリ  
ウス黨

『師父等は、「神より」この語を、一層明白にせんと欲せし故、彼等は「神の本質より」この語を用ひ之によりて、「神より」と云ふは、子に於けると他のすべて造られし物に於けると、共通にしてかつ同等なりと思はざらしめ。かつ他の萬物を、皆被造物として認め、唯「道」のみ、父より出でしと認めしめんせしなり』と。敵黨は云ふ『われらの主に關しては、唯聖書に記されしことのみを云ひ、非聖書の言明を用ひざるは、至當の事なり』と。アタナシアスは之に答へて曰ふ『然り。余も其を至當なりと思ふ。そは眞理の證憑は、他の出所よりするよりも、聖書より正確に抽き出づることにあればなり。されどユーセビウスと其一味のもの、非宗教なる事は、前述の如く、從て諸監督をして、彼等の非宗教を排斥するに更に明確なるの言明を要するに至らしめしなり』と。

彼は同じ書中に、オリゲンの言をひきて、  
『「道」が父と共に永へに存在せること、又其本質若くは實在は父と異ならざること、會議に於て諸監督の主張せるところなるが、勤勉なるオリゲンの書中にも之を見るを得べし……されば、此見解は初より「道」の見證者にして又役者

過傳承の經

たりしものがわれらに傳へてのち、師父より師父へと繼承せられしは明なり。』  
又彼が埃及の諸監督に贈りし書中にも

聖書の立  
證

『新約書は舊約書より起りて、舊約に關して立證するものなり。かくてパウロは神が聖書に於て、其豫言者らによりて豫め約束したまひし福音の使者にてありし。……加之、われらの主は、汝ら聖書を探りみよ、「この聖書は我について證する者なり」と云ひたまへり。されば、先づ主に關する聖書の記事を知らずして、如何で主を宜べ傳ふることを得んや』。

『聖書は萬事に關して、われらの爲に充分にして欠くるところなき故、是等の事項を更に深く知らんと欲するものには、余は神の言を讀めと薦めんと欲するなり』と。

聖靈に關  
する教義

其人格と  
神性

以上に述べ來りし所は「子」に關する教義なるも、聖靈に關する教義に於ても亦之に同じ。聖靈の作動は、使徒傳説の一部を成すことは上述の如し。されど聖靈の人格と神性に關しては、「子」に於けるが如く、聖書には明記せられず。此一事は師父らをして、教義を形成するの必要を感せしむるとき、尠なからず躊躇と疑

ヒラリ  
の三位一  
體論

惑とを感せしめたり。かくてニサのグレゴリーが、コンスタンチノーブルの監督に任せられしときにすら、彼の言へるうちに『或者は聖靈を以て、一個のエンルギトの如く思ひ、又或者は彼を一個の被造物とし、或者は彼を神なりとす。他のものは聖書を尊ぶのあまり、其いづれの説を採るべきかを知らざるなり』と。此最後の點は、此問題を決するには、全く聖書註釋の如何によるなるを示せるなり。此點を明に論せしは、ヒラリーの三位一體論に如くはなし。彼は異端説を抱ける者、特に此點に於て然るものに關して曰ふ『彼等の反逆は、此重大にしてかつ緊要なる問題に關して、われらをして聖書の所説以上に、一定の意見を發表せしめんとするの危険と困難をふくめり。主は萬國の民を父と子と聖靈の名によりて洗禮を施すべしと云ひたまへり。信仰の言は明白なり。唯異端者は此意義に疑義を挿まんとて主力をつくすなり。よしわれらは此點に於て既に定められし形式に何等加ふる能はずとするも、異端者の註釋に對して制限を加へざるべからず……。されど問題は、いかに研究するとも盡くべくもあらず。神に關して主自ら用ひたまひしよりも、更に適切なる語にて言はんとせ

ば、其際限をみざるべし。主は神を父と子と聖靈と名付けたまひぬ。之によりて、われらは神の性質を辯じ得るなり。されど更に深く研究をつゞくるときは、其結果は、言語も發表する能はず、感情も之を保持する能はず、理性も之を理解する能はざるべし。そは其結果は言ふべからず、語るべからず、理解すべからざればなり。』

又其論文を結べる祈禱に曰ふ

『主の聖靈は、使徒の言へるが如く、深遠なる萬事を探知したまふ。又わが代禱者としては、わが爲にわが語り能はざる語をもて主に告げたまふ。主に屬するものの外は、何物も主を洞見するものなく、主以外の如何なる不思議なる力も、主の限なき稜威を量り得るものなし……。パウロは「彼」を「主」の靈と唱へしどき、之にて充分「彼」を言ひあらはせりと思へり。わが身は主の特に撰びたまひし是等の人々と俱に、是等の事項に就て考へんとするも敢て主の聖靈に關して、人智の知り能ふ範圍を越ゆることなくして、單に「彼」は主の聖靈にいますとのみ云はん。』

之と同一の事は、彼よりも其名の比較的に知れざる著者も亦之を言へり。

『信者にとりては、「子」は生れたるも、聖靈は父より出ると知らば足れり。われらは之に關して、聖書に示さるゝ語を用ふるも、父より出るは、如何なる方法にて、如何なる状態に於てなるかは、何人も知るを得ざる所なり』(ニセタス)。右の精神に於て、コンスタンチノーブルの教會總會(三八一年)は、聖靈は『主にして、生命を與ふるもの、父より出で、父と子と共に拜み崇められ、豫言者により語りたまひし主也』と宣言せしなり。

以上の引照は或は多きに過ぎしを恐る。されど引照によりてのみ、われらが與へんと欲する種類の印象を造り得べし。而も尙如何ほど引照をつゞくとも、聖書が師父らに及せる感化の廣大なるを充分に示し得ざる也。われらは頁又頁、章又章、論文又論文、師父又師父の書をよむに、常に舊約及新約よりの同一の引照をみる。されど之れ唯單に註釋せんとの目的より出で、文字を註釋するの外、教理に關しては、本來傳承せる意義以上に解せんとせしことなきをみる。以上は基督教神學の構成運動に與りて力ありし者のうち、其數人の言ふ所を引

師父の問  
に如何なる  
如き種類の  
何なるもの  
なりや  
三位一体  
の教義の  
萌芽

教義の發  
達の性質  
希臘哲學  
用語の探

用せるなるが。是等の人々は其論法に於て、信仰に對する師父全體の態度の標本的の者と稱して差支なかるべし。されば此に見る發達は如何なる種類の者なりや。もしわれら三位一體の教義の因て生ずべきものありしを信せざるときは、重大なる誤に陥るべし。されども此教義の萌芽は、キリスト自身より出でしを信するときは。師父の間に於ける發達は、聖パウロ及聖ヨハネに於て見る所の者と、異らざるを知るなり。即ち之れ權威ある註釋と言明に過ぎずして、信仰箇條に何ら附加せる所あらざるなり。換言せば、古き眞理を表明するに、一新形式をとれりと云ふ意味に於ては、教義若くは教説の發達なるものあるべきも、何ら新眞理の發見もしくは宣告なるものあらざるなり。此區別は頗る機微の間に存するが如く聞ゆるも、頗る實際的のものなり。而て此言明の新形式と稱するものも、亦聖ヨハネの場合に見しものと、全く同一なり。「同體」若くは「同質」は希臘用語にて、當時の哲學用語に則りしものなり。されど是等を採用したりとて、曖昧なる思想の體系に降參せしにはあらざるなり。基督教々義は、希臘形而上學と相聯關すと屢漠然として言ふものあれど、之れ

神智宗の  
例

師父らが  
定義構成  
の經過

事の真相を知らざるものなり。上述の語は、イエスキリストは、眞に神なりと言明せんとするには至適のものとして採用せしに過ぎずして、「質」若くは「體」と曰ふとも、之に關する何ら特殊の説をももたらせるにあらざることとは、「同質」なる語を用ひんと主張せる是等の人々すら、實に上述の如く、皆等しく神の本質は如何なるものなる乎知るべからずと主張せるものなりしにても知るべし。略言せば、基督教師父によりて用ひられし語は、從來の他の語意より離して、基督教信仰の特殊の點を示す爲に利用せしものなれば、若し師父の信經を持續せんごせば、之れいつまでも適用せらるべきものなり。神智宗の諸派は、種々東洋のお伽噺に類するが如きものを有して、嚴密の意味に於て、哲學的なりと云ひ得ずとするも、尙希臘語を單に利用せるに過ぎざると異りて、希臘思想が、基督教と合同せしならば、其の結果如何なる種類のものを生じたるべきやを示して餘りあり。然るに師父等が定義を構成するに至れる經過は、全く以上のものとは異にして、希臘思想がいつれどきに果して入り來れるやを明示することは難く、却つて師父らは徹頭徹尾基督教はユダヤ教よ



師父らは希臘思想を混入せず

境遇の感化力の誇張

り系統を曳きて、之れが完成を遂げ、其の絶極に達せるものなりとせり。われら師父の書を繙く毎に、最も古きユダヤ思想の根元より一段又一段と相連続して進み來れるを見る。舊約に於ける種々の神セオファニア現若くは神の現顯は、遂に肉體となりて現はれし「道」なりとせられ。ユダヤ聖書は他のものに比して、遙かに優秀なるを主張し、プラトリーの靈イソスピレーション感と稱せらるゝものも、畢竟之れ彼がモ―セの記録をよみしを證するものとなせるは、特に注意すべく。ユダヤ的の默示は、キリストの降生によりて發展せられて世界を包容し、遂に普公教會カトリックチャーチとなるに至れるも、其根源のユダヤ的なることは、彼等の誇りし所なり。されば彼等は、敢て希臘思想を信經の間に混入するなどは、思ひもよらぬことにして、又われらが研究しつゝある此中心的教理に關しても、不知不識に、しかせしなごとは夢にもあらざることなり。

われらが周圍よりうくる感化力は、屢誇張せらる。此場合に於ても然り。生物界に於ては、境遇如何は、有機體を變形することあるを知る。されど之は外部の狀態に適應する爲に、内部の勢力を刺激するときのみ生ず。境遇は何物も

三位一体の教義の成るの指導

創造せず、又する能はず。唯植物若くは生物のうちに、新特徴を發揮せしむるのみにして、其創造力は内部より來る。初代教會に於ける教義及び慣例の發達も亦之に似たり。其深刻なる特徴、其深刻なる活力、其深刻なる固有性は、希臘羅馬の生活及思想に發見せし最上最眞のものを捉へて、おのが用に供せしのみ。即ち周圍の境遇を利用して、自己の主張増進の手段となせしに過す。此に言ふ時代より後には、此事然る能はざるは勿論なり。そは腐敗無智の時代は來り、此間に外來の思想と慣習相混合したればなり。されど三位一体の教義が、形成を経つゝありし時代には、其形成の經過に關しては、初代の師父等は、唯使徒相傳の教説、特に聖パウロ及び聖ヨハネより受けしものを傳承せしのみにして、かつ其傳承せる方法は、約束せられし聖靈の斷へざる指導によれりと云ふは眞なり。

## 第七章 萬事は奥義に終る

ドクマ的の定義は傳承にして、説明にあらず。故に其性質消極的にして、奥義の説明を拒絶せり。

之れ今日にても其有効なる所以也。基督教々義は從來唱へられし如き外來の出所より籍り來れるものにあらず。

其奥義にも何等の差支なし。

そは自然神學にも多くの奥義あればなり。

物質科學に於けるも亦然り。

三位一体教義は實際にわれらの思想を助導す。

即ち神を形而上學的に絶對的存在者とする點に於て。

又道德的に神を絶對に聖なるものとする點に於て。

之れなくしては人間道德の恰當の基礎は求むべからず。

略言せば、此教義は神の人格の意義を更に闡明するものなり。

前數章に於て、三位一體の教義と稱せらるゝに至りしものゝ根本要義は神が人となりたまひしキリスト自身によりて示啓せられしものなりとする基督教の傳承的の信仰を保持するわれらの理由を概説したり。勿論以上の立場を維持せんとするには、インカーネーションを是認する種々複雑錯綜せる議論に依るべし

れば、從てインカーネーションなるものはあり得べからずとの假定よりする批評に反するは當然なり。加之インカーネーションを信する同一の理由は、此教義を註解するに於ても聖靈の斷へざる指導ありしを信せしむるが故に、後代の此教義に關する定義は、假定よわき人間のわざなりとするも、正當の途をたどりて過らざるやう神の指導ありしを信せしむ。此指導に關しては、種々甚く異なる意見の存するに拘らず、其實質に於ては相一致するを見る。たとへばアタナシウス及びアウガスチンの如き第一流の神學者は、此教義を説明する點に於ては著く異なるも。一方に於て共に等しく三個の神を信する三神説に陥らざるやうつとめ、他方に於ては、之を以て一神の三個の方面なりとする信仰を避けんとつとむるが如し。換言せば、兩人とも心中一體ユニチに於ける三一トリニチを懐抱したり。凡そ神に關する觀念は人二人寄れば、必ず異なる所ありと云ふは恐らく眞ならん。三位一體説に關しては殊に然るものあらん。從て種々の説は今日迄に多くあらはれしなり。されどかく異説紛々たればこそ、一個の定義を設くるの必要生じたるなれ。そは人々各おのが好むまゝに基督教黙示を解釋し、之を合理的にせん

とし。又之を説明して人々をして會得し得るに至らしめんとつとめられたればなり。此傾向に反對して教會の望める所は、前述の如く此默示を示啓せられしまゝに傳承するにありき。凡そ神が人に與ふる默示なるものは到底部分的なるを免かれず。われらは其内を窺ひ得べし、されど其全周囲を見廻す能はず。われらは其地的方面を見得るも、天的方面を見るを得ず。さればこそ最も明白なる默示すら奥義の衣をつけて存するなれ。神の存在の限りなき奥義は即ち之れなり。われらは默示せられしこと以上に出る能はず、又之よりして默示せられし以上のことを推論する能はず。もし之を傳達するの要ありとせば、其原來の形式に出來得る限り近からしめざるべからず。之れぞ即ちドグマ的定義の目的にして、本來の默示を最初の信者が受けかつ解せし如くに移し傳へんとするなり。師父が此目的に忠實ならんごつとめしは既に述べたるが如し。もし本來の默示が事實なりと信する以上は、更に進んで其默示を與へられしものらが、之を正當に註釋するに於ても、同じ指導ありしを信すべきなり。

師父が定義の精神

默示と奥義

ドグマの要

りしも之が爲なり、即ち其以上説明すべからざるものを説明せんとするを拒むにありき。そは基督教會の目的は實際的にして、其會員をして父なる神に對しては各自子なることを知り、子なる神に對しては之と交通を保ち、聖靈なる神によりて潔めらるゝことを得せしむるにあればなり。而て三位一體の教義は此事を永へに實現せしめ、幾代經ることも其力を新に感得せしむる者なり。アタナシアスも、アウガスチンも共に聖パウロ及び聖ヨハネにも勝りて神に關して知る所ありとは言はざりき。そは彼らは單に其等しく知れる所を、専門語に表明せしに過ぎざればなり。されどいづれの時代にありても、其知る所同一なり得るやう修練するの要あり。ドグマは即ち此不變同一の要件なり。ドグマは或はすべて抽象的言明には避くべからざる乾燥無味の所ありて、百合花若くは薔薇に關する植物學的記載の如く、又は音響の調律を音譜に記載するにも勝りて其主體に相似ざる所あるや知るべからず。されど之によりて、其主體の存在を常に念頭に止むることを得べく、其活力をわれらの時代に新に實驗し、主イエスキリストの恩寵、神の愛、聖靈の交通の力ある標象として繼承するを得せしむ。

用語の意

われらには此點に於て、師父の定義は今日にても尙有力なりと主張する所以は、之れキリスト自ら其弟子等に教へし所を、聖靈の指導によりて註釋せしに過ぎずとするが故なり。「人格」「實質」等の如き語は、時代の進歩と共に、其含蓄せる字義を多少變ずるやも知らず。されど其現用の意義は、從來のそれと矛盾するが如きとあらず、そは之れ自然の發達に過ぎざればなり。吾等は尙是等の語を用ひて、教會が從來常に教へ來りし教理「一體に於ける三位」、即ち一方に於てサベリウス説にあらず、他方に於て三神説にあらざる者を言明し得るなり。

三位一体は印度及埃及の古ラトイの神に異れり

此教理は、キリストによりて啓示せられたりとわれらが信する形式に於ては、他の人工的に配劑せる彼の印度のプラマとシバとビシユタに見るが如き三角同盟若くは埃及のオサイラスとアイシスとホーラスの神族のそれと明白に異なるものあるを見るなり。況んやプラトリーの説を布衍して、理性と創造者と世界とを以てせる三位一體に於ておや。加之此説は新プラトーン派よりも遙か以前にありしものなり。(此派の創設者アモニアス、サーカスは、もと基督者にして、信者の兩親によりて教養せられしことは注意すべきなり。)さればとて此説は、其

三位一体の教義は發明にあらざり

三位一体の被造物に於ける反映

後に至り説明の爲に用ひられし心理學的分析にも基せざるなり。略言せば此教理は發明せられしにあらず、默示せられしなり。『爾曹われを撰ばず、われ爾曹を撰べり』

之と共に、若し三位一体の教理にして眞なりとせば、若し世界と人類を創造せし神の衷に三位ありとせば、創造に於て之が反映なかるべからざることは、恰も神の屬性が、世界の美と秩序と目的、及び人の正義と愛と聖なることに反映せりと信するが如くならざるべからず。されば人間社會の單位たる家族が、主として父と母と子の三位一體によりてなり、又人の精神にも其構造上一種心理的三位一體あるを知るとき。是等のものは三一の創造者の被造物に於ける反映として見るを得べし。されど之れを以て直に三一の教義を暗示せる原因となすにあらずして、三一の事實の眞なる結果となすのみ。

智的反對

智識の方面より、此教理が神秘的なりとして、反對を唱ふるものあるは、屢聽くところにして。此教義はさなきだに困難なる神に關する觀念に、更に新なる困難を加ふるものなりとせらる。されど之れ果して然る乎。さること果してあ

り得べき乎。其困難を加へ得るものあるべき乎。

既に前に述べたる如く、師父等は異口同音に、神の存在を確信しつゝも、尙神の性質は、神の黙示によりての外、全く之を知るの途を有せざることを告白せ

近世の不可知説

の基礎

り。近世の不可知説アノスチシズムの根本に横はる所のものも亦此同一の不能也。自然神學ナチュラリキオロジーの

智識の出所は唯二個のみ。即ち物質世界と人の精神なり。而も兩者とも之れ變

幻極なきものにして、共に一個の創造者を示啓するに相違なければども、又時と

しては之を隠匿するが如く見ゆることなしとせず。星辰の驚く可きかの大運行

を指導する無限の力を有すると同時に、介殼の屈曲をつくり、昆蟲の羽毛を彩

色するの極微の用意を有する一個の存在者を意識せんとするに當り、われらの

想像は、全く無能なるを覺ゆるなり。創造にあらはれたる秩序、慈悲及び美は、

われらの思想を一方面に向はしむると共に、他方に於てわれらは有害なる動物

の跋扈するを見、「手足血に染みし自然」弱肉強食——のさまを見る。

仕業によりて仕業師を觀よ。

力あらはれたりや。充分也。智慧は。

之も足れり。さればいつくしみも然りや。

否人の目には今の狀にては未だし。

(アラウニング「指環と書物」)

人間の歴史にあらはるゝ所も、亦之にも劣らず人をして困惑せしむるもの多し。地球が人の住むに至るまでに長き準備ありしを思ひ、進んで驚くべき人體の機關と、其精神の更に驚く可き作用を爲すを思ふとき、われらは人に期待するに大事業を以てするも怪むに足らず。されどわれらは實際之を人に見ざるのみか、却て罪と悲、失敗と挫折を到處に見るは何ぞや。

此世に於ける人の一生とは何乎。

多くの人々は唯此處彼處と漂浪して、

くらひつ飲みつ語りつ、

愛し悪み、

あつまりてはまた散り、

上にあげらるゝかと思へば、

塵の中に投げ落され、

あてごなくあせりて、

何事も成就せず。

やがて遂に死し——滅び失すれば。

誰も彼等は何人にして何者なりしかさたづぬるものなし。

恰も之れ大洋の真中に

月光の下たゞさきの間、  
静けき波がうねりして泡だてしのは、  
そのいづくに消え亡せしかを人は問はざるに似たり。

マシエーアーノルド「ラグビー、チャペル」

人間のもてる器具は其成業に比例せず、一見當初の目論見は失敗に歸したるが如く想はしめ、時にはテニソンがうたひしアーサー王の語を繰返さしむ、

われは彼(神)を星のかやきのうちに見、  
われは彼を園の花の間に認めぬ。

されど人に對したまふ仕打のうちに彼を見ざるなり。

「テニソン王の短歌」

自然神教  
の欠點

以上の如き困難は、自然神學の積極的論定を無効とするものに非ざれども、其表明する光景をいたく隠蔽し又混雜せしめ。之が爲に單に自然によりて、神に關する明確にして一貫せる觀念を得べしと主張する事能はざらしむ。今日の思想家の中、多元説ポリアリズムを唱ふるものあれど、之れ多神教ポリダイモニズムを哲學的につくり易ふるに過ぎざるなり。又ミルが前世紀に預期せしが如く、古ベルシャに行はれしが如き、兩々相容れざる二元説デュアリズムをとらんとするもの也。されば基督教と其感化を受けし思想を除きては、近世的のものといへど、古代世界に勝りて進歩せる點は

多元説と  
多神教

物質科學

極めて僅少なりといふも、敢て過言にあらざるべし。されば自然神學を以て理解と明瞭の或標準を供ふるものとし、之によりて神に關する基督教的觀念を批判して、不利に陥らしむと思ふは、全く其當を得ざることなり。今日に於ては、われらは進むで物質科學に關しても、之と同一の言をなし得べし。

科學はわれらの目に見、手に觸るゝものを研究し、且實驗によりて證明し得るが故に、形而學上の捕捉すべからざる觀念よりも、遙かに優れたるものなりと思はれし時代ありき。されど今日にてはかゝる説を爲すものあらず。蓋は科學者は、エネルギーと物質の究極の性質を研究すればする程、其學說の實驗的證明を爲し能はざるに至るのみならず、想像説すら立つる能はざるに至ればなり。近世物理學の根本原則たるエーテルの構造に關する種々の臆説は之を證して餘あるにあらずや。物質、エネルギー、電氣等一切の現象は、此エーテルに據ると察せられあるも、之を言明するに於ては、標象的言語を用ふるの外なく、従つてわれらの通常の理解力を妨ぐるのみならず、却て真理に遠からしむ。之を想ふときは、他の場合に於けるが如くに、此にも古のスコラ學徒が言ひし如く

エーテル  
説

「萬事は  
奥義に終  
る」

科學の弱  
點

『萬事は奥義に終る』(Omnia exant in mysterium)を知るなり。  
かくて科學はわれらが現象と稱するもの、即ち五官にて經驗し得る範圍内に來るものを計算し試験し得るも、其經驗の據りて立つ竟極の條件に關しては、何等之と同様なる明確の觀念を與へ得ざるなり。科學は引力の法則を利用し得べし、されど之を説明する能はざるなり。科學は種々の目的に電氣を利用し得べし、されど電氣とは何かを説明する能はざるなり。従つて科學者は、形而上學者に向つて、おのれの如く明確なれと要求するを得ず。そはかれ自からも竟極事項に關しては、明確を欠けばなり。かくて思想とは、此兩者にとりては適當に捕捉し能はざる實在を暗示する表象的のものとならざるべからず。  
故に如何なる思想系統にも、其竟極的觀念に關しては、基督教思想よりも勝りて遙に簡結にして、明確なりと主張する能はざる也。共に皆其最後の逃場は奥義に包まる。されどわれらは此に一步進むで神に關する基督教觀念は、智的思辯の難問題と稱せらるゝものに對しても、少くとも他のものに勝りて、多くの光明を投ずるものなりと主張せんとす。既に述べたる如く、此基督教の觀念は

基督教の  
神に關す  
る觀念の  
優勝の點

三位一體  
の教義の  
思辨的の  
價値

神の絶体  
なるを知  
らんとす  
る二重の  
困難

決して思辯より出でしものにあらずして、單にキリストによりて、父と子と聖靈に關して默示せられしによる。加之之を更に布衍せんとせるものも、皆此の「默示せられし」「實際的」の性質を忘るゝことなかりき。之れ歴史的事實にして、人の徒らに非議するを容さざるものなれど、一旦人間の哲學と相拮抗するに當り、三位一體の教義は、此に其思辨的の價値を發揮し來る。そはわれらの最も難解の問題を解決する方向を示せば也。  
從來神の絶對なるを識らんとするには、常に二重の困難ありき。一は形而上格的を備へしものとするときは、形而上學的に云はゞ、神も一個の主體たらざるべからず。されど一個の主體とは經驗の主體、即ち經驗を経るもの、若くは經驗は此者の爲に存するを意味す。従て其對象として一個の客體若くは經驗の客體の存することゝなる。此に於て形而上學者は問ふ、神の場合には此客體なるものは何乎と。若し宇宙を以て此客體なりとするときは、神は自らを實現するには、自己以外のものに據らざるべからざることゝなる、若し然りとせば、神

の絶對なることは消失すべく、從て神の神たること止むべし。或は又宇宙は神自身の一個の方面のあらはれしものとして見ざる可らず。然りとせば之れ汎神論に陥るべく、從て神の人格は消失すべし。かくてわれらは結論して、若し一個の絶對にして永遠の主體なるものありとせば、神は其當然の絶對なることを維持する爲には、之に相應する絶對なる客體即ち永遠の經驗を有せざるべからずと言はざるを得ざるに至る

思想史に暗きものは、或は以上の言を以て三位一體の教義に就て熟考するとき現に生ずる智的狀態を描きて、此教義が如何に之に應ずるかを示さんとしつつ、あるなれば、之れ單に一個の循環論法に過ぎずと想像するものあらん。されど無論實際は全く之と反對にして、此困難は遠く基督紀元前、純然たる形而上學者としてのプラトール、アリストートルによりて、先づ論せらるゝ所ありき。就中アリストートルは其貴族的希臘風によりて、哲學的冥想は最も高貴の事業なり、從てこれ最も神にふさはしきものなりとし、從て神は相對的にして有限なる事物に關與する能はざれば、其冥想する處果して如何と問ひ。遂に結論し

希臘形而上學者の  
説と其不  
完の點

希臘哲學  
派より基  
督教學者

默示の本  
來の目的  
は實際的  
なり。

て、神は自己を冥想せざるべからず、即ち神は自己の客體たらざるべからずとせり。かく「知者の師」と稱せらるアリストートルが神の存在に關して結論せる觀念は、純粹の思想たるに相違なれど、彼は其以上に進まざりき、又之を進むるの手段をも有せざりき。されど希臘派の氣風の中に教養せられし哲學的思想家が、一旦基督信者となるや、彼等は三位一體の教義に智的啓發を發見するに至りしも怪むに足らず。數學上の計算によりて、既に預言せられし星を望遠鏡によりて發見するが如くに、此教義は直に哲學が唱ふる所の神の衷に於ける關係——即ち内部的なれど、其絶對的なるを害はざる關係の可能と實現の示啓となれり。之と共に此に言ふ思想家等は上述の如く、彼等の教義は哲學によらず、默示によりて來れるものなるを明確に知りかつ此默示の本來の目的は哲學的にあらずして、實際的にかつ道德的なるを知れり。されば彼等は其宗教を哲學に混同せしめず、又兩者の劃然たる區別を智識の霧にて蔽ふことなかりき。オリゲン及びアタナシアスの如き人々は、万事に率直簡易なる基督信者なりしも、又思想家なりしが故に、彼等はその信經が從來の思想上困惑の點なりとせ



られしものに投せる一道の新光を看取せざるを得ざりき。されど畢竟するに形而上學は常に人好きせざる題目なり。されば或教義が形而上學的の價値を有すといふときは、常人の眼には殆ど之れ無價値の如く見ゆ。故にわれらは、今より上述のものは、唯單に抽象的困難の一個特種の場合なるを示し、かつ特種の場合なる丈、多少具體的にして明白なるものなること、詳言せば、神の道德的に絶體なることを知るの困難を示さんとす。

われらは神を絶體的に聖なりと考ふ。存在者として聖なることは、神としての最も主要なる特質なりといふを得べし。之れユダヤ人が其預言者によりて、反覆習得せし處にして、遂に永へに失せざる世界の寶となれり。『神はその聖をもていひたまへり。』『われは汝等の神たる主、汝らの救主なるイスラエルの聖者也。』『エホバは其すべてのみわざに於て聖なり。』『其名を萬軍のエホバ、イスラエルの聖者といふ。』『此もの夜る晝る息すして云ふ、聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、主たる全能の神』と。以上の言はわれらの皆親く知る所、又其含意深きものなれば。試に單純なる有神論者即ち一神的若くはユニテリアンの有神論者に此

神は絶對  
的に聖な  
る事

意義は何乎と問ふとき、忽ち彼は困難に會するを見る。蓋、勿論われらは「聖」若くは「義」なる語を人間普通に用ふる意味に於て、神に適用するなればなり。かつ人は元來社交的存在物にして、其道德的品性は、主として種々の社會的關係に於て作らるゝものなればなり。勿論此他に個人的徳と稱して、謹慎と自制によりて成るものなしとせず。されど是等は他人との關係を含める眞の道德的生涯、即ち眞實、正義、慈悲、奉仕、同情、献身的の愛等の端緒に過ぎず。されば道德界に於ても亦主體には客體を要すを見る。

かく道德生涯とは、元來社交的生涯なりとせば、此に一個の疑問生じ來る。如何にして道德的屬性アットリビユトを神に適用すべき乎。是等の屬性は單に神が人若くは他の被造物との關係に於てのみなりや。或は單に神は正にして慈悲深く、其被造物に對しては愛ありといふに過ぎざる乎。若し然りとせば、神の義は其創造以外には潜勢的ポテンシャルのものにして、神が自ら現實になり得んが爲には被造物の存在を要することゝなるべし。されどかく云ふは、われらが徹頭徹尾神的なりとする神の屬性、即ちわれらが神なる語に附する屬性を現實にする爲には、神は被造

物に待たざる可らずといふに等し。かくては神が道徳的に絶対なりと云ふことは消え失すべし。之れ空想的の困難にあらず。アリストートルも之を認め、道徳的屬性は相對的にかつ偶然なるの故を以て、之を神に歸する事を否みれば、其結果神は尙其絶対なることを保てど、冷然として形而上的に自己を冥想するに過ぎざるものとなれり。嘗に之に止らず、かくては神に關するわれらの觀念は、混雜不明となるのみならず、われらの道徳も同時に其主要の基礎を失ふに至るべし。そは世界の總ての高尙なる倫理組織は皆神の性格の上に基すればなり。プラトンは曾て云へり。「人の義務は神となる迄に成長するにあり、之れ聖く正しく賢明なるべきを意味す」と。時としてはダンス、スコタスの如き神學者ありて、單に神の命令のみに道徳的屬性を歸し、善は神之を嘉したまふが故に善なりといへることなきにあらねど、之れ畢竟するに一個奇矯の説に過ぎず。かつ之を詳査するときは、其意味する所極めて薄弱なるを知る。そは神の意志は神の根本性質の表現に外ならざればなり。即ち聖トマスが云へるが如く「神の本質と其意向とは同一也」。勿論無神論者并に實利と幸福等の上に倫理を立つ

る實驗道徳家は、以上の困難の爲に影響をうくることなし。されど實利的有神論者にして、若し嚴密に其の信仰箇條を考案せんとせば、此の事容易ならざる問題なるべきも、三位一體の教義即ち神の中に存する其に永遠に在ます身位の教義は、此問題に新光明を投ずるものなり。そは此教義は、三神的意義に陥らざる様注意するとき、神を一個の社會的存在者若くは一個の社會なりと考ふるを得せしむればなり。更に安全なる語を用ふる時は、神の存在の様式は、人間社會の本位たる家族に於て、地上に於ける其おぼろげなる反映を見るときを得べく、從て神に固有なる種々の關係を成立しむる義殊に其絶極としての愛も、及び神の永遠にして主要の特性たる聖も、又彼が恐るべく假借する所なき絶對の權威を以て人間の良心に臨む道徳法たる「無上命令」も當然有り得べきこととなるべし。「われ聖ければ汝曹も聖潔なるべし」。天に在す父の完全さが如く、爾曹も完全くすべし。

神の聖  
此神の聖なる事は、われらが神たる人格に必至のものたるべきもの又たらざる可らずとするもの、一個特殊の例證若くは方面に過ぎず。若し神を人格的なり

とする以上は、其觀念の中に一種の複數を含めるは免る可らず。そは人格とは即ちかくの如き複數を含めばなり。人は個人的なると共に又必至的に社會的なり。人は社會を外にして己れを實現する能はず、眞の自己を實現する能はざるなり。人格とは此複數的關係を有するが故に孤獨の人格とは矛盾の語なり。以上の所論を概括すれば、三位一体の教義は、われらの智的困惑を増長するものにあらずして、却て之が救治を爲すものなるを示さんとするにありき。されどかく云ふと同時に、之れ人間思想の必要上然りとするも、尙若し默示によりてわれらに示されしにあらずとせば、上述の如き高尙にして驚畏すべき境にまで進み入らんとするは、人の皆寒心する所なる所を忘るべからず。基督教會は初此默示を以て人の心と意志に與へられし音れとして、其實際的の單純に於て之をうけたり。其偶思想界に解明せらるゝに至りしは徐々の事なり。されば今日に於て再び之が解明を試みんとするも、畢竟之れ人間の發明せしものにあらずして、上よりの音としてわれらに聞れしを信するが故なり。

概括

### 第八章 此教義の實功力

三位一体の教義は其功果に於ては著く實際的也。之れ系統的には在來の神に關するユダヤの最高の觀念を繼承せるものなり。其内に神の聖と人間の義務を包含せり。此教義は教會總會の抽象的言明によるにあらずキリストの具体的表明に基けり。其人々に與へし所は

- (1) 神の父なることに關する一層充分なる觀念
- (2) 神との交通の念

(A) インカーネーションによりて  
 (B) 贖罪によりて。之は父と子の愛より出でしもの  
 (C) 世界に多大の力たりし聖<sup>サラメント</sup> 莫によりて  
 (3) 個人、聖書及教會に於ける更に高尙なるインスピレーション  
 故に此教義は歴史的に其最も實際的なるを證せり

カウランドの説  
 十八世に於ける三位一體教義の大辯證家たりしウオターランドは、此教義は先づ充分明白にして又實際的なりとせり。其論法は今日よりも當時に適應せるものなれども。此區別を用ふるは益尠しとせず。既に上來此教義の明白なる點を論じたれば、今より此教義の實際的なる方面、即ち其有するとせらるゝ實功力

と、現に歴史的事實として既に世界に實施せられつゝあるものに論及せんとす。ウオーターランドが冒頭に言ふ所、頗る其當を得たり。

神に關する知識の動的關係

「神に關する正當なる知識と、之に相應する實行とは、思辨的の事にあらず、又看過放任すべき事にもあらずして。適切に實際的にして、其關する所も亦量るべからざるものなり。若し宗教的勤行は、幾分たりとも神に關する先入的智識と相待つ所ありとせば（現に然るが如く）、其勤行の完全は、此智識の完全に待たざるべからず。神に關して知る所若し漠として不明晰なるときは、神に對する勤行の規律も從て漠として不明晰のものとなるべし。之に反して神を知ること精細にして、かつ明確なるときは、之に仕ふるに於ても、精細にかつ明確なるべし」（ウオーターランド「三位一體の教義」第二章）。

流竄後のユダヤ人の神の觀念

凡そ神に關する觀念は、基督紀元前に於ては、流竄後のユダヤ人の中に見るものを以て、世界人種中最高のものなりとするは何人も否まざるべし。最も之に近きは波斯人なるも、其觀念は心靈的の點に於て劣るのみならず、二元説の弊に陥れり。ユダヤ人の此高尚なる觀念は、高尚にして心靈的なる道德を呼起し、

後代の詩篇によりて今日に反映せるを見る。

一體に於ける三位の教義は、系統上かくの如くに繼承せるものにして、其要領はユダヤ歴代の預言者の絶極にして、かつ終止となりし者（イエスキリスト）によりて、告げ示されしと信する理由あるは、既に前に述べたるが如し。此點よりせば、之れ預言者の默示の最後の語なり。かく此教義は過去の最も實際的な宗教、即ち神の聖きと人の義務に關して、最も明白なる確信を有せる宗教より出でたりとするも、此兩點に於ては、ユダヤ教よりは遙かに優秀なり。其神を示啓することは假令如何に奥妙なるものありとするも、遙に充分にしてかつ具體的にかつ之と相關する人間の義務に就て説く所も亦遙に完全なり。

インカール三位一體の教義を前定す

かく云へば、實際上三位一體をインカールより離す能はざるは無論なり。そは三位一體の存することは、インカールに必須なる前定に於て又其條件なればなり。されば此教義の實際的な點、其實行と相關する點は、之によりて幾分にもインカールを解するの助けとなるにあり。インカールによりて、われらは神と人との間に存する關係に就て最も深遠

なる智識を得たり。従てインカーネーションの信仰に伴ふ實効力は、又其信仰の根底に横はる神の觀念にも同様に伴ふべきなり。故にインカーネーションの教義の世界に及ぼせる影響のすべては、又等く三位一體の教義の及ぼせる影響と相等く又相別つべからざるものなり。

此教義は神に關する智識を増進せりと云ふときは、之れ教會總會によりて爲されたる抽象的の言明を指すにあらずして。キリストによりて爲されたる具體的にかつ描寫的の表明を意味するなり。

「神は其獨子を賜ふほどに世の人を愛したまへり」。

「われ父より出で、世に臨れり。復世を離て父に往かん」。

「われ訓慰師を父より遣らん、即ち父より出る真理の靈なり、其きたるときわが爲に證をなすべし」。「彼すなはち真理の靈の來らんとき、爾曹を導きて、凡の真理を知らしむべし」。

「未だ神を見し人あらず惟うみたまへる獨子すなはち父の懷に在者のみ之を彰せり」。

「神キリストにありて、世を己と和がしめたまへり」。

「聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」。

「聖靈みづから言難きの慨歎を以てわれらの爲に祈りぬ」。

以上は神學的抽象にあらずして、皆活如たる具體的描寫的のものなり。

三位一體の教義が世界に影響を與へしは即ちかゝる形式に於てなりき。イエスキリストの人格、其父と聖靈との間に存する關係の人格的なることは、形而上學者を困惑せしむることありとするも、通常の人々をして其心と良心に於て、神は人格的なりと悟らしめ得べし。神の人格に關する此感念は、理解せらるること少なけれど、感ぜらるゝ所深くして、基督教國の心靈的發達に重要欠くべからざるものなりき。即ち從來世界の進歩的人種なるを證せし人民の國民的生活并に其個人的生活に多大の感化を與へたり。

此點を今少く詳論するは無益にあらざるべし。先づ神の父なる事は、以前よりも更に深く解せらるゝに至れり。「父が、其の子をあはれむが如く、主は彼を恐るゝものにあはれみあり」。「父が………如く」、とは之れユダヤ教が到達せる頂

三位の人格的關係の問題

神の父なる事

點なり。されど基督教は永へにかつ本質的に父なるものと、永へにかつ本質的に子たるもの、教義に於ては尙遙に之よりも進めり。此點に關してはまたアタナシアスの言ふ所を引照するは益あるべし、曰く

アタナシ  
スの言  
ふ所

「父及び子なる名稱は唯神の場合に於てのみ一定不變なるべし。そは人にありては父と稱へらるゝものも、他の子たりしなるべく。子と稱へらるゝものも、他のものゝ父となるべければなり。されば人の場合には父と子なる名稱は、其正當の意味を保つこと難し。」かくて神にありてのみ「父」は正當に「父」と稱すべく。「子」は正當に「子」と稱せらるべし。而も此らの「父」と「子」に於てのみ「父」はいつまでも「父」、「子」はいつまでも「子」たるべし。

又曰ふ

神を呼ぶに當り、之を「子」より區別して、「父」と稱するは、單に其行業を見て「起源を有せざる者」と稱するよりも、遙に敬虔深くかつ精確也。そは後者は唯「道」によりて神の意志より生れる單獨的若くは總合的なる行業を指すに過ぎざればなり。されば「父」と云ふ稱號は「子」によりて初めて其意

神を「父」と呼ぶことは敬虔にして精確なり。

義と其關係を有することゝなる。「起源を有せざる者」とは「子」を知らざる希臘人の語なれど、父なる語は、われらの主によりて確認せられ、且保證せられしものなり。そは主は自ら誰の子たるかを知りて、「父われに居り、われ父に居る」、「われを見しものは父を見しなり」、「われと父とは一なり」と仰せられつゝも、われらに祈ることを教へたまふときは、「われら父よ……」と云へ」と仰せ給へばなり。

或は又

「われらは性質上被造物にして、神は「道」によりて、われらを造りたまへり。されど、われらは其子とせられてより後は、造物主たる神は又われらの「父」となれり。……われらは性來子にあらず、されどわれらの衷に在ます「子」は然り。……神は性來われらの父にあらず、されどわれらの衷に在ます「道の父」なり。われらは此「道」により又此「道」の故によりて、「アバ父よ」と呼ぶ。かくて「父」は誰にても、其衷に在ます「子」を見て、彼等の子と呼び「われ彼を生めり」と言ひたまふ。そは生むとは子ありて初めて其意義

明になるべく、作ることありて行業は初めて其意義明になるべければなり。さればかくわれらは初めには生れずして作られ、……後聖靈の恩寵を受くるによりて、われらも亦生れたりと言はるゝなり。

以上の如き文句を通讀するとき、教會師父の思想は、既に述べしが如く、極めて聖書的なるを明にするを知れど、本論の目的は、此等の文句が示す神を父とする觀念を究むるにあり。此觀念は管に其の具体的なる事、其完全なる事、又其の活躍たる實現に於ては、ユダヤ教及其の他の之れよりも先にありしすべてのものよりは進歩せるのみならず、又此の觀念は万民が——主人も奴婢も、老若も幼者も、賢者も無學者も——新にしてかつ完全の意義に於て、「われらの父」よと祈るものゝ共有物となりたり。かく神は父なりとの「一層特種にしてかつ明白なる觀念」よりして、われらは神と斯くの如き關係を有するものなりとの一層明白なる觀念は自ら湧き出づべし。一旦此の光明を得て後は、從來唯漠として神に依頼める念も、一層充分に自覺せる信賴の念となり、從來神の全能を畏敬せるの思は、其の愛を確信するによりて稍柔げらるゝに至り、道徳法

「われら  
父」の眞  
意義

神を父と  
するの信  
仰は實際  
的なり

人間の心  
靈的渴仰

祈禱と其  
外形の發  
表

に従ふと従はざるとは更に一層個人的の含意を有するとなれり。我儕の義務を盡すとは之神の律法を守ると、困難に逢ふとも之を神の聖旨として敢えて輕減せられんことを要めずして忍耐するにありと認めらる。かくの如くにして神を父とするの基督教の信仰は、頗ぶる實際的のものにして、神の人格に關する觀念を思辨的理論より移して、われらの日常生活と密接にしてかつ直接に相關與せるものとならしむ。同時に其の結果として日常の事件をみるに、われらの「父」なる神の注意の下にあるものとして、新しき意義と尊嚴を以てするに至る。

されど、神に對する依頼心は上述の如き行と思のみにては、到底われらの宗教的本能を悉く満足せしむるものにあらず。人は之以上をあえぎ求む。其あえぎは遠く人間の心靈歴史の初に遡るを得べく、人はおのれの道徳上其價なきを覺へつゝも尙神と交通せんことを望めり。之はやがて人をして祈禱を爲すに至らしめしものなるのみならず、又祈禱の外形にあらはれたる、(恐らくは祈禱よりも先になれる)禮式、犠牲、聖奠の方面に向はしむるに至れり。人は其身はすべて

身体と宗教

の罪の器具たるを明白に或は朦げながら之を知りつゝも、尙本能的に又必要を自覺して、其の身體をも其宗教の中に含めんことを願へり。種々の方法を設けて、齋戒と贖罪を圖らんとせるは之が爲なり。是等のことは近世の宗教比較研究により、われらの熟知する所なれば、此に詳論するの要なかるべし。唯一事の注意せんと欲するは、神と交通せんとするの願望、又其手段としての儀式的禮拜、<sup>サクラメント</sup>聖奠的食事及び代贖的犠牲（其進歩せると否からざるを問はず）は世界の實際的宗教に於て、歴史的に重要な位置を占むることなり。而て此宗教的本能の痛切なる要望は、永へに在ます聖子のインカーネーションの信仰によりて如何に満足せしめられ、純清にせられ、又聖化せられしかば、此に多言するの要なかるべし。されど、上述の如くインカーネーションは、三位一體に關する基督教の全教義と相離るべからず、かつ此篇の目的は此教義が其奧義の存するに拘らず、如何に痛切に實際的なるかを示すにあれば。先づ第一に注意すべきは、神が人間の能力に卑下せるものとしてのインカーネーションの單純なる方面なり。

神の交  
通を欲す  
其の願望  
其の手段  
其の歴史  
其の價値  
其の意義  
其の目的

（一）神が  
人間の能  
力に卑下  
せしめて  
おられる  
こと

インカー  
ネーション  
の目的

「生徒を愛する親切なる教師が、若し其中の或者が高尙なる課程を充分に會得し能はざる時は、自ら生徒の學力と同様の水平に下り、簡單なる手段によりて、之を教ふるが如く、神の「道」も然かなしき。人が神を深く思はずして……唯自然界と五官によりて知り得る所に之を探ねんとするを見て……神の「道」は自から一個の身體を探り、一個の人として、人の中に住みて、其情感を知り、人々をして主が其身體を以て爲すことによりて、真理を曉り、彼によりて父を知るに至らしめんとしたまへり。

「智慧」は人の能力をみて、真理は難澁の語にては解し難きも之を一の物語となして、賤か伏屋にも入り得るやうにせり。されば「道」も呼吸をなし人間の手をもて完全き行の業きをもて、すべての詩想にもまさりて力つ、信經中の信經をつくり出しぬ。此信經は東をつかぬるものも



家をたつるものも、さては墓を掘るものも、  
または礦脈のめぐりにさわだつ波を  
凄き眼にみまもるものもよみ得べし。(デニソンの「イン、メモリアム」)。

以上兩者を比較して感興を覺ゆるは、其時代の懸隔の甚き點にあり。アタナシア  
スが極力奮闘せし真理は、其後千九百年間、反對の勢力の間に嘲笑と輕蔑に逢  
ひしにも拘らず、今日尙依然として、其勢力は世界に衰へざるなり。

此勢力の秘訣は、唯單にインカーネーションの事實に基するのみならず又特に  
其贖罪の方面にも存す。さればさて贖罪の觀念は、基督教によりて初めて發明  
せられしものに非ざるを記憶するは必要なり。加之之は反對論者が屢言ふが如  
き歴史に於ける、用語の誤謬に非ずして、歴史は實に此事に充てり。凡へての  
大宗教すべての熱誠なる時代は、人は皆罪の念に心を奪れ、或は禁欲により或  
は犠牲によりて之を除き去らんと苦心せり。基督教の贖罪は即ち此世界到る處  
にみる需要に應ずるものなり。されど贖罪を論する時に常に忘る可らざる事は、  
基督教會は未だ曾て其性質に關して何等特殊の説を欽定せし事あらざる事なり。  
之に反して却て種々の説、若くは其變形せるものは、各時代に行はれたりき。初

インカー  
ネーション  
の贖罪  
的方面

基督教の  
贖罪

贖罪の事  
實と其説  
明

グレゴリ  
ナジアン  
センの説

贖罪に關  
する二點  
キリスト  
の降生  
は父なる  
神の愛に  
出づる事

代教會第一流の神學者グレゴリ、ナジアンゼンは、之を以て思辨的問題の一に  
して、假令其説誤る所ありとも、信者生涯に何等痛切の危害を及さざるものこそ  
り。されどわれらの見解如何にもせよ。此に二點の留意すべきものあり。第一は  
父なる神が罪人に對する愛は、キリスト降生の主因として明白に新約書に認識  
せられあることなり。「神は其生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へ  
り、此は凡て彼を信するものに亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり」。  
「神キリストにありて、世をおのれと和がしめたまへり」。「われら尙敵たりし時  
に、神は其子の死に由りて、われをおのれと和がしめたまへり」。此事は永代教  
會にありて遺憾なく感得せられたりき。ダイオグネタスに與へし美き書簡の記  
者は曰ふ「われらの惡其極に達し、其の結果の當然の罰と死が、われらを待て  
るとき……神はわれらを惡みたまはず、又は卻けたまはず、將われらの罪を  
心に留めたまはずして、長く忍び、かつ憐み深くして、其慈愛によりて、われ  
らの罪を自から負ひ、其聖子をわれらの代贖として、罪なきものを罪あるもの  
ゝ爲に、正き者を正からざるものゝ爲に與へたまへり。そは神の義の外、われ

（二）キリストの犠牲の代贖的なること、信者との一致の關係

らの罪を蔽ふ力他にあらんや。されば如何なる説にても、此根本真理と衝突するものは、皆非聖書的、非師父的にして、かつ如何に多くの基督信者によりて抱かるゝとも、之れ非基督教的たるべし。かゝる説こそ此贖罪の教義全體に疑を挿むに至らしめ、同時に基督教の名聲を人心に失ふに至らしめしものなれ。

第二に記應すべきは、キリストの犠牲の代贖的なる事と、之と相關的の真理即ちキリストが其信者との一致が次第に進み、遂に彼等をしてキリストが彼等の爲に爲せしことを眞實におのれ自から爲せし如く思ふに至らしむること、分離し若くは抽象的に考ふべからざること、なり。

「若キリスト爾曹にあらば、肉體は罪に縁りて死、靈魂は我に縁りて生きん」。

「聖靈自からわれらの靈を偕に、われらが神の子たるを證す、我儕もし子たらば又後嗣たらん、即ち神の後嗣にして、キリストと偕に後嗣たる者なり、我儕もし彼と偕に苦を受けなば、彼と偕に榮をも受くべし」。

贖罪に就て論ずるときは、此二點に留意することは必要なり。そは此二點は從

此教義の實効力

來、甚く誤解せられ又は誤り示されし爲、此教義を不合理にして信す可らざるものと思はしむるに至りたれば也。されど此に是以上には論ずる要なければ唯單に此教義が世界に及ぼせる實際の結果を知るに止むべし。此教義は無數の人々より罪の重荷を取去りて、新生の道を開くに至らしめは、歴史上の事實なり。

時は進み代は替るも、人々皆其實價を経験して知り、其意味を充分に説明し得ざる樸訥の者すら、其實効力を切に味ひたり。加之此教義は人の心に神の愛を信する信仰を深く印刻すること、他の何等の方法も之に及ぶものなく、幾多の殉教者や宣教師の熱心を惹起し、數へ盡せぬ人々の心靈生涯に活氣を帶ばしむるに至れり。世界の進歩は、人心を根底より一新して其最も高貴なる精力を開放し且増進せる此かくれたる感化力に負ふ所、實に量るべからざるなり。

かくてインカーネーションは、其の贖罪の効果を以てして、人心に久く潜める神と交り神と侶なることによりて赦免と平和を得んとする渴望を充たしめたり。されど其の影響を及せる所は、唯人性の心靈的方面のみにあらずして。禮拜と聖奠を一段高等の水平に引き上げ、從來行はれ來りし同種類のものに新意義を

興へ、更に人々をしておのれの身を神の意に適ふ「聖き活ける祭物として」神に献げしめ、其功果實に遠大なるものあるに至らしめたり。基督教禮拜、殊に聖餐を中心として生じたる諸種の争論の迹を尋ね之を批評するは容易なれど、誰か其の「キリストと偕に神の中に藏れ在る」半面、即ち世界の心靈歴史に於ける聖餐の能力を量り得ん。獅子に投げらるゝ前、之に陪せし殉教者にとりては、其功力如何なりし乎。北方森林に於ける孤獨の宣教師にとりては果して如何なりし乎。肉との激き戦に於ける禁欲者の多數の者にとりては果して如何なりし乎。信仰の爲に善き戦を爲せる教師説教者にとりては果して如何なりし乎。「誰も數へ盡すと能はざるほどの許多の人」、幾代の心悔ひ碎けし罪人、心の聖く謙りたる人々にとりてはし果て如何なりし乎。又今日の無數の人々にとりては果して如何、外部の世界は唯實際上の功果を認め得べけん、されど其秘れたる源泉を知る能はず。されば若しインカーチーションに於ける信仰と其後に横はる教義の力を知らんとせば、以上のものを悉く皆數へ量らざるべからざるなり。此外尙世界の歴史に重要な關係ある宗教意識の他の要素あり。即ち神の靈感に

聖餐の能

インスピ  
レーション

於ける信仰若くは感覺之れなり。之れ野蠻人の間にありては、一種の宗教的興奮若くは憑依<sup>フンシ</sup>即ち其固有の人格が、一時之が爲に停止せらるゝ形狀に於て屢之を認む。稍高等なる形式に於ては之を吠陀<sup>ビダ</sup>讚歌の作者の如き詩人の高等なるもの、若くは宗教上の大首動者、又は改革家に歸せらるゝとあり。基督教以前にありては、其最上の表現は、勿論希伯來預言者の意識によりて示されし事は、其一種不可思議の經驗「エホバの言われに臨みて」と彼等が屢言へるにても知らる。宗教に於ける此要素は聖靈に關する基督教の教義に於ても、此上なく實際的に高上せられ又切言せられたり。先づ聖靈の賜物は、特殊のものにあらずして基督信者にとりては、通常の事、即ち信者各が其分を得べきものとせり。第二に之は聖靈即ち聖き靈にして、人の體をして「聖靈の殿」となさしめ、又其行をして「聖靈の果」を結ばしむるものなりき。此意識は基督信者の道德生涯に新なる深刻と嚴肅と信任を興へ、先づ希臘羅馬の淫風亂倫に對して勝利を得せしめ、次で其後も此勝利を失ふことなく、逆境の間にも、地の眞の鹽たり又腐敗より逃れしむる社會の防腐劑たらしめたり。

聖靈の賜物

第三、<sup>みたま</sup>靈の作用は之れ一種神の内在によるなれども汎神的沒却とは正反對にして、之を受くるもの、固有の個人性を防げ又は蹂躪することなく、却て之に活力を添へしむ。聖パウロ曰ふ「賜物は殊なれども、靈は同じ」靈によりて智慧の言を賜り、或は同じ靈によりて智識の言を賜り或は………信仰を………或は………病を醫す能を………或は異能を行ひ或は預言し或は靈を辨へ或は方言をいひ或は方言を譯するの能を賜れり、然ど凡て此等の事を行ふ者は同く一靈なり彼その心のまゝに各人に頒與るなり。基督教史の全體を通じて、われらが見る所も亦之に異らず。大聖徒とは皆常に一種の特徴を有する男女の個人性なり。而もかく品性の個人的方面を深刻ならしむると共に、靈の一なることは平和の繁となり、人々をして、最も秘密なる社會的の合同を遂げしめぬ。「我等みな一靈に在りて、バプテスマをうけ一の體となれり」。勿論他の勢力のあるありて、<sup>同</sup>歴史上此合同を成すを防げ、今日にては基督教會全體より言へば、理想的状態に在りと云ひ能はざるに至りたれど、其各部分に於ては、靈の合同は其實力を發揮して彼等の行動に感化を與へ、充分此合同の實功を收めんことを翹望する精神

教會の合同

に活氣を帶ばしむるに至れり。

されど基督信者が、靈に歸する力は、唯此個人的内在の作用にて盡きず。此他に聖書のインスピレーションもあり。單に人間歴史に於ける一勢力として考ふるも、聖書は果して如何なるものなりしかは切言するの必要なからん。之れ其内容に因るのみならず、其内容が靈のインスピレーションの恐るべき權威を以て、「エホバの言、われに臨みて曰ふ………」と語るが故なり。

聖書のインスピレーション

此外又之と類似せる教會のインスピレーションあり。教會の役務は不評判なる真理を世界に揭示するにありき。其歴史は各種の失望に逆へる奮心勇闘にありき。或は暴虐なる壓迫に對し、或は智的批評、若くは敬遠的の輕侮に對して戦ふにありき。時としては亦甚だしき内部の腐敗あり、教理の不調若くは信仰の失墜も此間に乘するありき。而も是等の障害と戦ひし男女の傳記を讀みて、其相次で起れる敵も遂には皆亡せ去りて、信仰は尙依然として存するを見る時、成功の秘訣は即ち靈が教會の内に永へに在すを確信せるにありしを知るなり。されば此にも亦基督教々義は著く實際的なるを見る。

教會のインスピレーション

教會の使命

されば此章に於て論じ來れる所は頗る明白なり。あまりに明白にして、此に反覆するの要なきほどなり。されど事はあまりに熟知するに従ひ、之を輕侮するに至り、延てわれらの熟知せる眞理は、屢其の明白なることの爲に、却て其意義を失ふことなしとせず。此場合に於けるも亦かくの如くにして、以上解説せし事實は、主として其背後に横はる教義によれるものなることは、常に全く忘却せらるゝが故に、此章の目的は三位一体の基督教々義は事實上極めて實際的のものなるを明かにするにありき。此の教義を形成する各要素は神に關する思想を種々の點より人の心に充分綿密にかつ有功的に納得せしめたると同時に、全體としては、われらの宗教的本能の要求の一切を包含し、かつ満足せしむ。加之、凡そ人の宗教は、其眞實なる場合には決して之れ孤立せる事にあらずして、必ず其人の俗事に於ける精力と密接の關係あるものなり。かくて基督教國の宗教的發達を指導せし力は、又俗的の方面の發達、即ち詩歌、繪畫、音樂、哲學、文學、法律に於て、又社會及び政治の改善にも深き影響を與へたり。之れ畢竟するに唯單に、又主として人々の理想を指導せるのみならずして、人々の

基督教の  
俗的方面  
に於ける  
實効

道德的自由を恢復せるに由りてなりき、そはこれなくば理想も功なければなり。世界の進歩的人種と稱せらるゝものゝ發達は假令幾分か其人種的特色に依るとは云へ、又其宗教に依れること更に之よりも大なるは歴史の明に示す所なり。されど其宗教と云ふも、外形的批評學者が見るが如き、爭論的のものにあらずして、各時代の人々の生命を刷新して、其最上の精力を自由に、發揮せしめたる内部的宗教に因れり。

されば三位一体の教義に關して、其形而上的性質若くは抽象的性質より反對論を唱ふるものある時、われらは確信を以て此教義の具體的局面を指摘するを可とす。げに此教義たるや到底われらの理解以上なる他の何等の觀念よりも遙に勝りて、理解し易きと云ふにあらざれど、神と人との關係に關しては、他の何らのものよりも明かに明瞭に之を理解せしめ、從て歴史の裏面を窺ふときは、他の諸勢力中最も實際的なるを證するものなり。

### 第九章 其價值は其眞理を假定す

此教義の實際的功力は眞理の假定を作るものなりと既に述べたり之れ果して正當なる乎。價値の断定と眞理の断定との區別はカントより、ロツツエを経てリツツチュルに到れり。されど之れ誇張すべきにあらず。蓋すべての断定は畢竟するに人格的なり、即ちわれらの全人格より出るものなればなり。殊に宗教的断定に於て然りとす。されど人は一個の合理的の世界に於ける一個の合理的の住者たると共に。又一個の心靈界に於ける一個の心靈的住者なり。而て人の理性は此兩者の合一を要望し、心靈的價値を有するものは、又合理的に眞理なるべしと要求す。

たさへば、若し此世界は合理的に秩序整然たるものなりとせば、われらの心靈的生命に對する神の價値は神の存在の假定たるべし。故にわれらの道德的及心靈的渴仰を合理的に満足せしむる唯一の宗教の下に横はる教義は眞理なりとの假定は成立すべし。他の宗教たさへば佛教及回々教も、其歸依者を等く満足せしむるにあらずやとの反對説。されど佛教の據りて立つ所は世界は非合理的なりとの信仰也。回々教は人間の人格の權利を否定す。されば兩者とも理性の要求を満足せしむる能はず、故に是等は相對的宗教なれども基督教は之に反して絕對的宗教として存在す。

眞理と眞  
係との關

右に關し  
カント及  
ロツツエ  
の所論

眞理の斷  
定

前章の目的は、三位一體の教義は歴史上の一事實として、有神説が、最も密接にかつ最も有効に人生に強き影響を與へし形式なるを示し、從て此事實は此教義の眞理なりとする一大假定を形成するものなるを意味する事、かつ之は或默示の當然の結果たるべきを示さんとするにありき。されど論じて此に至れば、近時多く論せられつゝある價値と眞理との關係の問題に觸れ來る故此點を一考する要なしとせず。曰く事物の價値よりして如何ほどまで其確實に論及し得る乎。價値とは果して眞理を示すものなりや。

われらが常に用ふる價値の断定と眞理の断定との區別は、カントが純正理性と實驗理性とを分離せる時より始まり。ロツツエは尙進むで、一方に於て價値即價格を定むる審美上及倫理上の目的と、他方に於て眞理を定むる智識上の目的との間の區別を立てたり。されば眞理の断定とは、一事物がわれらの智力に對して何を意味する乎の言明なり、換言せばわれらが其事物に關して知る所如何にあり、然るに一事物の價値即ち價格とは、其ものがわれらの感情及意志に對して、何を意味するやの言明、換言せばわれら其ものに對して、如何ほどの所

望ありや否にあり。故に前者の斷定は一旦證明せられ、確實とせらるゝときは、非人格的<sup>イムパーソナル</sup>の獨立的即ち特殊の人に關係なきものとならんとするの傾あれど、後者は常に一個人若しくは數個人の個人的嗜好となる。たとへばわれらの今の論題に於ては、「イエス、キリストはポンテオ、ピラトの時に十字架に釘付られぬ」とは一個の眞理の斷定たるべし。即ち一般の人々をして同意せしむる歴史的眞理にして、非人格的に事實を表明せるものなり。されど「キリストはわれらの爲に死せり」と云は、之れ一個の價値の斷定即ち其死はわれらの爲なるを言明せるものにして、唯人格的信者によりてのみ爲さるべきものなり。

リシユルは更にロツチエの此區別より歩を進めて、其神學的意義を切言せしは、皆人の知る所にして。神に關する觀念は唯價値の斷定によりてのみ表明せられ得べく、從て神學の成立するは唯此種の斷定にのみ因れりとせり。今此に彼の此特殊の系統<sup>システム</sup>を論せんとするにあらず、唯、彼がかく通俗的に唱へし區別に留意せば足れり。

先づカントが其純正理性論を實驗理性論より別ちし分離は頗る不充分のものな

抽象的事  
件と具体  
的事

りとは早く人の認めし所也。從て之により生ぜし斷定の區別も亦不充分なるを免がれず。抽象的には兩者の區別はあるべし、されど現實生活の具體的思想にありては兩者は互に相錯綜せり。たとへば智識は好奇心より發して、之を満足せしめんと求む。されど最初の好奇心即ち満足せしめられざる願望も、最後の満足即ち其願望成就せる安心も、共に其最極まで分拆するときには尙感情上の状態たるを免がれず、而も此兩者の間の智識上の経過は意志の間斷なき活動を意味す。之と同じく一個の美術品若しくは勇敢なる行爲の價値を定むるに於ても、若し眞面目に之を評價せんとするに於ては、其状態若しくは内容を一種智力上—嚴密の意味に於ける智力上の鑑賞を経ざるべからず。されば此に謂ふ區別なるものは、斷定の二個の異なる種類と云ふよりは、むしろすべての斷定に共通なる種々の成分の比例の差異なるべし。そはすべての斷定は當然かつ最終の分拆に於て人格的なればなり。即ち全人格の活動より生ずるものなればなり。然るに一層抽象的の科學にありては、人格的分子は極少量にして、人工的に之を分拆し得るも、具體的事件にありては、此人格的分子は其極大量に達し、之が爲に

宗教は具  
体的なり

信仰と教  
義

神に關す  
る眞智識

結果に及ぼす影響大なり。而して宗教ほど具體的のものは他にあらず。そはわれらの全生のあらゆる能力の信服を要すればなり。

故に神學上の教義を正當に諒解するには、信者各自の信仰は、必至のものなりと云ふは眞なり。此の點は今日多く見るが如き反對家の爲す神學上の批評に對して充分勢言するの必要あり。「潔らば主に見ゆることを得ざるなり」。人若し「教義を充分知らんとせば」「信じて」「之れを行はざるべからず」。されど「信すること」「行ふことも」盲目的に爲すにあらずして、其の信も其に背後に智的斷定を控ふ。此の斷定を明確に保たんとするは、常に彼等の志す所なり。神に關する唯一の眞の智識とは、神とおのれとの間に存する人格的の關係を経験するにあるは眞なり。若し一旦此終點に達する時は、其の來し道を再びたどり返すの要なきも、假令多數信者の中には之を言語に表明し得るもの稀なりとするも、苟も此の道をたざらんとするものには、概して智的なる種々の前定を置かずしては全く出發する能はざるなり。そは「蓋神に來る者は神あるを信じ、又神は必ず己を求る者に報償を賜ふ者なるを信すべければ也」。年少なる者、若

基督教の  
社會的智  
義の眞智  
識の表明

教義解釋  
に於ける  
智識と信  
仰

くは朴直なる者は、<sup>オソリチ</sup>權威によりて之を認め、又之に類する眞理も受け得べし。さればとて之が爲に其智的の性質は變せざることは、恰も通常の信者が科學上の發明を人より聽きて之を受くると異なるなし。加之、基督教の社會は教育的にして、かつ傳道的也。其事業の多大の部分は、人々を其未だ曾て有せしことなき心靈的の經驗の境内につれ來ることなり。之れが爲には、教義を智的に表明するは必要避くべからざるなり。從て其表明を忍ばざるべからず、加之其表明は常に合理的なるのみならず、價值あり、かつ多くの場合其價值が檢試せらるゝに先ち合理的のものならざるべからず。

されば基督教々義は全く價値の斷定の上に立てり云ふは、假令之れ肝要なる眞理の誇張なりとするも、尙容易ならざる誇張なるを免かれず。此眞理は何等新奇のものにあらずして、基督教の古きが如く古きものなり。「教義を知らんと欲するものは、之を知るを得べし」。彼等の聽く言の彼らを益せざるは、其聽くところ信するところに伴はざるが故なり。智識にて教義を解するは、之を以ておのが人格的の經驗と爲し延て之をわれらにとりて眞なるものと爲ならしむる



信仰と分離するとき、價值なきものとなるべけれど、信仰も亦教義を正當に智識上より會得するに必要なり。たとへば、キリストの身位（ガイ）を神的なりとする信仰はキリストの生涯と事業を默示として見る見解と大なる關係を有し。又教會が聖靈の指導の下にありとの信仰も、教義の發達に關するわれらの見解と大に關係を有するが如し。かくて信仰は、解釋に欠く可らざる種々の前定と原則を與ふるものなり。

此事は又現今論究せられつゝある更に他の問題と交渉する所あらしむ。價值よりする斷定即ち信仰が其主要分をなす斷定は、如何なる程度まで、其證明する所眞實なりや。換言すれば、今日の常用語なる客觀的に眞實なりや。たとへばわが身にとりて神を信する信仰は現に最大の價值ありと言ふ事は、神は存在すと云ふ何等の證明となるや。或は世界に對するキリストの價值は、キリストは神たりと云ふ何等の證明となるや。かくてわれらは此には上述のカントが純正理性論を實驗理性論より分離せる惡影響即ち抽象的に價值を斷定するの危険を見る。蓋若し價值の斷定は全く形而上的の錯綜を欠くものとせば、而て若し之

價值より  
の斷定

は嚴密にかつ文字通に價值を表示するに止りて、其以外に何物もなしとせば、是等の斷定は其以上に一步も出づる能はざるは論理上無論の事也。蓋信仰は如何なるものにて、有用なりとのことは、論理上直ちに其信仰は眞なりと證明するものにあらざればなり。されど價值の斷定が實際生活に行はるときは、果して眞にさる抽象的の性質のものなりや。是等は結局形而上的なるものと常に錯綜しあるにあらざる乎。先づ考ふべきは上述の如く是等の斷定は、人格的にして一個人若くは一己の斷定たることなり。凡そ人は自から回想するとき、おのれは合理的にして、かつ理解し得べき一個の世界に於ける一個の合理的存在者たるを悟る。勿論世には世界の合理的なることを否定し、從て智識の可能性を否定する少數者なきにあらざれど、今日の科學の前には、かくの如き懷疑説を維持するは、昔プラトール、及ヒアリストートルが反對せし時よりも更に難し。そは科學は、唯此世界は理解し得べきものなり從て之を知り得べしとの假定の上のみ成立し得るものなればなり。ウラナスの有名なる發明の如き預言が、いつにても適中する毎に、自然の秘密は新に發見せられて、人の用に供せらる

科學の成  
立する基  
地

毎に、又一個の器械にても藥品にても、先見せる効果を得る毎に、此假定の眞なることは證明せらる。是等は斷えず生じつゝあるものにして、物質世界は知られ得べきもの、即ち合理的に秩序整然たるものなるを、實際上に證明するものなり。之を頼みとして科學者は自然界に於ける今日尙未知の部分も、遂には何時か知られ得べしと全く確認するなり。

されどかく人は自から合理的なるを知り、又合理的に秩序整然たる物質世界に住む者なるを知ると共に、又自から一個の道德的にかつ心靈的存在者にして、良心によりて(其如何にして之を得しかに關せず)善惡を識別し、又人と心靈的交通を爲さんと欲し、其極、神と交らんことを欲するものなるを知る。加之是等の道德的及心靈的特性は其理性と相聯關すること頗る美妙なるものあり。是等は理性が活動する其全人格と離すべからざる分子なり。理性が合理的のものを要求するはいづれの方面に於けるも相同じ。理性は道德界并に心靈界はともに物質界に於けるが如く合理的に秩序整然たるべしと要望し若くは假定す。此事はわれらの道德的若くは心靈的渴仰が遂に成遂せられ、從て正當視せらるゝこと

人の心靈は道德的存在の自覚

人の心靈は理性の關係

きに、初めて成就すべし。われらが自然界に於て最高のものなりと知る人の性質にして、若し支離滅裂たるべきものなりとせば、而て之は萬物に優る特徴を有するが故なりとせば、世界は實に非合理的なるべく、又目的あるが如く見ゆるものも畢竟何らの目的もなきことゝなるべし。されどわれらは既に自然の一部分たる物質世界は合理的なるを知れば、理性は之によりて其殘餘のものも合理的なるべしと假定して正當なるべし。加之、此假定は其處此處に部分的の(或は甚く部分的なるやも知らず)確證を得たり。そは崇高なる努力、若くは高德なる經驗も、人間の人格は、現在の制限の許す限り、其當然あるべき状態を實現するに堪ふるものなるを示せばなり。換言せば、理性の要求する所のものを實現するに堪へ、從て眞に合理的となり、又理性に適應するものなるを示せばなり。かくてわれらは次第にわれらの道德的理想を完全に實現する爲、又神と交通せんとするの渴望の正當なるを示す爲に、神は存在せざる可らずと結論するに至らしめらる。且われらの推論法は、科學者が自然界の現象の部分的の智識よりして、一定の時と場合に應じて、何時かは相當に知り得るものに結論するに

至ると同様の論法なるを看過すべからざるなり。  
此論法はわれらの熟知する所のものなれば之に關しては之以上此に云ふの必要  
なかるべし。そはわれらの此に知らんとする所は、此論法が證明する所如何に  
あらずして、其證明の性質と其價值若くは價格より論及して實在若くは眞理に  
推論するの關係にあればなり。そは實際生活にありては、上述の如く價值を抽  
象的に論せずして、特殊の連絡關係コンタクト即ち合理的にして、或る目的の下に統一せ  
られある此世界の含意によりて定むるは、言ふを待たずして明白なり。換言せ  
ば、合理的にして、其理性は必ず其判定のすべてに滲透しかつ影響を及ぼすべ  
き一身分によりて評價せらるゝ價值を論ずるなり。  
されば此に云ふ神の存在に關する道徳的推論も人生より離すべからざる一個有  
功の臆説ハイポセシスよりせる盲目的の要求假定ポステュレートにあらずして、世界の合理的なることを大  
前提とせる有力なる推論法也。そは若しわれらの信ずる如く、世界は合理的に  
秩序整然たるものなりとせば、われらの道徳及心靈生涯に於ける神の價值、即  
ち神の存在の必要は、其の生涯が理性の要求するが如く理想を最も完全に實現

し得る場合には、神は存在すとの最も強き假定を供するものなれば也。此特殊  
の場合には、われらは價值より確證に、價格ワグスより眞理に、必要より實在に推論  
するなり。而も之をなすは嚴密なる合理的過程を経るものにして、假令之れ實  
地證明といふまでにあらずとするも、道徳上確實なるものとして、多くの人々  
が認むる丈の度に達せしむるなり。他の通常價值より實在に及ぼす推論は、此  
の如く有力ならざるやも知らず。されどわれらの此に勢言せんとする要點は、  
凡そ何時にても或事物の價值が、概して言ふとき此世界の合理なる事と密接の  
關係ある事を示し得る場合には、此事實によりて、之は一個合理的の假定なる  
を確證するものにして、單に其實在若くは眞理の要求假定ポステュレートと異なることにあり。  
以上の點よりして、われらは此に再び三位一体の教義が、世界に對して有する  
歴史上の一事件としての價值即ち必要と其より出る結論に關して、前章に略説  
せし點に還る。三位一体の教義は、有神論の一形式としては、其の後援として、  
有神論の爲に有利なるすべての複雑重疊せる議論を有せり。有神論も、亦何時  
何處にも見らるゝ人の神と交通を欲する願望と關聯して考ふる時は、かくの如

インスピ  
ションは  
人格を  
通して  
與へら  
れて  
し  
默示

イエスキ  
リストに  
關する  
會の信  
仰

三位一体  
に關する  
默示

三位一体  
の教義の  
根本的肝  
要

き交通を最高の度に實現するを得せしむべき或默示の出現を可能とする一個絶大の假定を作り出すなり。われらはかくの如き默示は只人間の人格を通じてのみ成就せらるべしと考へ得べし。かつかくの如き人間の人格を通じての默示が、採用し得る最も完全なる形式は、神の化身降生インカーネーションにあるべしと思ふの外なし。

基督教會はイエスキリストは其自ら爲せし主張と、又其自ら建設し、かつ之を指導して、すべての眞理を悟らしむる様心靈上の指導を與へんと約束せし社會(團體)が解釋せる所によりて、神の化身降生せるものなりと信じ來たり。教會の信する處によれば、イエスキリストは神の内に父と子と聖靈の存するを示啓し給へり。此の示啓を傳達する爲に、教會は後に之れを組織構成して、「一體に於ける三位の教義」となしたり。是等は智識上の前定プレラガジション、又哲學的にかつ歴史的なる連絡關係にして、これらによりて、この教義が人類の爲に有せる必要即ち價値を判せざるべからず。其の必要なることは唯一句にて之を盡すを得べし、曰く此教義は基督教會存在の根底に横はるものなりと。此基督教會とは、いづれの時代にも、之に屬する眞の會員たりしもの、又現に今日の會員たる

ものにも同様に、默示の元來の目的たる神との交通を充分有功に理解せしめ、從て人生を聖別し又堅實にするものなり。「之によりてわれら彼に在り。彼われらに在るを知る、蓋彼われらに其靈を與へたまひたればなり」。

前に述べたるが如く此世界の合理的なる事の一條件は、われらの道德的若くは必靈的の渴アスピレーション望を満足せしむる事にあり。若し此渴望にしていつまでも無効に歸するものあらば、われらの理性も亦信を措くに足らざるべし。されば此地上の制限の許す限に於て、此渴望を合理的に且眞實に満足せしむる宗教既に過去及現在の勢力によりて、確定せられたる權威を以て、今後も尙充分恰當に此渴望を成就せしむ可しと保證する宗教こそ、他の議論は兎も角も、人間の價値と世界の合理性との關係より想ひ及して眞實のものならんと略結論するを得べき也。

此種の議論は「證明し過ぐ」として、屢反對するものなり。そは若し之れが果して一個の取るべき説なりとせば、他の宗教にても之に歸依するものに満足を與ふるが故に、之れ亦等しく眞實のものたるべければなり。佛教及回々教は此點に於て屢引用せらるゝ宗教也。されば第一に注意すべきは、われらは其合